

考えるための日本語ー日本と私ー

ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト
報告

はじめに―「考えるための日本語―日本と私―」

ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクトについて―

このプロジェクトは、早稲田大学大学院日本語教育研究科大学院生とイタリア・ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学東洋北アフリカ研究学科との交流を行い、1ヶ月間の準備期間を経て3日間のワークショップを行い、最終的に対話レポート（共通テーマ：日本と私）を作成するものです。

イタリアの日本語学習者の一人ひとりの思いを文字化し、丁寧に対話を重ねることで、個と個の関係を築き、これまでの日伊両国の交流と信頼の関係を確認するとともに、今後の日伊関係の発展にも寄与したいと考えました。

特に今回は、イタリア・ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学東洋北アフリカ研究学科にてワークショップを行い、さらに、このワークショップ終了後、研究集会を行い、各自の教育研究活動について口頭発表を行いました。

この活動は、複言語・複文化主義教育に基づく行動中心主義的言語教育の実践の一つとして行われるもので、来たるべき複言語複文化状況に対応する新しい日本語教育実践の一つのモデルを示すものです。特に、多文化共生社会における外国人学習者の量的増加と質的変容に対応する日本語教育として、まず学習者のアイデンティティ形成に関わる活動型日本語教育実践を提唱し、それを実践する教師の養成・研修プログラムを開発するとともに、その制度的な導入をめざしたシステムの実施を図ろうとするものの一環として行われました。

プロジェクト責任者として

細川 英雄

※本プロジェクトは、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学東洋北アフリカ研究学科との共同研究として行われました。

※本プロジェクトの活動は、以下の研究助成を受けています。

科学研究費補助金・基盤研究（A）「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で利用できる共通言語教育枠の総合研究」（課題番号：23242030 研究代表者：西山教行〈京都大学〉）

目 次

はじめに

—「考えるための日本語—日本と私—」

ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクトについて・・・・・・・・・・・・・1

細川英雄

【実践概要】

「考えるための日本語—日本と私—」

ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト概要・・・・・・・・・・・・・4

細川英雄

「考えるための日本語」の言語教育理念と「考えるための日本語—日本と私—」

ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクトのプロセス・・・・・・・・・・・・・11

古屋憲章

外国・イタリア・カ・フォスカリ大学における

「考えるための日本語」ワークショップをめぐる様々な考察・・・・・・・・・・・・・15

マルチェッラ・マリオッティ

【実践報告】

《報告1》

「間違える」という意識をもたらしたもの

—参加者ジーナの意識の変遷から—・・・・・・・・・・・・・20

平澤栄子

《報告2》

日本と私をつなぐ意味

—日本語活動実践で参加者が得た副産物に注目して—・・・・・・・・・・・・・38

道端輝子・工藤理恵

《報告3》

ネット対話プロジェクトにおけるテーマの発見が意味することとは何か・・・・・・・・・・・・・55

鄭京姫

《報告4》

「考えるための日本語」の意味と可能性

—メンターの役割への気づきから— 74

小山いずみ・古屋憲章

《報告5》

対話を通じて見つけた自分の考えと語り合える仲間

—エマとパオラが行った他の参加者とのやり取りの意味— 93

岡田みなみ

《報告6》

「チーム思いやり」の3人はなぜ自分の更なる理解に至ったのか 112

松島調

【講演録】

言語教育におけるメディエーションの意味（第12回言語文化教育研究会 講演） 130

細川英雄

「考えるための日本語—日本と私—」 ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト概要

細川英雄

活動の目的—何をを目指して対話するのか、特に学生の参加者にとってのメリットは何か

ここでは、イタリア日本語学習者とともに、「日本と私」というテーマでレポート（「テーマの動機」＋「対話の内容」＋「結論」＋「終わりに」＝私にとってのこの活動の意味）を書く活動を展開します。なぜ自分は日本に興味・関心を持つのか、自分にとって日本とは何かというテーマは、日本語を学習する学生にとって不可避の課題であると考えられるからです。この課題を日本人大学院生とともに考える機会をつくることで、学習への動機をより高めることを目的としました。このことは、日本についてそれぞれの持つステレオタイプの見直しとも関連し、個人の中での新しい日本の発見と理解につながると考えるからです。同時に、日本人との接触機会の少ない地方都市の環境において日本語によるワークショップに向けた日本語使用の量的・質的向上を図ることにもなると考えました。

活動の手順—何をどのような段取りで進めたか、特に遠隔プロジェクトはどのように組織されたか

まず早稲田側で担当チームを結成し、細川の作成した「考えるための日本語—日本と私—」を説明するスライド（本稿末尾の資料を参照）にもとづき、活動の手順を話し合いました。その活動は、講義ビデオ「考えるための日本語—日本と私—」を見たカ・フォスカリ大学東洋北アフリカ研究学科の学生に対し、早稲田側の大学院生が、さまざまな働きかけをすることで、カ・フォスカリ大学東洋北アフリカ研究学科の学生のレポートが少しずつできあがっていくというプロセスです。最終的に、3月4、5、6、8日のカ・フォスカリ大学東洋北アフリカ研究学科におけるワークショップにおいて、参加者・関係者全員が対面での話し合いを行いました。

参加者の役割—ヴェネツィア側の学生、ヴェネツィア側の教員、早稲田側の参加者のそれぞれの役割は何か

ヴェネツィア側の学生は、講義ビデオの指示とメンターとのやりとりにより、「テーマの動機」を完成させ、ワークショップに備えました。

ヴェネツィア側の教員は、上述した活動の目的をヴェネツィア側の学生に説明するとともに、参加者を募り、参加手順を説明しつつ、活動のプロセスを共有し、場合によって、活動への参加、活性化の促しを行いました。

早稲田側の参加者は、メンターとして、ヴェネツィア側の学生のレポート作成を支援し、それぞれが自分にしか書けないレポートを完成できるよう、水先案内人の役を務めました。

活動スケジュール

2013 年

1 月初旬	ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト（以下「プロジェクト」） 参加学生の募集開始
1 月 21 日（月）	「プロジェクト」説明会
2 月 4 日（月）	事前活動用 BBS 開設 参加学生、早稲田型参加メンバー（メンター）の自己紹介開始
2 月 6 日（水）	「プロジェクト」参加学生確定→「プロジェクト」開始 細川英雄先生による講義ビデオ「考えるための日本語—日本と私—」（全 8 回）視聴開始
2 月 9 日（土）	事前活動用 BBS を Google グループへ移行
2 月 12 日（火） ～3 月 3 日（日）	「テーマの動機」（1 回目）を提出 ↓ Google グループ上でメンターとやりとり ↓ 「テーマの動機」（2 回目）を提出
3 月 2 日（土）	早稲田型参加メンバー、ヴェネツィア入り
3 月 3 日（日）	早稲田型参加メンバー打ち合わせ
3 月 4 日（月）	【ワークショップ 1 日目】 ①自己紹介とレポートテーマの紹介 ②グループ作り ③「テーマの動機」の読み合わせ→検討 ④対話に関する相談
3 月 5 日（火）	【ワークショップ 2 日目】 対話→「対話の内容」作成
3 月 6 日（水）	【ワークショップ 3 日目】 「テーマの動機」＋「対話の内容」の読み合わせ→「結論」の方向性を 検討し、決定
3 月 7 日（木）	レポート（「テーマの動機」＋「対話の内容」＋「結論」＋「終わりに」 ＝私にとってのこの活動の意味）作成→完成 ※ワークショップは休み
3 月 8 日（金）	【ワークショップ 4 日目】 各グループでレポート冊子のコンセプトと役割分担に関する打ち合わせ
3 月 10 日（日）	早稲田型参加メンバー、ヴェネツィア発
3 月 17 日（日）	レポート冊子完成

【資料】「考えるための日本語—日本語と私—」を説明するスライド

考えるための日本語—日本語と私

このプロジェクトでは
何をするのか

担当: 細川英雄
早稲田大学大学院日本語教育研究科

「どんな」活動をするのか

- 対話レポートを書き、冊子を作成する
- テーマ：日本と私 〈サブタイトルに使う〉
(タイトルは自由、自分でつける)
- 最終分量：5,000～8,000字程度 (冊子作成の前までに)
- 最終レポートをもとにした冊子を作成し、インターネット上で公開。

「どのような」レポートを書くのか

- 対話レポートの構成
 - 1 「テーマの動機」
 - 2 「対話の内容」
 - 3 「結論」
 - 4 上記の成果をまとめた冊子作成
(2011年3月)
- BBS(電子掲示板)上でやりとりをし、各レポートを集めた冊子をつくりあげる。

「何を」やりとりするのか

- BBS(電子掲示板)上で受講者同士およびメンターとの間で継続的にコメントを交換する。
- やりとりの内容
 - ・ テーマの動機について
 - ・ 対話とその内容をレポートにまとめる
 - ・ 冊子作成のための話し合い
 - ・ 成果物への振り返り

「誰と」やりとりするのか

- メンターって何?

早稲田大学大学院日本語教育研究科の大学院生または修了生。受講者の書いた文章について、いろいろなコメントをくれる。
- このプロジェクトの設計者は細川、ときどき「お知らせ」で顔を出す。

この活動で日本語がうまくなるの？

- ☐ 「書くこと」は「考えること」
- ☐ 自分の問題として捉える
- ☐ インターアクションの意味
- ☐ コミュニティとしてのグループの意味

- ☐ 日本語のうまい下手を決めるのはだれ？

この活動がもとめるもの

- ☐ テーマを自分の問題として捉えること
- ☐ 他の人の意見に耳を傾けること。

- ☐ 週ごとに必ず放送を視聴すること。
- ☐ BBSに積極的にアクセスすること。

全体の流れ 2:

7週間プロジェクト活動1月23日から3月10日まで

- ☐ 第1週目 BBS上でやりとりをしながら、自分のテーマを決めて、「テーマの動機」を書く(1200字程度)
- ☐ 第2週目 「テーマの動機」についてコメントを書く、コメントをもらう
- ☐ 第3週目 他の人と対話をし、その内容をまとめて書く「対話の活動」(2000～3000字程度)

全体の流れ 2:

7週間プロジェクト活動1月23日から3月10日まで

- ☐ 第4週目 対話を報告し、それについてコメントし合う
 - ☐ 第5週目 結論のまとめ(5000～8000字程度)
 - ☐ 第6週目 冊子作成(リール・ワークショップ)
 - ☐ 第7週目 活動の振り返り
-

日仏ネット対話プロジェクト

考えるための日本語ー日本と私ー

- ☐ わからないことや聞いてみたいことは、BBSに書き込んでください。メンターが答えてくれます。
- ☐ これまでの活動等が下記のホームページに掲載されています。参考にしてください。
<http://www.gsjal.jp/hosokawa/index.html>

担当: 細川英雄
早稲田大学大学院日本語教育研究科

【早稲田側参加メンバー】

細川英雄(早稲田大学大学院日本語教育研究科教員) プロジェクト統括責任者

古屋憲章(早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程)

鄭京姫(早稲田大学大学院日本語教育研究科招聘研究員)

工藤 (武藤) 理恵(早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程)

道端輝子(早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程)

岡田みなみ(早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程)

小山いずみ(早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程)

平澤栄子(早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程)

松島調(早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程)

杉山舞(リール第3大学日本語教育研修生)

【ヴェネツィア側責任者】

Marcella Mariotti Ph.D.

Lecturer in Japanese Language Education,

Dpt. of Asian and North African Studies

Ca' Foscari University (Venice)

**「考えるための日本語」の言語教育理念と
「考えるための日本語—日本と私—」
ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクトのプロセス**

古屋憲章

1. 「考えるための日本語」の言語教育理念

「考えるための日本語」（以下、「考える」）は、日本語に関する知識や技術の獲得を目的とするのではなく、学習者が日本語による言語活動を行うことをとおし、日本語を用いる自身の「思考と表現の統合」（細川、2004、p. 17）を目的とする言語教育実践である。そのため、「考える」をデザインするにあたっては、次の三点が重要になる。

①「聞く」「話す」「読む」「書く」が相互に関連を持って行われること

「考える」の教室においては、「聞く」「話す」「読む」「書く」という四つの活動が総合的に行われる必要がある。言語（外国語）教育の教室では、「聞く」「話す」「読む」「書く」という活動がそれぞれ個別の活動としてバラバラに設定されていることがある。しかし、実際のコミュニケーションは、一人ひとりの学習者の中で「聞く」「話す」「読む」「書く」という活動が相互に関連し合うことによって、形作られている。したがって、「考える」では、常に「聞く」「話す」「読む」「書く」という活動が相互に関連を持って行われるような教室活動形態を取る必要がある。そうすることにより、教室において、仮想ではない実際のコミュニケーションを行うことが可能になる。

②具体的な目標を持った活動

「考える」の教室においては、クラス活動全体を通して一本の軸となるような“具体的な目標”を参加者が共有した上で、活動を進めていく必要がある。なぜなら、そのような軸のない活動は、たとえ「聞く」「話す」「読む」「書く」が相互に関連し合っていたとしても、全体としての流れを欠くものとなるからである。したがって、教室活動全体を通して、どこから始まり、どういう過程を経て、終着点としてどこへたどり着こうとしているのかという全体の構想を担当者が持つことが必要になる。

担当者が目標を設定するにあたって重要なことは、その目標がクラスの参加者一人ひとりがコミュニケーションの主体として相互に関わり合いながら活動に参加し、実際にコミュニケーションを行っていくことを可能にするようなものにすることである。つまり、学習者が一人で活動し、自己完結してしまうような目標ではなく、他の学習者や担当者との関わり合いが必要不可欠となるような目標を立てる必要がある。

③思考の言語化

「考える」の教室においては、学習者一人ひとりにより、思考の言語化が行われる必要がある。「考えていること」は、初めから明確に存在し、それをことばに載せることで他者に伝えることができるというわけではない。「考えていること」は、他者とのやり取り

の中で言語化を重ねることをとおし、正に言語化されるという形でのみ明らかになる。つまり、自らの思考の言語化のためには、他者との関わりが不可欠であり、両者は不即不離の関係にある。

次節で詳述する「考えるための日本語—日本と私—」も、上述した3点を満たすことを考慮しつつ、デザインされた。

2. 「考えるための日本語—日本と私—」

ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクトのプロセス

「考えるための日本語—日本と私—」ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト（以下「プロジェクト」）は、イタリアのカ・フオスカリ大学東洋北アフリカ研究学科に在籍する学部生、大学院生を対象に行われた日本語教育実践である。実施期間は、全6週間（2013年2月4日～3月17日）である。本「プロジェクト」は、授業や成績評価と直接関係を持たない自由参加の活動として、告知され、参加者が募られた。「プロジェクト」の目標は、各学生が「日本と私」というテーマでレポート（5000～8000字）を書き上げるとともに、レポートを収録したレポート集を完成させることである。

「プロジェクト」のスケジュールは、次の表1のとおりであった。

表1 ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト スケジュール

週	日	場所	活動内容
第1週	2/4-2/10	Web	自己紹介
第2週	2/11-2/17	Web	「テーマの動機」(1回目)を執筆→ メンター、クラスメイトと「テーマの動機」を検討
第3週	2/18-2/24	Web	メンター、クラスメイトと「テーマの動機」を検討 →「テーマの動機」(2回目)を執筆
第4週	2/25-3/3	Web	メンター、クラスメイトと「テーマの動機」を検討 →「テーマの動機」(2回目)を執筆
第5週	3/4-3/10	現地	【ワークショップ1日目】 ①自己紹介とレポートテーマの紹介 ②グループ作り ③「テーマの動機」の読み合わせ→検討 ④対話に関する相談 【ワークショップ2日目】 対話→「対話の内容」作成 【ワークショップ3日目】 「テーマの動機」+「対話の内容」の読み合わせ→「結論」の方向性を検討し、決定

			【ワークショップ 4 日目】 各グループでレポート冊子のコンセプトと役割分担に関する打ち合わせ
第 6 週	3/11-3/17	Web	レポート冊子作成

第 1 週は、Web 上に設置した BBS で参加者、およびメンター（早稲田大学大学院日本語教育研究科に在籍する大学院生）が自己紹介を行った。そのうえで、お互いの自己紹介を媒介にやりとりを行った。

第 2 週から第 4 週までは、参加者各自でメンターと Google グループ上でやりとりをしながら、レポートを書き進めた。具体的には、第 2 週に、各参加者が「日本と私」という大きなテーマの中でどこに焦点を当てるかを決め、焦点を当てる部分を自分のテーマとした。そして、第 3 週から第 4 週にかけ、「自分のテーマが自分にとってどうして／どのよう

に大切か」を「テーマの動機」としてまとめた。

第 5 週にあたる 3 月 4～8 日には、プロジェクト責任者（細川英雄）、およびメンターが現地（カ・フォスカリ大学）に赴き、ワークショップを行った。ワークショップ 1 日目～2 日目（3/4-5）には、四つのグループ（各グループ、学生 4～5 名とメンター 2 名で構成）に分かれたうえで、グループのメンバー、および各グループの担当メンターとやりとりをしながら、レポートを書き進めた。具体的には、「テーマの動機」をもとに、自分のテーマに関し、対話をしてくれる相手を探し（メンターが対話相手となったケースも多い）、対話を行った。対話は録音、メモ等により記録された。そして、対話の記録をもとに、行った対話を編集し、「対話の内容」を作成した。「対話の内容」は、概ね次のような手順で作成された。①対話の記録のうち、重要と思われる部分をピックアップする。②ピックアップした部分ごとに見出しをつける。③見出しにより区切られたまとまりごとに、対話から考えたことを付け加える。④対話の報告の末尾に、対話の後に考えたことのまとめを書く。

ワークショップ 3 日目（3/6）には、グループのメンバーでお互いの「テーマの動機」＋「対話の内容」を読み合わせ、「結論」の方向性を検討し、決定した。そして、休業日であった翌日（3/7）、前日の決定にもとづき、各自でレポート（「テーマの動機」＋「対話の内容」＋「結論」＋「終わりに」＝私にとってのこの活動の意味）を完成させた。

ワークショップ 4 日目（3/8）には、グループごとにお互いのレポート内容を共有したうえで、各レポートに共通するテーマは何かを話し合い、見出された共通のテーマにもとづき、レポート集のコンセプトを決定した。また、レポート集作成の役割分担を行った。

第 6 週には、各グループでレポート集作成作業を行った。そして、「プロジェクト」最終日の 3 月 17 日に四つのグループそれぞれのレポート集が完成し、Google グループにアップされた。

参考文献

細川英雄（2004）「『考えるための日本語』のめざすもの 1 クラス活動の理念と設計」細川英雄＋NPO 法人「言語文化教育研究所」スタッフ『考えるための日本語』（pp. 8-42）明石書店.

外国・イタリア・カ・フォスカリ大学における 「考えるための日本語」ワークショップをめぐる様々な考察

マルチェッラ・マリオッティ

1. イタリアへの「考えるための日本語」の輸出

カ・フォスカリ大学で日本語教育学専攻の博士課程において、2005 年当時国際基督教大学からサバティカルでいらっしゃった小川貴士のおかげで、細川英雄著「日本語教育は何をめざすか」（2002 年）と出会った。それ以来、「学習者主体」という概念を特別な視点から扱う著者の細川英雄と会い、「総合活動型日本語教育」を是非味わいたいとずっと思っていた。やっと 2008 年、日本学術振興会のポストドックフェローシップで外国人特別研究員として国際基督教大学に籍を置きながら、早稲田大学日本語教育研究科の細川指導の「考えるための日本語 7・8」そしてその実践研究のゼミにも参加させていただいた。その後、2010 年の春からも「総合活動型日本語教育 1」にオブザーバーとして参加した。この三つの経験からと、「考えるための日本語」というコンセプトは自分の研究テーマと接近しているということから、海外、イタリアでも総合活動型日本語教育を行わせることになった。

今度、ヴェネツィア「カ・フォスカリ大学」の東洋北アフリカ研究科の専任講師として、2010 年度と 2012 年度に「考えるための日本語海外版」を行った。修士 2 年生向けのこれらのコースは選択科目ではなく、義務科目であり、単位をもらうには試験に合格しなくてはならない。

2010 年度では、A) クラスは「東洋・地中海アフリカ言語・文化」専攻の学生からと「東洋・地中海アフリカ経済法制度」専攻の学生、全部で 42 人からなっていた。それに、日本語母語話者ゲスト一人も参加して下さった。15 コマで、30 時間に限ったコースだったが、授業時間外のメールでのやり取り等に応えることができず、42 人の学生のうち、9 人がドロップアウトした。

2012 年度では、B) クラスは「東洋・地中海アフリカ経済法制度」専攻の学生 13 人に、日本語母語話者 5 人プラスゲスト 1 人、全部で 19 人からなっていたが、5 人がドロップアウトした。後者がコミュニティになったクラスから提出したレポートの評価をもらうが、最終的な試験での発表への評価が先生からしかもらえない。

上記のコースについて詳しく別の論文(Mariotti, forthcoming)をご参考ください。

2012 年に「リール・プロジェクト」にオブザーバーとして参加し、同年の秋からヴェネツィア「カ・フォスカリ大学」に細川氏を招き、「ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト」を行うための段取りを始めた。2010 年度の元学生達も 2012 年度の学生達も、本でしか会えなかった細川先生とお会いできるのを非常に楽しみにしていたようです。

2. 学生参加募集から学生参加へ

2012 年の 11 月から、口コミで学生に「ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト」について話していた。2010 年度と 2012 年度の院生の間では参加していた「考えるための日本語」の細川指導の「オーセンティック」なコースに参加するのを楽しみにしていて、学生がすぐプロジェクトに参加するように申請してきた。2010 年度の学生だった現在博士 1 年生の二人は留学のための準備としてだけではなく、すでに「日本語で考える力と、考えたものを伝える力を育みたい」という理由で参加しようとした。2012 年度の修士 2 年生の中、筆者が担当していたコースを通ったが、試験の一部になる最終的なレポートを書き終えなかったなどの理由で、「今回こそ書き終えるかも」と思い参加したのは。

正式な参加募集は 1 月の始め、筆者の研究科のウェブページで知らせた。2012 年度当時は日本語を専攻している学生は、学部生と院生も含めて、1871 人で会った。人数にも関わらず、研究科のウェブページの知らせを読む学生が少ないため、facebook で設立した自分の学生が参加しているグループにも正式なお知らせへのリンクを公開した。1 月 11 日に facebook を通して知らせを確実に読んだのは 226 人以上だったが、1 月は前期の試験期間であるため、その期間に無い授業で徹底的に紹介することが不可能であった。

お知らせ内容は以下のものであった。

「2 月から早稲田大学細川英雄先生がオンライン日本語集中ゼミを行う。詳細は『ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト概要 121214.doc』まで。どの学年でも良いが参加者限定で 20 人まで。参加が無料。連続で活発的な参加が必要不可欠なのである。添付書類をご記入し、メールで mariotti@unive.it までご送信ください。」

添付書類には「名前・連絡先・学年・合格した日本語試験・参加したい理由」を要求されていた。

ワークショップの時期設定は 2 月から 3 月にかけてということだったから、普通の学部・修士の授業と重なってしまうため、参加者の人数は多くないと想定できた。カ・フォスカリの東洋北アフリカ研究科では授業が学年によってちがうが、学部 1～3 年生はほとんど毎日午前 8 時 45 分から午後 5 時までで、修士 1 年生は毎日 2 コマぐらいで忙しい。日本語の授業だけで学部では 972 時間で、修士では 387 時間である。

カ・フォスカリの特徴はヴェネツィア外から日帰りで通学する学生が多く、参加したいが、普通の授業と通学で時間がなくなるという意見もあった。

1 月 21 日にワークショップの説明会を行い、1 月の末まで登録者は 37 人であった。「参加したい理由」としてはみんなが「日本語が上達したい」と述べたが、a) もっと日本人と話したい、b) 自分の考えを日本語で伝えたい、c) 自分が育ってきた環境と違う環境の中で育ってきた方と意見交換したい、という理由も述べた人もいた。

3. ドロップアウトとその逆の「もっと熱心で」

期待はいっぱいであったが、以上の参加するつもりであった 37 人の中、17 人が参加するのをやめた。あげた理由は主に「後期の授業が始まる前に登録し、後期の授業時刻表が出来上がったとたんに、このコースに参加することができないことがわかった」ということであった。

たしかに、自分の中で何を考えているのかを処理するだけではなく、辞書を調べたり文書を書いたりしてメールでの意見交換は時間がかかる。それこそどのぐらい自分にとって、自己表現には日本語の勉強が大切なのかと、それよりもどのぐらい自分の意見や価値観が大事にしているのか、どのぐらい考えていることについて他の人と意見交換しながら物事を（自分を）理解したいのかが明確になってくる。

残った 20 人の参加者のうち、3 人がせつせと通うことができなかった、「考えるための日本語」の修士 2 年生の日本語授業を「復習」するためにも参加したそうだが、やり始めたら日本語の勉強よりコミュニティとのやりとり、自己表現と自分の価値観のシェアのほう重視されるようになってきて、「勉強」より「人間一人としての成長に結びつく手段としての日本語」の実用へむけた。

ワークショップのメンターとの 654 通のメールのおかげで参加した学生 20 人が「総合活動型日本語教育」にはまってしまい、『。。。あまり「国を理解する」と思った事がないんです。なので、アレッサンドロさんが、どんな気持ちで日本を理解したい！と言っているのか』のようなより深い問いに答える・解釈するように何通のやりとりで頑張ってきた。

4. オンラインでのやり取りとその問題・解決

4. 1. ビデオの視聴

コースの始め、2 月にはビデオを視聴するように指示をしたが、特別な仕組みになっていてきちんと見られないと言う声もあった。マックや PC 等の理由でもなく、みんなが見られるように、筆者と学生一人でビデオをグーグルングして、YouTube に載せざるをえなかった。

2 月 1 日からスタートということであっても、PC がないとか、毎日大学のメールを確認しないとか、寮ではインターネットへの接続時間が限られている等などの理由で、ペースが遅く、普通のメールで学生からなかなかフィードバックをもらわなかった。

4. 2. BBS 掲示板開始

2 月 4 日に BBS が開設された。BBS で短い自己紹介してみたら、アクセスができないか、でてくるバナーがよくエロチックすぎると学生からの声があり、やりとりを GoogleGroups に変えるようにした。今度は gmail がないとアクセスしにくいという壁があったが、最終

的に参加し続けるつもりがあった学生がオンライングループにアクセスできたのである。

ただし、2月8日から12日までの間、その移動のせいかどうか明確ににくい、2回目の動機文の提出と同期していたBBSからGoogleGroupへ移動で8人ほど引退してしまった。

5. ドロップアウトと参加した学生達の期待への対応とその理由

当プロジェクトを学生達に紹介した時、強い関心のあった学生が多かった。自費で日本へ行くことが難しく、イタリアで日本語が話せる機会が少なく、大学での日本語母語話者講師は全て女性で、などの理由で参加し始めた学生が大部分であった。期待されていたのは『メールでのやり取りと話ししながら間違いを直してもらい、日本語が上達できる』という期待があった。だが、説明を読まずに参加したら、ビデオとメールではなく、先生本人と話せることなどの期待があったため、引退してしまう学生もあったにもかかわらず、総合活動型日本語教育で日本語を読む・書く・話す・聞く能力をのばせるに留まらずに、この機会が貴重で、この機会を知り合った方々と自分の価値観についてメールや対話で考えなおしてみるチャンスを掴みたいという学生もいた。

プロセス全体で日本語が使用されていたが、難しいから引退したいと言われたら、グループ外、イタリア語でコースの意義について改めて説明をおこなった。主に『伝統的なテキストがなくて、勉強しにくい』と指摘された同時に『自分なりに、自己表現ができる』という正反対の理由で引退したり、期待されたりしていた。

6. 自己表現の喜びを味わう

(大学の中での自己表現と評価の関係、そして当ワークショップの特徴)

動機文を書き直しながら、そして対話とその報告をしながら、イタリア語と違う言語(日本語)で自分の考えを探り、他の人とはその考えを深めていける、そしてそのけっかによる、コミュニティと一緒に言語を乗り越える、意味ある産出物をえて、それを公開するという活動の喜びを味わったとたんに、言語の困難を乗り越えるための力を得て、最後まで全力を尽くす学生が20人もいた。

2010年度と2012年度の総合活動型日本語教育の授業では、動機・対話・結論と言った作業を学生とともに評価基準、つまりこの活動においては何が自分にとって最も意味のあったことなのかを決め、自己／相互評価をさせた。毎回、活動のもっとも活発的な作業であった。これによって修士の最後の日本語の試験の成績が決められるからでもあり、自分が先生の立場にたてるからでもあった。

だが、最後になって学生が今回のプロジェクトへの参加は成績のためではなく、「ある価値観を共通しているコミュニティの一メンバになる」ために参加したと思える(理解できる)ようになった。したがって、自己／相互評価の基準を定めるための活動がなくても、

というより、ないほうが、活動全体の意義を支えた。これに、一緒に食事や散歩したりして時間を共有することによって、もっとも勉強のために触り合うのではなく、お互いのことに興味を持つからで、ある言語（日本語）を使い、お互いに自分を語る必要性を感じるようになってきた。これはプロジェクトの一番貴重な結果だと思えるのではないかと。学生の言葉でいうと以下のようなになる。

a.「このプロジェクトに参加させていただいてありがたいと思う。面白く思ったことは、人との交流だった。要するに、自分と同じように日本・日本の文化と関心を持っている人と話し合い、いろいろな意見・日本に対する視点が出てきたのだ。日本といっても、人によって自分が頭の中で作った日本のイメージが違っているからこそ、二百以上の日本が存在しているといえるだろう。」

b.「ワッショイ」のグループのみなさんと一緒に話すのはとてもよかったと思います。様々の興味を分かちあったから、気持ちがよかったです。」

c.「このプロジェクトのおかげで、少しでも自分のことをわかってきた気がする。自分のことについて話すのを避ける癖があるのに、自分のことについて話させて、思っていることをはっきり言わせて、自分でも気づかなかった本音が見えてきた。それはこれからどの場面でも役に立つと思う。「したいことがしたい」だけと言ったら、疑われるとすぐ自信をなくしてしまうだろう。「どうして、どうして」と聞かれて、答えを見つけて、自信を持って「私はこういう人だから」とは言えるようになった気がする。それに、初めは全然知らない人に自分のことはうまく話せるかなと悩んでいたのに、対話はだんだん進んでいって、「全然知らないのにこんなに気をかけて聞いてくれる」と思ってすごく感動した。」

7. 将来

来年度も「総合活動型日本語教育」をすすめたい。今回のように細川先生と早稲田大学の院生方と効力しながら実行できれば非常に嬉しく思う。2013年『ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト』のメンターたちの専念的な努力を心から感謝する。

「間違える」という意識をもたらしたもの —参加者ジーナの意識の変遷から—

What brought the self-awareness of making mistakes
—the case participant Gina—

平澤 栄子
(HIRASAWA, Eiko)

概要

本活動中、参加者の一人であるジーナは筆者に対して「私の答えは間違っていました」と発言した。この言葉は筆者を非常に驚かせるものだった。そこで、本報告書では、この「間違っていました」という発言がなされた背景にどんな意識があったのか、ジーナの発言、意識の変遷を追いながら、そこから示唆できることについて述べる。

ジーナは筆者が活動の中で記したコメントに対して、「間違っていました」と発言した。さらには、自分は特別でない普通の大学生だと述べ、普通の自分について語ることに不安を抱いていた。筆者はジーナが繰り返し述べた「恐れ」や「不安」という言葉から、日本語を訂正されることへの不安というよりも、自分の考えや自分自身が否定されてしまうことに対する不安があったのではないかと推察した。しかし、ジーナはこの活動を通して、他者との意見の違いを表明しながら、徐々に自分を表現するようになり、最終的に他者と違う自分を発見した。この発見のプロセスを通して「間違っている」という不安、表現することへの不安も解消された。

「間違っている」という意識は、さまざまな要素が複雑にからみあって、人を「不安」に導く。その「不安」が自身を表現することを妨げているとしたら、また、日本語を正しく導くことによって、個人の表現まで否定することになっていたら、看過できない大きな問題であるように思う。

During the project activity, one of the project participants, Gina, responded to my comment and said my answer was wrong. This made me wonder what made Gina thinks she was wrong. This is why this report explores the meaning behind Gina's expression when she said, "I was wrong."

When she said she was wrong, she was afraid of expressing herself. In addition, she felt that she's not a special person, which maybe related to her anxiety. I inferred that her anxiety is caused by the fear of having her ideas and thoughts rejected.

However, Gina gradually started expressing her opinion while making it clear how it differs from others. Through this process, she was able to find her uniqueness, which also enabled her to resolve her fear of making mistakes and expressing herself.

The fear of making errors and self-awareness about one's mistakes is interwoven with various elements, but I think it is driven by one's anxiety.

When this kind of anxiety prevents students of expression and when the correction of students' Japanese inhibits self-expression, this is a major problem that should not be ignored.

1. はじめに

「考えるための日本語—日本と私—」ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学プログラム、日伊ネット対話プロジェクト（以下、プロジェクト）は、総合活動型日本語教育¹の理念に基づいて設計されたものである。本プロジェクトでは、「日本と私」というテーマでレポートを書くプロセスを通して、自分にとっての「テーマ」を発見することが目的であった。このレポート作成のプロセスにおいては、他者との対話が重要視される。本プロジェクトでは、ウェブ上のBBSを使用し、カ・フォスカリ大学からの参加者と早稲田大学からの参加者（ここでは「メンター」と呼ぶ）とのコメントのやりとりが行われ、その後、ヴェネツィアの現地に早稲田大学側のメンターも含めた全参加者が集まり、対面での活動が行われた。メンターは受講者が自分のテーマを見つけるための水先案内人として、様々な働きかけを行った。

本報告書では、参加者の一人であるジーナとメンターとして参加した筆者とのやりとりを中心に「間違っている」という表現の背景にどんな意識があったのかを考えてみたい。このテーマを選んだ理由は、ウェブ上のやりとりの中で、ジーナが筆者に対して発言した「私の答えは間違っていました」という言葉に強い違和感を感じたからである。この「間違っている」という言葉は何を意味するのだろうか。本プロジェクトにおいてジーナと筆者は、ウェブ上のやりとりからヴェネツィアでのグループ活動まで一貫してともに活動を続けることとなった。そこで、本報告書では、プロジェクトにおける全行程を筆者とのやりとりを中心に時系列で追いながら、やりとりがもたらしたジーナの意識の変遷のプロセスを追い、「間違っている」という言葉の裏にどんな意識があったのかを考察する。

¹ 細川（2004）によると、「ことばの教育とは、さまざまな社会形成の中で他者とのコミュニケーションによって自己を表現する力をつけること」と考え、このような「自己表現の力」をつけるためには、総合的な身体活動（聞く・話す・読む・書くという4領域の力が総合的に絡み合って成り立つ言語活動）が必要であるとしている。この考えに基づいた「日本語による総合的な身体活動の教育／学習を『総合活動型日本語教育』と呼んでいる。（p.2）

2. ジーナとの BBS でのやりとり

2.1. ジーナにおける活動目的の理解

本プロジェクトでは、カ・フォスカリ大学での参加者と早稲田大学のメンターとのやりとりに先立って、ウェブ上の BBS に自己紹介の機会が設けられた。ここでは、自分のテーマを投稿する前の簡単な自己紹介と比較的自由なやりとりが行われている。ここでジーナは、メンターと以下のようなやりとりをしている。

カ・フォスカリ大学の専門の一年生で、「考えるための日本語」のプロジェクトに参加する。このプロジェクトは面白くて興味深いと思います。

[ジーナ：2013/02/05²]

この自己紹介に対して、メンターから「私もちょうど先月まで同じタイプのプロジェクトに参加していました [O：2013/02/08]」というコメントがあり、このプロジェクトがどんなものだったかについての情報交換がなされている。メンターからは、次のようなコメントがあった。

色々な人と話すことで、自分のテーマについて自分が気づいていなかったような視点から考えさせられることは、大変でもあったけれど、とても有意義な経験でした！

私が参加したプロジェクトでは、自分の「過去・現在・未来」を結ぶものというのがテーマになっていて、それぞれこれまでの自分・今の自分・これからの自分にとって重要なことについて考えました。[O：2013/02/10]

このやりとりの中でジーナは、自分のテーマを「まだ迷っていますけど」と前置きしながら「古典」に関するものにする予定であることを告げている。そして、上記コメントに対しては、以下のように述べている。

Oさんが参加したプロジェクトも面白そうですよ。実は過去・現在・未来の自分はみんなが楽しめたり、深くて考えたりするテーマだと思います。意外な話も出てくるからです。[ジーナ：2013/02/10①]

古典を選んだのは、大切なことだと思います。私もその「色々な理由」についてもっと知りたくて、私自身の理由をもっと深くてみなさんと一緒に考えていきたいと思います！ [ジーナ：2013/02/10②]

² 投稿日 [名前：年／月／日] 表示は日本時間。イタリアとは7時間の時差があるため、投稿時間によっては、同日に投稿されることもあった。その場合、投稿順に①②と表示する。

このやりとりの中で、ジーナは「古典」に興味関心はあるのだけれど、なぜ「古典」なのかは「色々な理由」があるので、それを考えたいとしている。また、「私自身の理由を」と言っていることから、「古典」について調べたことをレポートにまとめる活動だという捉え方はしておらず³、「自分自身」についてレポートに書くという目的は理解しているように感じる。また、メンターといっしょに何かを考える活動であることは理解しているようである。最後にまとめられたレポートの中では、この活動の目的について、「最初には言語学のプロジェクトと言われたから、絶対参加したいと思っていた。これは言語学のプロジェクトではなかったと分かった時に、もうプロジェクトは始まっていて、参加しなければならなかったんだ」と述べている。このプロジェクトの目的が、いつの時点で「分かった」のかははっきりしないが、何が求められているかなんとか理解はできていたようである。

2.2. 「間違っている」という発言が生まれた経緯

自己紹介のあとは別の BBS にやりとりの場を移し、改めてテーマに関する動機文が投稿された。2.1.で触れたようにおおよそその活動目的を理解していたジーナは、テーマを「古典から見ている私-日本と私-」と設定し動機文を書いている。そして、この動機文の投稿以降は筆者との 1 対 1 のやりとりが続くこととなった。ここでは、ジーナが「私の答えは間違っていました」と発言するまでの経緯を追ってみたいと思う。

ジーナの 1 回目の動機文は以下のとおりである。

日本に興味を持つようになった理由は、アニメ・漫画・ゲームや現代日本の小説家が好きなものだったが、今は全然違っています。

日本語を勉強し始めたから、だんだん日本の美しさを少しずつ理解できるようになりました。日本は大きな国で、日本の文化はプリズムの多数の相のように輝いているのを明るく見えてきました。

時々自信がありませんが、色々な理由で日本語を勉強続けて、いつも日本について新しく素敵なことを知り続けたいです。この理由の中から、例を三つ話したいと思います。

(中略)

たびたび私が日本にもっと近づいてきた理由を解説できません。でも、一番大きなできごとは確かに古典世界だと思います。日本と日本語をもっと知り始めたから、話した日本語の音を好きになってきて、文化の知恵を広げてきて、私が見た日本は毎日私

³ 本プロジェクトの参加者の多くは、日本のポップカルチャーや伝統文化、日本文学、日本人の行動様式など、日本について調べたこと、見聞きしたことをレポートにまとめるという捉え方をしているように感じた。

と一緒に変わってきました。

高校生の時に日本について興味を持つようになって、そんなに大きな世界を見つけられるのが意外でも素晴らしいことだと思います。

なぜなら、先に書いたエピソードがあったから、私が今眺めている日本はもっと大きくて素敵だと思います。[ジーナ：2013/2/12①]

ここでジーナは、日本を知るようになってから興味が広がり、「私が見た日本は毎日私と一緒に変わってきました」と述べている。テーマは「古典」としているが、ここでは漠然とした日本への興味が描かれている。また、「例を三つ話したいと思います」とエピソードを書いているが、この3つの例は「古典」「源氏物語」「音楽」であった。日本に対する興味は「古典」だけであるとは言いがたい。そこで、筆者は、興味の対象が何かを探るような質問を繰り返している。例えば、

＜『源氏物語』を読んだ後で、本当の魅力を理解するように気がしたから⁴

とありますが、『源氏物語』の本当の魅力って何だったんでしょう。どんなところに、そんなに惹かれたんですか？ [平澤：2013/2/12]

＜私が見た日本は毎日私と一緒に変わってきました

どんなふうに「変わって」きたんでしょうか。このところをもう少し詳しく知りたいと思いました。[平澤：2013/2/12]

＜日本語を勉強し始めたから、いろいろなことが変わってきました。私の大事な興味が他のものに移りました。日本と日本語はこの5年にいつも私の側にあったから、私と一緒に変わってきて成長して他のものになってきました。

とありましたが、具体的にどんなところが成長したと思いますか。「他のもの」とありますが、どんなものになったんでしょう。ぜひ聞いてみたいです。

[平澤：2013/2/13]

ジーナの表現には「本当の魅力」「いろいろなこと」のように漠然としたものが多く、それが何を指すのなかなかイメージしにくかった。そのため、具体的な説明を求めるようなコメントを繰り返している。これらの筆者からのコメントに対し、ジーナからはほぼ同日に返答が寄せられた。また、ジーナからも筆者に対する質問があった。

平澤さんも古典の世界について興味を持っていましたか。今にも持っているのでしょうか。[ジーナ：2013/2/13]

⁴ 斜体は、ジーナのコメントの引用を表す

「万葉集」について、本当に興味深いです！平澤さんはどうしてすっかり離れてしまいましたのでしょうか。[ジーナ：2013/2/14]

この質問に対し、筆者は自身の祖父との思い出と万葉集の関係について記述した[2013/2/15]。ジーナとのやりとりで、なかなか具体的なイメージが見えてこなかったため、ジーナの質問に具体的に答えることによって「ジーナとテーマ」との関係がより具体的なものになればという意図もあった。そして、最後に再び「ジーナさんも、日本とジーナさんのつながりみたいなものはありますか」と質問を投げかけている。

この質問に対し、同日中にジーナからは以下の前置きとともにかなり長い返信があった。

この質問を読んだとき、ちょっと首をかしげて、惑っていました。最初に「あっ、日本と私をつなぐものなのでしょうか。なにかしら～」と思っていました。日本のつながりみたいなものはあるかどうか、あまり知りません。子供の頃からいつも日本について興味を持っていたから、この質問を聞いたことはだいたいありません。私と日本のつながっているものは手で触れるものか、理想的なものですか。[ジーナ：2013/2/15]

この前置きからもわかるように、ジーナ自身かなり悩みながらの返信であったことが窺える。しかし、この返信に対し、筆者はすぐに返信ができなかった。じっくり考えてから返信したいと思ったこと、他の参加者への返信に対応していたことなども理由として挙げられる。返信が1日空いたところで、ジーナから次のようなコメントがあった。

平澤さん、嫌なことを書いたから、すみませんでした。おそらく私の答えは不適切でした。

たぶん平澤さんは他の答えを考えたから、私の答えは間違っていました。

ごめんなさい。間違えたことを教えてください。[ジーナ：2013/2/17①]

このコメントは筆者にとって、非常に驚きであった。それまで、何も問題なくやりとりが行われ、筆者自身もジーナ自身もやりとりを楽しんでいるように感じていたからだ。それまで、ジーナの考えを否定したつもりはなかったし、「正しい」とか「間違えている」という意識もまったく持っていなかった。また、文法や語彙などの使い方の指摘も一切行っていない。たった1日返信ができなかっただけで、ジーナからこのような発言がされるとは全く予想していなかったのだ。なぜ、ジーナからこのような「間違えた」という発言がされたのだろうか。

2.3. やりとりから生まれた不安

ジーナはこの「間違える」ということに、どのような意識を持っていたのだろうか。ここでは、その意識の背後にあるものについて考えてみたい。

第1回目の動機文を投稿するとき、ジーナは次のように前置きしている。

バカなタイトルをつけて、すみません。今には他のタイトルは考えられなかったから、これは一番よかったそうです。

きっとこのレポートは間違えたことがいっぱいあるから、これを読んだり、直したり、コメントをしたりするのをどうもありがとうございます。[ジーナ：2013/2/12①]

この前置きからは「間違えたこと」が内容についてなのか日本語の文法や表現についてなのかははっきりわからない。この投稿のあとから、筆者に対して発せられた「私の答えは間違っていました」という発言まで、「間違っている」という表現は見られなかった。しかし、この前置きに書かれた「バカな」という表現はこのあと、何回か使われている。

日本は完璧な世界ではないと気づいてきました。利点と欠点は両ともあると気づきました。それは子供っぽくて**バカな**イメージでしたが、これは私の頭の中のイメージでした。[ジーナ：2013/2/14]

今、これを考えると本当に恥ずかしいと思います。そんなに**バカな**理由で、日本を好きだったと思っていると頭が痛くなっていました。[ジーナ：2013/2/15]

確かに**バカな**ことも書いたからすみませんでした。[ジーナ：2013/2/15]

はじめの二つについては、昔「古典」を知る前にジーナ自身が抱いていた日本のイメージに対して「バカな」という表現を使っている。最後のものは、筆者の「日本とジーナのつながりは何か」という質問に対する返信の締めくくりに使われていた。ジーナは「古典」をきっかけに日本に対するイメージが広がったと述べ、これを「自分の成長」と言っていることから、成長する前の自分を「バカな」と表現していることがわかる。つまり、なにか成長のない劣っているものに対して「バカな」という表現を使っていると考えられる。そして、最後に書いた「バカなこと」は筆者の記した祖父との思い出のあとに書かれた返信[ジーナ：2013/2/15]のことを指す。ということは、筆者自身が書いた「祖父と万葉集」の例に比べて「劣っている」と判断してしまったのかもしれない。

[ジーナ：2013/2/17①]に書かれた「間違っている」という返信に対し筆者は以下のよう

ジーナさんの返信に間違いはありません。これは、ジーナさんの活動なんです。
だから、ジーナさんに間違いがあるとか、不適切だとはそういうことはないんです。
ジーナさんの思ったことを堂々と書いてください。[平澤：2013/2/17]

しかし、ジーナのこのあとの発言には少し変化が見られる。

嫌なことや不適切な答えを書いた恐れがあったから、本当に心配していました。(中略)
私は平澤さんが書いた質問から考えたことは平澤さんが言ったとおりです。(中略) 5
年間に答えはおそらく違っていると思いますけど、まだたくさん知らないことが残っ
ているから、日本のことについてもっと勉強し続けたいと思っています！たぶんバカ
な考えですが、他の色を見つけないかと思っています！平澤さんが感じたことは、私の
考えでは、正しいです。

(中略) 平澤さんが感じたことが私と同じことだと思います。

[ジーナ：2013/2/17②]

このコメントからは「不適切な答えを書いた」「平澤さんの言ったとおりです」「平澤
さんが感じたことは、私の考えでは、正しいです」「平澤さんが感じたことが私と同じことだ」
のように、筆者の考えを全面的に肯定する表現が増えている。筆者はこのとき、ジーナと
心理的に距離ができたように感じた。ジーナのこのような反応は何を意味するのだろうか。

このあとも、ジーナと筆者のやりとりがしばらく続くのだが、動機文の2回目の提出日
が迫っていたため、積極的なコメントは控え、動機文の書き直しを促すのみにとどめた。
そして、2月20日に2回目の動機文が提出された。この動機文を読んだ筆者は、ジーナが
筆者とのやりとりに強く影響されているのを感じた。そこで、筆者以外のメンターの視点
が必要だと感じ、他のメンターにコメントを依頼した。以下はそのやりとりである。

私がジーナさんのレポートを読みながら 一番聞きたくなかったのは、「こうやって、日
本との関係を作る中で ジーナさんの視点（色ですね）を増やすことは、 ジーナさん
にとって、どんな意味があると思いますか??」ということです。

「日本と私」の「私」の部分をもっと教えて欲しいな～と思いました。

こんな風に色を作って行くジーナさんがどんな人なのか、とても興味があります♪

[R：2013/2/20]

このコメントに対し、ジーナは次のような表現をつかって答えている。

おそらく、Rさんの一番質問を誤解しまし恐れがありますが、ちょっと答えてみたい

と思います。[ジーナ：2013/2/21]

では、質問について・・・おそらく私が書いたことは間違えたのでしょうか。Rさんは聞いたかったことは、私のテーマは「古典から見ている日本」ではないが、「日本と私の成長」なのかしら。私はこの色々なことがあったからこそ、成長したが、これは私のテーマになるのをちょっと不安だと思います。(中略)

おそらく、これもRさんが聞いたかったことと違っているなら、もう一度本当にすみませんでした。[ジーナ：2013/2/22①]

いつも何かを間違う恐れがあるから、心配しています。正確かどうか、知らないから、いつも心配しています。すみません！[ジーナ：2013/2/23]

ここでジーナはメンターが聞きたいことと違っているかもしれないと繰り返し、不安に感じている様子が見て取れる。メンターのコメントを見ると「私」の部分を教えて欲しい」と言っているだけであり、ジーナの意見を否定するような表現はどこにも見られない。また、メンターは「ジーナさんが書くことに間違いも正解もないと思うので、もうあやまらないでくださいね(><)[R：2013/2/22②]」というコメントもしている。それでも、ジーナは自分の書くことに対して「間違っている」かもしれないと「恐れ」「不安」「心配」という言葉を繰り返していた。なぜジーナは自分自身について書くことにこんなにも「恐れ」や「不安」を感じたのだろうか。

そこで、「どんな人なのか教えてほしい」というメンターからの質問に対し、ジーナは自分自身（ジーナ自身）のことをどのように捉えていたのかを見てみたい。

2.4. 普通の私

以下は、ジーナ自身について教えてほしいというメンターの問いかけ⁵に対するジーナのコメントである。

Rさんは「こんな風に色を作って行くジーナさんがどんな人なのか、とても興味があります♪」と書いたんですが、これはちょっと恥ずかしいと思います。この「ジーナがどんな人なのか」はちょっと・・・これは何の意味でしょうか。私はただの普通な大学生だと思います。日本が好きで、本を読むのが私の趣味です。[ジーナ：2013/2/21]
私の考えでは本当にただの普通な大学生だと思っています。私はいつも本をたくさん読んでいたから、様々なことについて興味を持つようになりました。これは当然だと思います。読む人々はたくさんことに興味を持っています。私はこんなにたくさんのことについて興味を持っているのは、確かに本を読むのが好きだからです。でも、私

⁵ [R：2013/2/20] のコメント

にとって本を読むのは普通なことだと思います。読みながら、私達の知恵はだんだん広がっていった、私達も最も優れた人たちになれるかもしれないのです。私は毎日新しいことを知りたいから、毎日何か新しいことを読みたくて、新しいこと知り合いたいと思います。ただ私は不思議なことについて興味を持っていて、好奇心の強い人だと思います。[ジーナ：2013/2/24]⁶

「最も優れた人」になるのは、皆さんの夢だろうと思います。昨日より毎日だんだんよい人になるのは当然なことではないでしょうか。私はただ昨日より、去年より最も改良したいと思っています。ただこれだけだと思います。(中略) 好奇心を持つのはもう一度当然なことだと思います。たくさんことを習いたいのは、好奇心を持つのが自然な結果だと思います。[ジーナ：2013/2/25]

好奇心はある人だけの特徴だと思われるが、私はちょっと考えて、みんなが持っていることではないのでしょうか。たぶん深くて隠していたものだから明らかに見えないのですが、私の考えではみんなが持っている特徴だと思います。

[ジーナ：2013/2/27]

ここで、ジーナは自身のことを「普通の大学生だ」と言っている。また、「好奇心が強い人だ」とも言っているが、これは「当然」で「みんなが持っている特徴だ」と繰り返し述べている。メンターから「ジーナはどんな人ですか」と聞かれ、自分は普通であり特別に話すようなものはないと訴えているようにも感じる。このプロジェクトの目的をなんとなく理解はしていたものの、日本への興味関心についてレポートを書いていたジーナにとって、「私」自身のことを書かなければならないこの活動は精神的に負担だったのだろうか。それとも、一度、心理的に距離を感じてしまった筆者に対して、自分自身を語ることが不安だったのだろうか。様々な質問に対し、誠実に答えているにもかかわらず、なかなかジーナ自身が見えてこないやりとりから、筆者にはジーナが「自分は特別でない」と主張しているように感じ、違和感を持ったのを覚えている。

2章では、BBS上のやりとりを中心にジーナの意識から「間違えた」という発言が生まれた背景を見た。ここでのやりとりからは、筆者が記した筆者自身の例が引き金となり、メンターが求めていることと違うことを書いているのではないかという不安や、「普通の」「みんなが持っている」特別でない自分自身を語ることへの不安が生じたように感じた。この不安は、顔の見えない相手とのやりとりやプロジェクトの目的を漠然としか理解していなかったこと、また、日本語で書くこと自体への不安なども考えられる。しかし、筆者には、自分自身を語ることへの抵抗のように感じられた。

次章では、ヴェネツィアに赴き、実際に会って対面で活動をしたことによって、ジーナ

⁶ ここから筆者も再びやりとりに加わり、「ジーナさんがどんな人が知りたくなりました [平澤：2013/2/23]」とコメントしている。このコメントはその返信である。

にどんな変化が見られたのか見ていきたい。

3. ジーナの意識の変化

ウェブ上のBBSのやりとりでは、ジーナは受講者の中でいちばん多くのコメントを残し、ほぼ同日に返信をするなど、積極的にプロジェクトに取り組んでいた参加者の一人である。しかし、多くのやりとりをしながらもなかなか自分自身を表すことができず、逆に不安や心配が見て取れた。このあと、筆者も含むメンターがヴェネツィアに赴き、対面で活動を行うこととなる⁷。この対面の活動を通して、ジーナにはどんな変化が見られるのだろうか。

3章では、グループ活動⁸を中心に行われた現地での様子を中心に振り返りたい。

3.1. 相手の考えを肯定すること

現地では、グループごとそれぞれの動機文を読み、その動機文についてある特定の人と自分のテーマについてやりとりをする活動を行った（ここでは、このやりとりを「対話活動」と呼ぶ）。ジーナは同じグループのメンバーの一人であるマリルと対話活動を行うことになった⁹。そこで筆者もこの対話活動に同席することにした。メンターが対話活動に同席した理由は、BBSでの参加者同士やりとりを見る限り、表面的な情報交換に陥っているケースが多く、参加者同士の対話では話が深まらないのではないかと危惧したからである。ここでの筆者の立場は、できるだけ参加者2人の対話を促そうと思い、積極的な介入は避け、聞き役に回ることを意識した。そこで、対話は基本的にジーナとマリルとのやりとりが中心になった。3章では、この対話活動の様子を中心にジーナの意識の変化を追う。¹⁰

まず、マリルの動機文について話をしたのだが、このとき、ジーナは相手の話に耳を傾け、相づちをうちながら熱心に聞いている様子が印象的だった。しかし、その受け答えには違和感を感じずにはいられなかった。「よくわかります」とか「すばらしいです」など、相手を全面的に肯定していたのだ。端から見ていると、2人の言っていることに食い違いが見られる。しかし、ジーナのコメントは「ステキです」「よくわかります」になってしまいうのだ。そして、ジーナは以下のように発言している。

ジーナ：残念ながら、私はまったく賛成。あまり対話しない。それは、私はマリルとおんなじように考えますから、あまり対話しません。それはちょっと、私とマリル

⁷ 2012年3月4日～7日の4日間、このプロジェクトの関係者がヴェネツィアに赴き、対面での活動が行われた。

⁸ ここでは、3～5人の4つのグループに分かれて活動が行われた。それぞれのグループにメンターが2人ずつ入ってグループ活動を支えた。

⁹ この対話の様子は録音、メモ等で記録に残し、文字化され、最終的にレポートの一部となる。

¹⁰ 屋外のカフェで行った対話活動は周りの雑音が非常にうるさく、録音した声が聞き取りにくかった。そこで、本人の対話報告も参考にしながら、対話の様子を振り返ることにする。

さんは同じ考え方があるから、あまり対話していませんので、ちょっと残念な感じ
です。

この発言の前で、マリルは「言葉の魅力」について説明をしていた。この「言葉の魅力」
については、マリルの動機文には触れられておらず、筆者はこのときのマリルの説明を聞
いて、はじめてマリルが何を言いたかったのか理解したのだった。そこで、筆者は次のよ
うに確認している。

平澤：対話だから、絶対反対意見じゃないといけないということはないんですよ。同
じでもいいんだけど、でも、本当に 100%それに賛成できるかどうかっていうのは、
話してみないとわからないよね。本当に 100%考えが同じってあり得るのかなあ。

これに対し、ジーナとマリルは次のようにやりとりしている。

ジーナ：私、たぶん、マリルさんのようにそんなにたくさん漢文を勉強していなかつ
たが、確かにこの魅力を、マリルさんの言葉からあきらかに感じています。

マリル：私が、漢文とか、道元の勉強から気づいたことなんですけど、たぶん、ジー
ナはほかのことから気づいたことでしょ？漢文が全然わからなくても、例えば、自
分の経験からいろんなことから、こういうこと、私のことがわかったんですって。

ジーナ：私もそう思いますけど…

マリルも「マリルさんの言葉からあきらかに感じています」というジーナの発言に違和
感を感じたのだろう。本当にわかったのかを確認している。そこで、筆者は、どんなこと
がわかったのか、ジーナに説明を求めた。対話を重ねるうちに、ジーナとマリルとで理解
の相違が生まれていることがはっきりしてくる。

平澤：マリルさんが言葉の魅力をどういうふうに感じるのかというところがはっきり
書いてないから、そこがもっと読みたいなと思ったんだけど…

ジーナ：私はこれを読んで、たぶん、私はマリルさんの気持ちを感じるような気がし
ました。

平澤：どんな気持ち？

ジーナ：例えば、さっき言ったとおり、そのすばらしさの力で、どれだけ、マリルさ
んが漢文が好きですか。たぶん、感じだけ。でもちょっとわかるような気がします。

平澤：マリルさんが伝えたいことは、ジーナさんがいうような「漢文が好き」という
ことを伝えたいの？

マリル：実は、伝えたいのは、漢文からわかったことですね。伝えたいことは、毎日使っている言葉とか、言葉を通じて、自分の気持ちとか性格とか、自らを伝えることができるということなんですけど、はっきり書いていないので、問題になってしまう。

平澤：さっきジーナさんは、マリルさんがすごく漢文が好きってことがわかったって言ったんだけど...

マリル：言いたいことはちょっと違ってきますよね。

このやりとりを通して、マリルは自分の書いたものが相手に正確に伝わっていなかったことを認識する。また、ジーナも「わかる」といっていたにもかかわらず、「わかる」という言葉に相手が納得していないことに気がつき始める。このあとも、それぞれが考える「言葉の魅力」についての話が続けるのだが、徐々に二人の考え方の違いが浮き彫りになっていった。例えば、「いいえ」という言葉の使い方について、次のようなやりとりがあった。

ジーナ：私にとっては、日本人は、「明日はちょっと...」を言って、それは「いいえ」だと思いますけど、イタリア人は、オープンなイタリア人は「いいえ」って言って、それで終わり。

マリル：違うでしょ。

ジーナ：それは、私の個人的な意見ですが、イタリア人は「いいえ」の言葉を言って、言いやすいと思います。たぶん、私は、言えないので、それは、私はほかのことを経験した場合、たぶん、マリルさんは違う経験をしたから、マリルさんの知り合ったイタリア人は「いいえ」を言えないので。

ここでの「いいえ」の使い方についてはジーナとマリルは明らかに異なる見解を持っていた。ジーナはこれまで、全面的に肯定する反応をしていたのだが、徐々に相手と異なる意見を言うようになる。そして、対話の最後に筆者が「マリルさんのこと全部わかるって言ってたけど、話してみると違うね」と感想をもらすと、ジーナは大笑いしたのだった。

ジーナはBBSのやりとりでは、筆者のコメントに対し、全面的に肯定するようなコメントを書いていた。そして、メンターが求める質問に対して「間違えた」コメントをしているかもしれないと不安を感じ、何度も謝っている様子も見られた。ジーナと直接対話をして改めて感じたのは、もしかしたら、ジーナのいう「間違える」とは、他者と違う考えを述べることへの恐れから生まれたものかもしれないということだ。実際、ジーナは「いいえ」の使い方をめぐる話のなかで、「私は、いいえの言葉をあまり使わないです。いやがっている言葉ですね。」と発言している。筆者がジーナの述べた「イタリア人は『いいえ』を言いやすい」という発言を受けて、「でも、ジーナさんはイタリア人でしょ」と問いかける

と、「はい、でも私は、イタリア人と、あまり、イタリア人の気持ちを感じていないと思います。」と述べている。ジーナ自身、もともと相手の意見を否定するのが好きでないことが、相手の意見を否定することに不安を感じる一因であったとも考えられる。また、ジーナの中では、「いいえ」をはっきりいうイタリア人、「いいえ」をはっきり言わない日本人という固定観念があり、日本人であるメンターに対して違う意見を言うことを恐れていた可能性も考えられる。

3.2. 意見の違いがもたらしたもの

ワークショップ初日の対話活動では、主にマリルの動機文について話をして終わった。そして、翌日はジーナの動機文についての対話がマリルと筆者を交えて行われた。この対話の様子は、ジーナの対話報告を中心に振り返ってみたい。

ジーナの動機文についての対話は、ジーナが BBS 上で何度も繰り返し述べていた日本の古典や音楽から感じる「色」について、また「古典からみた私」というタイトルをつけていたにもかかわらず、「音楽」にこだわっている理由、それから、川端康成の『雪国』についての話を中心になった。

「色」をめぐる話では、ジーナにとって「色」が何か他の人より、特別な意味を持っているのだということが感じられた。日本に対するイメージが広がったということ「色が増えた」と表現していたことから、はじめは「視点の広がり」を色という言葉で表していると感じていた。しかし、ジーナは「音楽」を聞いても「色」や「景色」が思い浮かぶと話していた。このことについてジーナは対話報告の中で次のように述べている。

音楽の話が出てきた時に、前の色は確かに「感情」という意味もあったのを考え始めた。音楽と古典と本をつながっているものはどれだったのかについて考えて、ついに色や感情のことに届いた。

ジーナにとっての「色」とは単なる比喩表現ではなく、日本の文学や音楽から、色を伴った景色や感情がジーナの中で生まれていることが感じられた。このジーナの感覚は、川端康成の『雪国』の話でもっと鮮明になる。以下はジーナの対話報告からの抜粋である。

私¹¹：川端康成は一番日本作家を読んでいたから、日本の文学に考えるとすぐ『雪国』に思い出す。これを読んだから、日本の文学は他の文学と違っていて、本当にいいと思います。

マリル：はい、でもどんなふうに違っているのか。

¹¹ 「私」は対話報告を書いているジーナのことである

私：それは難しいけど、例えば『雪国』の全部が白くてそれは寒くて、他の文学の作品を読んで、こんな冬の気持ちが出てこなかったから、川端康成とこれは一回目に感じていたと思う。それで、いつもその景色を思っていて、私の頭の中から明らかに見えるから・・・

マリル：景色について強い印象を残っていただけですか。登場人物にも印象が残っているか。

私：登場人物は大切だが・・・もっとも季節の色のことだった。登場人物は確かに大切で、話の流れも大切なのだが、それは感情や気持ち、感動的ことを出で。それは大切なのだ。

マリル：面白いのは、『雪国』を読んだが、印象はまったく違って、なんか真っ白の景色は登場人物に影響を与えと思う。シマムラさんはいつも迷っていて、女性に対してあまりいい態度をしないから、自然と登場人物にはバランスがあって、色はそんなに大切だと思わない。

私：それぞれの人々は違う感じ方。私とマリルさんは同じを読んでいて、別の感じが生まれてきて、素晴らしいと思う。読んだ時、これは詳しくて、白いの感じが出てきて、一番感じたことは白い雪や寒さ感じが出てきて、話の流れは大切ですが白い雪の白いは一番感じたこと。

この2人の会話の様子は、前日のものと明らかに異なる。ジーナは相手の考えを肯定するだけでなく、はっきりと自分の考えを示している。2人の対話からは同じ文学作品を読んでいるにもかかわらず、それぞれがまったく違う印象を受けていることがわかる。マリルが著者の心理と色の関係について論理的に説明しているのに対して、ジーナは色からうける感情や感覚について述べており、捉え方の特徴が際立っていた。このやりとりを通して、ジーナは自分の捉え方の特徴に気づいていく。そして、この対話報告のまとめでは次のように述べている。

この対話を続けると、感情だけではなく、感じ方も違っていると気づいた。例えば、マリルさんと私が読んでいた『雪国』についてだ。両方もこの本を読んで、大好きだったが、私達の感じ方は全く違った。これは私の考え方について考えだしたと思う。

対面での対話をする前のBBSでは、「ジーナさんはどんな人か」と問われ、「普通の大学生だ」と答えていた。自分には特徴がなく、特別に話すことなどないと主張していたように感じた。しかし、ジーナは、対話活動において自身の考えのやりとりを続けることによって、自分の特別な感じ方に気がついていったのだ。そして、このプロジェクトを通して感じたことを「結論」として以下のようにまとめている。

この対話の後には、私は最初思ったことについて書きたくなかったが、これは「古典」は私に感じさせる感情について書きたかったと思い切った。この結論に届いたのは本当に嬉しいだと思う。この結論をまとめると、最初にした「古典」について動機から、最後には「日本の感じさせること」について対話と結論を書いてしまったようだ。私はいつも感動的な人だったから、日本に見つかった感情的で感動させることはたくさんあるから、本当に嬉しい。

ここでジーナのいう「私はいつも感動的な人だった」というのは、対話活動から明らかになったことであり、他の人とは違うジーナ自身の特徴を表すものであった。プロジェクト全体を振り返った「終わりに」で、ジーナは、「私は感じたことは皆さんと同じではないと気づいた」「このプロジェクトに参加したのは、本当に幸せな気持ちを感じた」と締めくくっている。この活動を始めたときジーナは「間違える」ことを恐れ、謝ってばかりいた。また、自分は「普通の大学生だ」と特徴がないことを語っていたのだが、他者の意見を全面的に肯定することをやめ、他者との違いを表現することによって、他者とは違う自分の特徴が見えてきたと言えるのではないだろうか。

4. 考察 ー何が「間違っている」という意識を生み出したのかー

本章では、ジーナの意識の変遷から、なぜ「間違っている」という表現が使われたのか筆者が感じたことをまとめてみたい。

日本語教育の文脈において「間違えました」と言ったとき、それは文法や語彙表現など、「日本語」に対して使われることが多い。しかし、本プロジェクトの活動では、文法や語彙の使い方等の訂正は一切行わなかった。メンターは、ただ「あなた自身を表現してください」ということを求める。ジーナが「間違っていました」と発言したあとも、メンターは「間違いがあるとか、不適切だとかそういうことはない」「間違いも正解もない」と繰り返し述べている。そして、ジーナ自身も「日本語が」とか「文法が」という表現は使っていない。メンターもジーナ自身も文法的な間違いを指しているのではないことは明確である。それなら、なぜ「間違っていました」という発言が生まれたのだろうか。

ここで、ジーナのコメントをもう一度見てみると、この「間違っていました」には、「私の答えは間違っていました」「私の答えは不適切でした」というように「私の答え」という表現が使われている。本プロジェクトでは、受講者自身のテーマを見つけるのが目的であり、メンターが繰り返し述べたように、そもそも受講者の答えに「正しい」も「間違っている」もないはずである。ジーナのいう「私の答え」とは何を指すのだろうか。このあとのジーナの発言には、筆者の考えは正しいと全面的に肯定するという態度の変化が見られ、

自身を語ることへの不安が表明されている。この変化の意味するものは何だろうか。

筆者は、ジーナが「私の答えは間違っていました」と言ったとき、そこには、日本人であるメンターが正しい日本語、さらには正しい答えをもっているという意識があったのではないかと考える。本プロジェクトのメンターのほとんどが大学院生であり、本来なら立場はそう変わらないはずである。しかし、同じような立場である筆者の考えが正しいというジーナの発言に、何か筆者に対する権威的なものを感じたのも事実であり、心理的な距離も感じた。無意識であるにしても母語話者であり、メンターである筆者が優位な立場にあるとジーナ自身が感じていたと考えられるのではないだろうか。

あるいは、筆者が意図的にコメントの中で語った筆者自身の経験がジーナの不安を導いたとも考えられる。メンターという立場に立ち、「あなたのことを自由に表現してください」と言いつつも、意識の奥のほうでは「あるべき方向」へ導こうとしている自分がいたのではないだろうか。筆者の考えを「正しい」とし、全面的に肯定するというジーナの意識は、母語話者としても、メンターとしても優位的な立場に立ち、無意識に誘導しようとした筆者への抵抗であったのかもしれない。このとき、ジーナが感じた「恐れ」や「不安」は、日本語ではなく、自分の考え、自分自身が否定されてしまうという不安であったとも考えられないだろうか。

また、ジーナの変化にも注目したい。ジーナはこの活動を通じて「皆さんと同じでない」特別な自分の存在に気がついている。ジーナが筆者に対して「私の考えは間違っていました」という発言をするまえ、筆者は自身の経験を例に出してコメントした。しかし、これは日本へ行ったことのないジーナにとって、正しさを伴った特別な事例のように感じたのかもしれない。ジーナは「バカな考え」という表現を使い、「自分は普通」であるから特別なエピソードはないのだと訴えているように感じた。対話活動を行うまでは、ジーナは自分が「特別である」という感覚を持ち合わせていなかったように感じる。つまり、メンターが「ジーナ自身のことを教えてほしい」と繰り返しても、ジーナ自身が「教えられるような特別なことはない」と思っていたら、自分について語るのは難しくなってしまう。人一倍、多くの書き込みをしたにもかかわらず、ジーナ自身がなかなか見えてこなかったのは、「語る自分がない」という意識が影響したのではないだろうか。しかし、他者との意見の違いを表明するという活動を通して、徐々に自分を表現し、「感動的な人」という自分を発見した。そして、そのとき、ジーナの発言からは「間違っている」という表現は消えている。同時に、表現することへの「不安」も解消されたと言えるのではないだろうか。

「間違っている」という感覚はさまざまな要素が複雑にからみあって、人を「不安」に導く。その「不安」が自身を表現することを妨げているとしたら、また、日本語を正しく導くことによって、個人の表現まで否定するとしたら、無意識のうちに起こっていることであったとしても、看過できない大きな問題であるように感じた。

5. おわりに

「考えるための日本語」に、今回初めて参加させていただいた。海外で日本語を学んでいる学生同士で様々なやりとりをしながら、海外で外国語を学ぶ意義について考えさせられた。

はじめのBBSでのやりとりでは、同じ学生であるにも関わらず、何か自分のほうが、優位に立っているような居心地の悪さを感じた。また、このときは、自分自身、「なんとかいい活動になるように」という気負いもあったように思う。しかし、実際に会って対話を重ねるうちに、そのような優位性は徐々に排除されていったように感じる。実際のやりとりで使われていた言語は日本語であるが、そこには母語話者、非母語話者という関係ではなく、もっと深い部分でつながったような感覚を覚えた。

ずっと、活動を共にしてきたジーナさんであるが、彼女にとっても私にとっても何か大切なものを共有できたという不思議な感覚を覚えた。日常、友人や家族と話していてもなかなかこのような感覚を得ることは難しい。それが、日本語教育という文脈で行われた活動を通じて実感できたという点で、日本語教育の可能性を感じる活動となった。

最後に、私の執拗な問いかけに真剣に向き合ってくれたジーナさんとこのような機会を与えてくださった本プロジェクトに感謝したい。

参考文献

細川英雄＋NP0 法人「言語文化教育研究所」スタッフ（2004）『考えるための日本語』明石書店

日本と私をつなぐ意味 —日本語活動実践で参加者が得た副産物に注目して—

The significance connecting me and Japan
- Focusing on the serendipities experienced by participants through their Japanese
language activities -

道端 輝子・工藤 理恵
(MICHIHATA, Teruko・KUDO, Rie)

概要

本稿は、本プロジェクトの一つのグループに注目し、5名のメンバーが「日本と私」というテーマでレポートを書き進めるプロセスを追い、日本と私、すなわち個人の興味の対象と自分自身をつなぐ意味について考えることを目的とする。メンバーは、興味の対象と自分の関係を位置づけるため、対話活動によって自分自身を振り返り、自身の経験や考えを表現しながらレポートを書き進めた。このプロセスによって、メンバーは思いもよらなかった自分を発見し、さらにはメンバーと自分との間に何らかの重なりを発見していく様子が見られた。他者との対話で個人の興味の対象と自分自身をつなぐことによって、他者と出会い、他者の中に自分を再認識する、または発見することができたのである。

Focusing on one group in the project, the purpose of this study was to follow the process of five members writing their reports on the subject of "Japan and me," and consider the significance connecting them to Japan, in other words, the significance connecting them to their personal interests. In order to map out the relationship between themselves and their interests, the members reflected on themselves through conversational activities and wrote their reports expressing their own experiences and thoughts. Through this process, it could be seen that the members discovered aspects of themselves they had not thought about before, as well as overlaps between themselves and other members. By connecting themselves with their interests through conversation with others, they were able to encounter others, see themselves in a new light, and make discoveries about themselves.

1. はじめに

本プロジェクトにおいて、筆者らはカ・フオスカリ大学のプロジェクト参加者 5 名による 1 つのグループのメンターとして、活動を共にした。「日本と私」という副題でレポートを書き進めるプロセス（実践の枠組みについては●頁に委ねる）において、メンバーは、自分の興味の対象と自分の関係を位置づけるため、自分自身を振り返り、また自分のことを説明するために経験や考えを対話によって表現し合った。本稿では、メンバー個人の実践プロセスに沿い、日本と私、すなわち個人の興味の対象と自分自身をつなぐ意味について、明らかにすることを目的とする。

日本語教育における実践活動では、何か自分の考えを述べ、それに対する理由を説明することは、様々な場で繰り返し行われていると言えよう。日本語の上達のために、そうしたやりとりを繰り返すうち、日本語を使うこと自体が目的化してしまい、やりとりの内容そのものにあまり意味を見出せなくなる経験に、一人の実践者として身に覚えがある。つまり、日本語のための日本語のやりとりになり、やりとりそのものの意味が非常に希薄になる、という感覚を得ていたということである。しかし、本プロジェクトでメンバーは、そうしたやりとりを得た先にある何か―「セレンディピティ」を得ていたと言う。プロジェクト終了後、メンバーは本プロジェクトに参加した感想を述べ合う中で、本プロジェクトそのもののプロセスにもそれぞれの意味を見出しながら、同時にプロジェクト終了後に「セレンディピティ」を得ていたこと、そしてこの偶然得た副産物こそ大切なものだったと口にするようになったのである。つまり、本プロジェクトにおいてメンバーは、「日本と私」すなわち「興味の対象と自分自身」をつなぐプロセスを経ながら、何らかの「副産物」を得たということである。ここでは、一人一人のセレンディピティに注目しながら、本プロジェクトで行われた、日本と私をつなぐ意味を明らかにしたい。

本稿では、参加者たちがどのようなプロセスを経ながら、どのような副産物を得ていたのかに注目しながら、本プロジェクトにおいてメンバーら一人ひとりが「日本と私」すなわち、興味の対象物と自分自身をつなぐ意味とは何であったのかを明らかにすることを目指す。

2. 分析方法

分析対象は、Web 上のやりとり、提出されたレポート、ワークショップのやりとりを録音したもの、筆者らのフィールドノーツである。分析の手順は以下の通り。尚、分析は S.B. メリアム（2004）を参考に行った。

- 手順 1、参加メンバー別に分析対象となるやりとりレポートの内容等を時系列に並べる。
- 手順 2、「日本と私」をつなぐプロセス、すなわち個人の興味の対象と自分自身がどの

ように関わりを持つのかを表現するプロセスに印を付ける。

手順3、手順2を並べ、意味の似たものでまとまりを作る。

手順4、まとまりの中の代表的な語り（やりとり、レポートの内容等）に印をつける。

手順5、手順2～4を何度も繰り返し、その「日本と私」をつなぐ意味を記載しながら、それらが飽和するまで続ける。

手順6、手順5で出来上がったものを手がかりに、実践のプロセスを時系列に記述する。

これら手順1から手順6をふみ、分析が行われた。

3. 「日本と私」をつなぐプロセスと、その意味

次に示す5人は、「日本と私」をつなぐプロセス、つまり「ある興味の対象」と「自分自身」の関係をレポートに書き進め、また対話を進めながら明確にするプロセスを経験している。そして、そのプロセスを経ることで、それぞれ「セレンディピティ」があった、と5人は語っている。ある参加者は、「セレンディピティ」は、「偶然で思いがけない発見」「チョコレートケーキを作りたい場合、ベーキングパウダーを忘れ、ケーキより美味しいブラウニーみたいな物がついてしまうようなことでしょうか」(後書きより)と説明する。つまり、参加者たちは「ある興味の対象」と「自分自身」の関係を明確にするプロセスにおいて、ある副産物を得たということである。

ここでは、5人それぞれのセレンディピティに注目しながら、「日本と私」をつなぐ活動プロセスを追い、その意味について考える。

3.1. ルカの場合

「私は日本の文化に興味があって、特に文学やポップカルチャーに関心があります。」という一文から動機文を綴り始めたルカ（仮名）は「面白いテーマを決めてそれについて話し合って十分だ」（終わりにより）という心意気で、日本語のブラッシュアップのために本プロジェクトへの参加を決意したという。それを反映するように、ルカが最初に書き上げた「日本と私」の動機文には高校時代に友人に勧められた吉本ばななの「ツグミ」から始まり、様々な日本人作家の文学作品や日本映画の名が挙げられていた。ルカは文豪と呼ばれる日本人作家から現代において活躍している作家まで様々な小説を読み、日本のバンドに興味を持ち、日本映画にも関心の幅を広げていったという。

そしてルカは自分のテーマを以下のように語っている。

日本で新しい小説が大ヒットになったら、日本語がまだ下手なので原語で読めなくて、イタリア語に翻訳されているのを待たなければなりません。日本での名声とイタリ

アでの名声を比べると、イタリアで知られていないことやイタリア語で読めないことが大変で残念だと思いました。（動機文より）

ルカは「日本でかなり有名だそうです、イタリアでは筒井の小説は一冊も翻訳されていません」（動機文より）と語り、日本で人気がある作品がイタリアでは出版されていないこと、また、「日本での名声とイタリアでの名声を比べると、イタリアで知られていないことやイタリア語で読めないことが大変で残念だ」（動機文より）と語っていた。そして日本の作品がイタリアではまだまだ浸透していないことに対する悩みを語り、仮にイタリア語に翻訳され世に出ても、日本におけるイメージとはずれて広まることへの苛立ちを語り始めたのである。

そんなルカにメンバーは「どうして筒井の小説が翻訳されて欲しいですか」（対話報告より）等、なぜ日本の作品がなかなかイタリアで翻訳され出版されないことがルカにとって問題なのかと問いかけ始めた。すると、自分の興味の対象である日本文学がイタリアで日本同様に浸透しないことに対して「悩み、問題」と捉えていたルカの考えが、日本文学がイタリアでなかなか浸透しないことは「当たり前」だという捉え方へと変化を見せ始めた。そしてこの小さな変化がきっかけとなり、更なる変化が生まれたのである。

カーチャと対話したら、もっと楽観的にテーマを見られるようになったと思います。日本文学が大好きなので、テーマを書いた時イタリアにいますから日本で新しく有名な小説が読めないという悩みを述べてばかりいたかもしれません。しかし、当り前の問題なので、どうして私にとって大きな問題として見なされていたか自問し始めました。たぶん、日本文学に興味があって、いつか翻訳家になりたいと思っていますから、できるだけたくさんの日本作家の小説がイタリア語に翻訳されているのを憧れているかもしれません。（対話報告より）

ルカ自身、大きな問題と捉えていたことが、グループのメンバーとのやりとりから「当たり前」と変化し、さらにはなぜ私は問題にしていたのかと自分自身に問いかけ始めたのである。つまり興味の対象に向けられていた意識の矢印がその興味の対象を通して、自分自身へと方向を変えたのである。そして見つけ出した答えが、翻訳家になるという将来の望む自分の姿であった。

その後、他のメンバー達とも対話内容についてやりとりを重ねることで、さらにルカのテーマは形を変え、深まっていった。

対話をした時、確か相手も私もまだテーマに拘っていたような気がします。報告したら、テーマを広げられるだけでなく、飛び越えられるようになったと思います。

(結論より)

ルカはテーマを「飛び越えられるようになった」と語った。さらには「おそらく「日本」の好きなところについて書き始めたら、言外の意味を読み取って見たら「私」ということがわかるようになるかもしれない」(終わりにより)とも語っている。これが意味すること何であろうか。これが意味することとは、「日本」という興味の対象から始まり、そのテーマへのこだわりを他者とのやりとりで脱ぎ去ることで、当初のテーマを飛び越え、その先にはまだ意識していなかった「自分」を見つけることができたということであろう。ルカはこの「自分」を見つけることについて次のように語っている。

テーマというのは、もちろん大切でしたが、たぶん口実のようだったでしょう。テーマから生み出したのはテーマよりずっと大事な自分に関する新しい見方だと思います。もしかしたら、こういうことはセレンディピティとも言えるかもしれません。探していなかったのに、やはりできてよかったと思いますから。(前書きより)

ルカにとってのセレンディピティは興味の対象について語ることよりももっと大切な「自分に関する新しい見方」を見つけたことであったのだ。この「自分に関する新しい見方」は将来翻訳家になりたいと願う自分だけでなく、また違った「自分」の一面も意識させるのである。

子供の時興味をシェアしてみる勇気があったら、たぶん寂しくなかったでしょう。だからこれからもできるだけたくさんの人と好きな本だけでなく、興味があることも分かち合えたらいいと思います。そして一生出会えない人でも、私はその人にいい影響を与える本が翻訳できたら、たぶん私の場合のようにその人においても新しい視野が開けられるかもしれません。(結論より)

ルカは子供時代に興味のあった文学を友達と共有できず、孤独であったと語った。だからこそ、子供時代の孤独を埋めるように、興味がある日本文学を翻訳し、多くの人と共有したいと考えたのだ。一人でも多くの他者の人生にいい影響を与えたいと考えるからこそ、日本文学がイタリア語にあまり翻訳されないことに不満を持っていたのだ。

興味の対象である「日本」に焦点が当たっていたテーマから、子供時代の孤独や翻訳家になる夢、さらには例え顔の知らない他者に対しても「いい影響」を与えたいと願う「自分」を新たに見つけ出したのである。

3.2. マッシモの場合

マッシモ（仮名）は「面白い」「日本語に勉強になる」「もっと上手に日本語で書くようになりたい」（あとがきより）という動機から本実践への参加を決め、「伝統と最新の調和」というテーマを掲げた。この「伝統と最新の調和」とはマッシモの中に存在する「日本は現代国としてそんなにたくさんの伝統的なことが生き続けているかおもしろい」という興味と日本の最新のゲームが大好きだという意識から立ち上がったテーマである。伝統と最新のものがうまく調和している例として任天堂のゲームを掲げ、それがなぜ調和と呼べるのか、なぜ魅力的なのかを書き綴った。BBSや対話の中でも「古いことと新しいことがそんなにつながれているのは、一番感動しているぐらい美しいの考え方だと思います」（動機文より）と語り、ゲーム以外にも日本の建築や町づくりなどの例を用いて、日本の「伝統と最新の調和」がいかに素晴らしいものかとうとうと語ったのである。

しかし一方で、本実践の共通テーマである「日本と私」の「日本」については書きたいことがたくさんあるのだが、「私」については何を語り、何を書けばいいのか分からないとも語った・

このテーマに「私」を入れるのは本当に難しいです。（動機文より）

つまり興味の対象である「日本」、「日本の伝統と最新の調和」については語りたいことが溢れんばかりにあるのだが、その興味を抱く「私」とはという問いには答えるすべを持っていなかったのである。

その後対話活動が始まり、グループのメンバーからなぜそんなにも伝統を重要視するのか、古いものと新しいものをミックスさせたら古いものはなくなってしまうのではないかという問いがマッシモに投げかけられた。そこでマッシモは次のように答えた。

いろいろな建物の例があったけど、他のこともそうです。時間が続けば、少しずつ古いものと伝統がなくなるのは当たり前です。もちろん、伝統的なものは大切にされる欲しいです。しかし、これはできなければ、古いの魂が変わった形で新しいものに残れば充分だと思います。（対話報告より）

ゲームや建物など、物質的、技術的な面での「伝統と調和」を意識していたマッシモであったが、「古いの魂」という可視化できないものが過去から未来へと生き続き、過去と現在さらには未来が調和することに魅力を感じる自分を意識し始めたのである。日本のゲームに対する興味を始点とし、伝統や技術が生き続ける調和、さらには「魂」という可視化できないものが生き続ける調和に対する魅力へとマッシモの考えは広く、そして深くなり

始めたのである。ここで、ある一人のメンバーから「自分と相手の考えを近づくことも調和ですね」（対話報告より）と投げかけられ、マッシモは新たな気づきを得る。

いろいろな調和があります。例えば人々の調和、つまり協力、お互いに理解することなどです。人の考えや意見などですそして自分の調和もあります、昔と今の自分も調和しています。（対話報告より）

過去と現在、未来の調和に魅力を感じていたマッシモであったが、他者と理解し合い、協力し共存することも「調和」と捉える自分に気づいたのである。さらには、「昔の自分」と「今の自分」が「調和する」、つまり過去の自分は忘れ捨てていくのではなく、過去、現在の自分を受け入れ、未来を拓いていきたいと望む自分を発見したのである。この発見から分かることは、当初のマッシモのテーマ、日本のゲームや建物の「伝統と調和」に対して感じる魅力の背後には、他者、さらには過去の自分と現在、未来の自分との調和に対しても魅力を感じ、渴望しているマッシモがいるということである。

初めに日本のことに集中したばかりような気がしましたが、今本当に自分がもっと出てきたような気がします。ずっと日本について思っていたけど、結局自分の見方もでした。（結論より）

テーマに「私を入れるのは本当に難しいです。（動機文より）」と語っていたマッシモであったが、いつしか「私」が浮き上がってきたのである。この発見こそがマッシモの偶然で思いがけない発見、つまりセレンディピティであったのだ。

では、このセレンディピティはどのようにして生まれたのであろうか。マッシモはグループのメンバーとのやりとりや関わりから生まれたものであると最後に語っている。

最初に、日本の伝統と最新の関係について書きましたけど、私が書いたもののなのに、思えなかった新しい感想が出てきました。鏡のように、でもただの鏡よりもっと深くて、他の人の力によって隠した自分が見えました。（終わりにより）

マッシモが一人でこのテーマに向き合い動機文を書いた時点では「鏡」がなく、自分の中にある「思えなかった新しい感想」が浮き上がってくることはなかった。しかしグループのメンバーとやりとりがマッシモの「私」を映す「鏡」となり、これを通してマッシモ一人では見えていなかった自分や意識を向けていなかった自分を見つけ出すことができたのだ。

3.3. サラの場合

大学2年生のサラ（仮名）は、本プロジェクト参加当時、実践期間終了後に初来日を控えていた。来日を楽しみにしながら、日本語の更なるブラッシュアップのためにと本実践に参加したサラは、実践でのテーマを「日本の女性の状況」とした。サラは、BBSで参加者に「日本人の友達の話によると日本の女性は社会的習慣のせいで、本当に自分の将来が自由に決められるかどうか、分かりにくいそうです」「昔より就職する女性が増えてきました。でも、男の人ほどなかなか成功できません。」「今日の日本の社会は本当にそうですか。」

（2月13日投稿）と、問いかけている。日本在住者の多く参加する本実践で、これまでにサラ自身が見聞きした情報や調べた内容の真偽を確かめたい、または確信を持ちたかったのであろう。未だ見ぬ日本社会の情報を集めたい、という印象も残っている。

サラは不快に思ったかもしれないが、恐らくサラの求めた「日本では普通…」「日本の女性は…」という一般論に話が及ぶことはなく、次のような質問が続いた。「サラさんはどうして「女性」の問題に興味をもつようになったのでしょうか。」（2月15日）「私は、「女として」「西洋人として」ではなく「サラさんとして」このテーマがなぜ「非常に重要なテーマ」なのか、それをもう少し具体的にお聞きしたいです。」（2月16日）つまり、テーマとサラがどのような関係なのか、という質問が相次いだのである。日常から何かデータをまとめて、それに対する感想を書き、レポートを仕上げるのが習慣となっていると、面食らう質問かもしれない。サラにとっても、恐らく思っても見ない方向からの質問だったと思われ、この質問に対して次のように答えている。

これは、少し答えにくい質問です。実は、特に理由はありません。

女性に対して抑圧の話聞きつける度に腹が立ってしまいます。（2月18日）

興味があることをテーマに話す場で、「何に興味があるのか」は話せても、「なぜ興味があるのか」は一つ、難しい質問なのであろう。案外私たちは、自分自身で「なぜ」を自覚していない。多くの参加者が、それなりの理由を述べ始める中で、サラは少し焦りのような、困惑したような表情を見せていたように記憶している。（フィールドノーツより）うまくテーマと自分自身の関係を見出せないことと、一般論から離れられないというディレンマの中で、うまく語れない苦しみを感じつつ、語ることに抵抗を感じていたのかもしれない。

この状況を打破したのは、メンバーとのやりとりの中で生まれたキーワードであった。BBSや対話では、サラの怒りに焦点が当たり、「なぜ腹が立つのか」「日本の女性の状況なんて、サラには関係ないのに」という問いかけが続いた。はじめは「なぜ腹が立つのか、自分でも分からない」「もしかしたら、私の子どもが日本で辛くなるかもしれない」としど

ろもどろ答えていたサラに、ある参加者が次のように語りかけた。

どうして自分でコントロールできないことに怒りますか？

メンバーたちは、コントロール、というぱっと浮かんだその言葉に「それだ！」と顔を見合わせ、そこには不思議な一体感が生まれていた。サラは「コントロールできないもの」の象徴として、「日本の女性の状況」を挙げていたのではないか、「コントロールできないもの」は多くあるけれど、それらのものとどう付き合えばいいのか、というのが彼女の本当のテーマではないのか――。

メンバー全員がそう感じていたように、サラはコントロールというキーワードを得、少しずつテーマと自分の関係を見出し始める。幼い頃から背が小さいことをからかわれながら、どうしても出来なかった経験、仲の良い友人とうまく意見が合わない時の葛藤とどのように付き合っていけばいいのか。うまくコントロールできない事は全て、これまで避けてばかりだった、と記憶を反芻しながらゆっくりと語り始めた。この一体感を持ったグループの中で、サラは以前感じていたであろう、語ることへの抵抗感を、語るべき場所へと変容させたように感じる。

る。

次にサラが直面したのは、コントロールできないこととどう付き合えばいいのか、という壁であった。サラは「私なんか、エゴイストかなあと思いました。」（結論より）と、自分自身について振り返る作業も始める。そして、最終的にサラは次のように着地する。

一番目の動機文を書き直したり、皆さんと話したり、対話したりして自分について知らなかったことが少しずつ分かるようになりました。そのことはコントロールということです。コントロールは私の考えで苦しいことと好きではないことが自分の力で変えられない場合は、そのことを避けるということです。（略）このプロジェクトを通して分かったことは私とある人は考え方が近くないと、その人に近づけません。たぶん、この理由で色々な問題に心配するでしょう。問題をあらかじめ解決してみたら、周りの人となかがよくいって続くかもしれません。または、将来の自分を守るために、周りの人と環境の問題を予知してみます。（結論より）

すなわち、コントロールできないことを避けるという自分自身を変えたいという結論を見出したのである。これはサラ自身にとって「予想できなかった結果」（終わりにより）すなわちセレンディピティであったと結んでいる。

サラは、「日本の女性の状況」から「コントロール」というキーワードを得、テーマとサラを繋ぐプロセスにおいて、語るべき場所を得るという経験をしていた。そして、語るベ

き場所を得、他者とやりとりをする中で得たのは「予想出来なかった結果」というセレンディピティだったのである。

サラにとって、日本の女性の状況と私をつなぐ意味とは何だったのだろうか。実践のプロセスから明らかになったのは、「特に理由はありません」と言いながらも「なぜか腹の立つ」と言い選んだ日本の女性の状況に、無意識のうちに自分自身の経験を重ねていたことである。それを、メンバーと対話することでより強く意識化し徐々に語り始めたサラにとって、日本の女性の状況とサラをつなぐことには、対話により自分の経験を語る場を得るという意味があったと言えるだろう。

3.4. カーチャの場合

ロシア人のカーチャ（仮名）はシベリア大学に入学すると同時に、日本語に出会った。この出会いは自ら望んだものではなく、学部長によって決定されたものであったという。偶然から始まった日本語学習の中で、ある一人の教師の「日本語は言葉と文法しかないと思うな。言葉の意味と言うより、状況を読み取らなくてははいけません。」という一言が契機となり、「曖昧な日本語」に大変興味を抱くようになった。そこでカーチャは「曖昧な日本語」とは何であるのか、日本人論や日本文化と行動様式に関する書籍を読むことによって明らかにしたいと考えていたのである。そんなカーチャがテーマに掲げたのは「曖昧な日本語」であった。

一番目の動機文を書いた時、「私のテーマについて忌憚ないご意見を聞かせていただきたい」と思いました。（冊子ははじめにより）

当初、カーチャが考えていた本プロジェクトの目的とは「曖昧な日本語」を明らかにすべく、「日本人」に意見を聞き、「選んだテーマを調べたい」（結論より）というものであった。さらには「曖昧さを調べて自分のプロジェクトを科学的にしたかった」（結論より）カーチャはBBSでのやり取りの中でも、自分のことについては話さず関心のあるテーマについて質問し、語っていた。メンターに「なぜ、カーチャさんは曖昧な日本語に興味があるのか」と問われても、なぜそんなことを聞かれるのか、なんと答えればいいのかなかなか分からなかったという。

そんなカーチャの考えが揺さぶられ始めたのは、グループのメンバーとの対話がきっかけとなっている。「曖昧さの知識はどうやって役に立つのか」「人間の理解よりも、人類の心理が解りたいのではありませんか」と言われた。この発言を受け、カーチャは次のように語っている。

日本語を通じて日本人の行動が分かりたいと言うより、人間関係、または人類が分かりたいもので、「曖昧な」テーマを選びました。それに、この対話をした時、意外な発見をしました。曖昧さの知識を深める理由の一つは、自分が他の人を防ぐために、人の行動が予知したいです。（対話報告より）

なぜ「私」が「曖昧さ」にこれほどこだわっているのか、カーチャは「私」について考え始めたのである。さらにメンバーのある一言がカーチャにある気づきをもたらすことになった。

ワークショップの時、誰かが「カーチャさんは曖昧じゃないか」と言いました。その一瞬私の書いている作文の意味と目的はやっとぴんと来ました！日本と言うより、自分について書くべきだと言うことが分からずに、テーマとして「曖昧さ」を選んで、「曖昧さ」と通して日本と日本文化を勉強して、自分の真性、自分の希望や恐れを見せることも決して認識しませんでした。（結論より）

「日本語の曖昧さ」を調べ、明らかにすることというテーマから、「私」へとテーマが広がりを見せ始めたカーチャが、メンバーから「あなたも曖昧な人だ」と言われ、やっとぴんときたと語っている。これはカーチャが「日本語の曖昧さ」に関する情報を書くことが目的なのではなく、「自分の希望や恐れ」を自分自身で認識し、それを表現することこそが自身が求めている目的であると気づいたからであろう。つまりメンバー達とのやりとりを通し、「日本」にのみ当てられていた焦点が「私」へと広がり、「日本」と「私」をつないだのである。

さらに、カーチャは次のように続けた。

私は人間をよく知らないので、曖昧な表現を聞いて、不安になります。たとえ「曖昧な」謎を解いても、人間の心理を理解するようになりませんでしたけど、この勝利は私の自信を強めたと思います。これができたら、複雑な人間関係の問題もより分かりやすくなったでしょう。（結論より）

最初に「日本語の曖昧さ」を明らかにしたいというテーマを掲げた背景には、自分の中に存在する「曖昧さ」に無意識に興味に向けられていたからであった。他者を理解し、他者との関係を構築したいが、人間関係は複雑であり、自分と他者との間に存在する曖昧な表現はカーチャにとって不安なものであった。この人間関係を作る上での不安はカーチャにとって問題であり、その問題を引き起こすものが「曖昧さ」だと考えていたのだ。したがっ

て、この「曖昧さ」の謎を解けば、どのように感情や言いたいことを相手に伝えればよいか明らかになり、人間関係における不安が解消されるのではないかとカーチャは考えた。

当初、調査したいと考えていた「曖昧さ」であったが、日本人のみならず自分にも、全ての人々の中にも「曖昧さ」が存在していることに気がついたこと、また曖昧さを調査することが目的ではなく、なぜ自分が曖昧さに関心を持っていたのか、その理由が明らかになったことが「勝利」であり、不安を感じていたカーチャに自信をもたらしたのである。さらに、メンバー達に「曖昧さは悪いことか」「曖昧さから逃れたいか」と問われ、一度は矯正したいと思うものの、カーチャは自分の「曖昧さ」とうまく付き合っていくことを選んだ。

この曖昧な部分を失ったら、私の良い点も失う恐れが生じるでしょうか。これをうまく使うことはもちろん、調和も重視すべきものだと思います。（結論より）

カーチャの導き出した結論とは日本語の曖昧さに関する答えではなく、人々の中に、そして自分の中に存在する「曖昧さ」であり、人間関係に対して不安を抱く自分、さらにはその不安とうまく調和し他者とともに「共生」したいと願う自分であった。これをカーチャは「みなさんの親切さのおかげで思わぬ発見をして、やっと落ち着いた」（冊子はじめにより）と語った。これこそがカーチャのセレンディピティであったのだ。

3.5. カミラの場合

カミラのテーマは「日本文学との出会い」であった。大学院で日本文学を専攻するカミラは、如何に日本文学が自分にとって価値のあるものなのか、その出会いから現在に至るまでを書き綴った。カミラは日本文学が自分自身にとってどれほど大切なものかをかなり自覚的に捉えており、実践が始まった段階から、「なぜ私にとって文学がそれほど大切なのか」を自問自答している様子が見られた。

カミラは「日本文学との出会い」というテーマを選んだ理由について、「過去の私にはまるで「運命との出会い」のような圧倒的な体験でした」（動機文より）と説明し、文学に自分をうつす鏡の存在を求めた経験、文学を他人でもあり同時に親しい友人と捉えていたという、日本文学とカミラ自身の繋がりが如何に強固なものであることかを表現している。

活動がはじまり、グループでの対話が始まってからは、日本文学とカミラの繋がりを、カミラ自身の過去の経験から探ろうとするやりとりが進むようになる。対話において、カミラは自らを振り返り、位置づけながら、自分自身が何を考えていたのか、どのような人間なのかということを説明する機会が増え、言葉を一つひとつ選びながら発している姿が非常に印象的であった。（フィールドノーツより）それら対話を踏まえ、レポートに次のよ

うに対話報告が行われた。

幼い頃から人間関係が苦手だったと知ってるよね。例えば、母からお使いを頼んだ時は、どんな小さいことであっても、他人と話しかけることは全く出来なくて、必ずパニックに落ちてしまったこともあった。ただ、現実が最初からあまり好きじゃなかったかな…（略）いつもあまり現実との繋がりが感じられなかった私は、人の動作をどう解釈すればいいのかに迷っています。恐らく、幼少期の時から本に自分に役に立てられる知識を求めていたからこそ、世界に対する危機感が強まった思春期の頃になっては、益々文学に拠り所を求めることになったでしょう。（対話報告より）

つまり、思春期になり、日本文学はカミラ自身が現実を見る拠り所になったと説明されているのである。その後も対話を重ねながら、カミラと日本文学の関係は、現実を見る拠り所から、自分の生き方を確認する機会に変容したと、カミラは自分自身にとっての日本文学の存在を益々明確にしていく。同時に、対話を重ねる中で、日本文学にこのような関係を作る自分自身のことを、「他人とうまく関われない者」（対話報告）と認識するようになったことを告白している。

実践において、カミラと日本文学の関係の変容までをグループで共有する中で、メンバーたちから問われたのは、「なぜ日本文学か」（〇月〇日）、すなわち日本文学が興味の対象である必然性であった。そこからカミラは、カミラ自身が考える日本文学が幻想なのではないか、自分が長く追いかけてきた日本文学は何だったのだろうか、という不安を感じるようになる。日本文学という存在を圧倒的なものとして捉えていたカミラは、その必然性をうまく言葉にすることができず、「日本文学でなくても良かったのかもしれない」という不安な気持ちが生まれた様子が見られた。順調に書き進めていたレポートにも滞りが見え始め、メンバーとの話し合いで涙を見せる場面もあった。

カミラの行き詰まりを解放したのは、メンバーと対話する中で生まれた「他人とうまく関われない者」という自分自身の認識であった。メンバーそれぞれが、自分自身が何か弱さのようなものと共存しながら、それぞれの興味の対象物との繋がりを持っていることを理解したカミラは、「他人とうまく関われない者」としての自分が、どうして日本文学に魅かれたのかを考え始めたのである。そして実践で話す中で、「カミラと日本文学の間には、共生のようなものがある」「常に文学に支えられ、ここまで自分の幸せは自分の手に持って歩いてきたことを羨ましく思う」（結論より）というメンバーからの語りかけが見られるようになった。その時のことをカミラは次のように振り返る。

それを聞くと実はやけに驚きました。過去の自分を振り返ってみれば、文学に対する絶えず持っていた愛は当然だと考えました。しかし他の人の目から見ればそれほど当

たり前なことではないと改めて悟りました。確かに、私は、度にいかにも辛いことがあるものの、非常に幸せです。グループメートに言ったように、ある時この幸せはとても孤独だが、誰も壊せない、自分だけのものです。(結論より)

日本文学と共生する自分自身を認識したカミラは、その自分の生き方が非常に幸せなものであると位置づけたのである。対話の中から生まれた「共生」というキーワードから、日本文学を改めて位置づけたカミラは、日本文学である必然性よりも、日本文学と共生する自分自身について考えるようになる。

カミラの結論は、次のように結ばれている。

今まで私は文学と共に生き、成長してきたということがあったと言えます。(中略)私の一番の悩みの種は「日本に対する興味や日本にいる居心地がなくなったら、私の人生はどうなるのだろうか」ということでした。しかし、何となく、この結論を書きながら、興味が変わることは避けられないとふと悟りました。(中略)恐らく私は今人生の変わり目に入ったかもしれません。(結論より)

つまり、興味の対象が日本文学であろうと、何か他のものになろうと、何か興味の対象と共生することで成長しながら生きる自分自身を認識したことが分かる。それが日本文学であろうと、また別のものであろうと、今までのように何かと共生しながら成長することに自信のようなものを持ったと言えよう。結果的に、日本文学である必然性は、カミラにとってそれほど必要ないものであった。「他人とうまく関われない者」として自分自身を語っていたカミラは、奇しくも、「他人」との対話で、「他人」と関わることにより、結論を得たのである。

カミラにとってのセレンディピティとは何であったのだろうか。カミラはそれを、グループメンバーとの繋がりである、と述べる。

私に言わせれば、この経験に関する一番記憶に残るはずのことは、グループの皆さんと出来た繋がりです。まだ友情でもなく、他人との間の関係でもなく、少しみんなに惚れている感じがする、この偶然に発見した結び。(後書きより)

日本文学とカミラを関係づけるプロセスにおいて、自分が何かと共に生きながら成長する存在であることを認識したカミラは、それを認識するにあたり対話を重ねたグループメンバーとの繋がりを、セレンディピティ、すなわち本実践の副産物であると述べたのである。

3.6. 一人一人のセレンディピティから生まれたグループのセレンディピティ

以上、「ある興味の対象」と「自分自身」の関係をレポートとして書き進め、また対話を進めながら明確にする、つまり「日本と私」をつなぐ5人の活動プロセスを見てきた。

ここではさらに、5人の活動プロセスから生まれた副産物であるセレンディピティを振り返りつつ、ともに「日本と私」をつなぐ活動を経験した5人がどのように影響し合い、共鳴し合ったのか明らかにする。

ルカにとってのセレンディピティは興味の対象について語ることもさらに大切な「自分に関する新しい見方」を見つけたことであった。子供時代の孤独や翻訳家になる夢、そして他者に対して「いい影響」を与えたいと願う「自分」を新たに見つけ出したのである。

マッシモのセレンディピティはメンバーとやりとりがマッシモの「私」を映す「鏡」となり、マッシモ一人では見えていなかった自分や意識を向けていなかった自分を見つけ出したことであった。物質的な「伝統と調和」、また可視化できないものが過去から未来へと生き続き、過去と現在さらには未来が調和する、さらに過去の自分と現在、未来の自分が調和し、同時に他者と自分も調和することを望んでいる「隠した自分」が見えてきたのである。

サラのセレンディピティは「予想出来なかった結果」を得たというものであった。うまくコントロールできない事は全てこれまで避けてばかりであったが、避けようとする自分自身を変えたいと私は願っているのだと、語るべき場所を得、やりとりを重ねる中で結論が出たのである。

カーチャのセレンディピティはメンバーのおかげで思わぬ発見をしたというものであった。全ての人、そして自分の中に「曖昧さ」が存在していること。そして、人間関係に対して不安を抱く一方でその不安とうまく調和し他者とともに「共生」したいと願う自分を発見したのである。

カミラのセレンディピティは対話を重ねた結果生まれたグループメンバーとの繋がりであった。「他人とうまく関われない者」として自分自身を語っていたが、「他人」との対話で、「他人」と関わることにより、結論を得る経験をした。この対話、関わりからグループメンバーとの繋がりが生まれ、これこそがカミラのセレンディピティであったのだ。

5人それぞれのセレンディピティに共通していることは、自分のテーマについて対話を重ねながら、メンバーの繋がりが生まれる過程で生まれた副産物ということである。さらに、一人一人のセレンディピティが生まれる中で、グループとしてのセレンディピティも生まれたと言えるであろう。一人一人のテーマについて語り合い、戸惑い、発見していく中で、自分のテーマを表す「調和」「孤独」「共生」「コントロール」「繋がり」等のキーワードが実はメンバー達の中にも同様に存在することに皆が驚かされた。メンバーは一人一

人の違った人生を生きる人間ではあるが、対話を重ねることで、他者に対し疑問を持ち、一方で共感し、他者の中にも「自分」と重なる部分を見つけた。つまり、見えない「糸」で繋がっているというセレンディピティがグループで生まれたのである。

4. 日本と私をつなぐ意味

本プロジェクトでは日本と私、すなわち興味の対象物と自分をつなぐプロセスにおいて、5人それぞれがグループメンバーとの対話を重ねながら他者と自分の何らかの重なりを発見していく様子が見られた。興味の対象物と自分をつなぐプロセスに他者が介入することにより、他者との重なりを対話により実感することにより、興味の対象物と自分の関係をより明確にすることが可能となったと言えるだろう。本稿における日本と私をつなぐプロセスとは、他者の存在なくしては成立するものではなかったのである。

また、プロジェクト開始当初は、伝統、日本の状況など、日本語教育の実践では所謂お決まりのキーワードが多く挙がっていたが、プロジェクト実践が進み、対話を重ねるうちに、「調和」「孤独」「共生」「コントロール」「繋がり」等、それぞれの価値観や経験を語る刺激となるキーワードに緩やかに変容していったことも非常に興味深い。これらキーワードはメンバーそれぞれの根源的な問題意識や価値観に関わるもので、これらキーワードを軸として各々が経験や考えをメンバーと共有できるようになり、対話の内容にも大きく影響していたのである。そして、対話を通しそれぞれが何らかの形で他者との重なりを認め合う中で、他者との関係性の中から、3-6で述べた副産物、すなわち本来目的としていなかった成果をそれぞれに得ることが出来たと言えよう。

ここで注目したいのは、副産物を得る過程で、メンバーは他者と重なる経験を得ながら、結果的に他者の中で自分自身を再認識する機会を得ているということである。自分自身を意識するようになったルカ、自分の望む未来のあり方を発見したマッシモ、対話により自分のことをより意識化するようになったサラ、自分がどんな存在であるのかを認識したカミラ、自分がどのように生きたいかを発見したカーチャ、彼ら5人それぞれが、日本と私をつなぐ過程で、対話を通して他者との重なりを発見し、他者と繋がり、結果的にそこにいる自分自身について再認識するという体験をしているのである。つまり、本プロジェクトにおける興味の対象物と自分をつなぐプロセスとは、他者との対話により他者と出会い、他者の中に自分を再認識する、または発見するプロセスであったのである。本プロジェクトは、所謂教師主導型の実践形態をとらず、メンバー5人の日本語学習歴はそれぞれ異なる中進められた。それぞれのレポートの中の大切なキーワードは、対話を重ねる中でメンバー全員のキーワードとなり、分からない表現は色んな言葉で言い換えられながら実践は進んだ。本プロジェクトへの参加を通して彼らが感じたのは恐らく、日本語実践とは、多くの文型や新出語彙、単語を得ることだけではなく、他者との対話により他者と出会い、

他者の中に自分を再認識するというプロセスにおける言語活動こそ、日本語活動実践の一つのあり方ではないかということである。これだけ日本語で議論できた、こんなに日本語で書いた、と一つずつ自信を積み重ねながら、最後には日本語云々ではなく、この言語活動には意味があった、と彼らに感じて貰えたのではないかと筆者らは願っている。

ルカ、マッシモ、サラ、カミラ、カーチャ、5名それぞれのメンバーに、ヴェネチアでの濃密な時間とそこで共に対話を行う機会を与えてもらったことに感謝します。細川英雄先生、マルチェッラ先生、プロジェクト参加メンバーにも、心からお礼申し上げます。また、ヴェネチア滞在中、筆者らを温かく迎えてくれた皆さん、本当にありがとうございました。

ネット対話プロジェクトにおける テーマの発見が意味することとは何か

What is the meaning of discovering one's theme through an online writing project?

鄭 京姫¹

(CHUNG, Kyunghee)

概要

本報告書では、本プロジェクトに参加した3名の学生のテーマを発見していくプロセスに注目し、テーマを発見することの意味とは何かを考えたものである。3名は、「日本と私」というテーマでレポートを書く活動が展開されていく中で、どのようにそれぞれのテーマに向き合い、テーマを発見していったかというプロセスを追った。その結果、共通テーマとして挙げているが、その中にはそれぞれが見出した自分の道、なりたい自分、自分の未来予想図、信念や確信などが描かれていた。つまり、テーマは学生の中にあり、それは学生が提出するレポートややり取りの中にあつたのである。

In this report, I try to seek the meaning of discovering one's theme within the larger topic of "*Japan and myself*." Among all the participant students, I focused on a group of three. I followed their processes of finding a theme for their group report and how they confronted their theme as the project developed. In the end, they settled on the theme: "the road of one's own." Within the theme, they wrote about the way each of them find out the self they want to become, their future plans, their beliefs, etc. In other words, the theme is inside of oneself and that was inside the reports they submitted and conversations that were exchanged.

In this way, this project gave priority to the entire life of Japanese learners rather than emphasizing on a teaching style which has an immediate result, which produces visible fruits. Therefore, it is not visible to the person in charge how this project served students and how it affected the students' futures. This is why, in this project, I think it is important that the learners themselves continue to discover their own theme.

¹ 早稲田大学日本語教育研究センター (hime_0404_4@yahoo.co.jp)

1. テーマとは何か

本報告書では、日伊ネット対話プロジェクト（以下、プロジェクト）におけるテーマの発見が意味することとは何かについて述べることを目的とする。

本プロジェクトにおける全体のテーマは「日本と私」であり、それぞれのテーマでレポートを書いていく作業を行った。なぜ自分は日本に興味・関心を持つのか、自分にとって日本とは何かというテーマは、日本語を学習する学生にとって不可避の課題であったからであり、学習への動機をより高めることを目的としたものである。

では、そもそもその「テーマとは何か」。

テーマ（Thema）に関して辞書で調べると、主題、題目、論題、トピックなどが挙がってくる。だが、実際には「人生のテーマ」などといったことも言われているので、広い意味で用いられており、それはまた、テーマが因果関係の流れをもつ構造的なものであると説明できる。また、テーマとは、他者へ向けて使うより自身に向けて使うことが多いと言えよう。「人生のテーマ」といった場合、他者の人生のテーマ云々より「自分の人生のテーマはこうである」と、人は語り、考えるのではなかろうか。したがって、学生にむけて「この文章のテーマは何か」、「あなたのテーマは何か」、「テーマを発見してください」と言っても、実は漠然としたものとして受け止められ、答えにくいかもしれない。

本プロジェクトにおいても「テーマ」という言葉は多様な角度で用いられ、幾度も問われるなど、とても重要な概念である。なぜなら、本プロジェクトは、即効性のある教え方を優先させ、目に見える形での成果を重要視するのではなく、日本語学習者の人生全体に焦点をおいたものである。よって、本プロジェクトが学習者にとってどういった意味を持つのか、本プロジェクトが学習者にとって将来どのような影響を与えるのかといったことは担当者の目に見えるわけではない。したがって、学習者自身が自身のテーマを発見していくことが重要な活動である。

本報告書では、本プロジェクトに参加した3名の学生のテーマを発見していくプロセスに注目する。3名は、「日本と私」というテーマでレポートを書く活動が展開されていく中で、どのようにそれぞれのテーマに向き合い、テーマを発見していったかというプロセスを追い、学生にとって、そして本プロジェクトに参加した筆者自身にとって、テーマを発見することの意味とは何かを考えることとする。

2. 日伊ネット対話プロジェクト

日伊ネット対話プロジェクト（以下、プロジェクト）は、早稲田大学日本語教育研究科に在籍する学生とイタリアカ・フオスカリ大学（ヴェネツィア）東洋・北アフリカ研究学科に在籍する学部生、大学院生を対象に行われた実践活動である。本プロジェクトは「日本と私」という共通テーマで参加メンバーとの議論を重ねながらレポートを書き上げることを2013年2

月 10 日から 3 月 12 日まで約 1 か月間実施された。内、4 日間はワークショップ²を行い、最終的に対話レポート（共通テーマ：日本と私）を作成した。

活動は、WEB 上で設置された BBS でメンター³とメンバー間でやりとりをすること、「自分のテーマを決める」「コメントを書く、コメントをもらう」「対話とは何か」「対話を報告する」「自分の結論を出す」など、各セッションにおける番組を見ることが義務づけられていた。

なお、本プロジェクトは、「総合活動型日本語」をもとに設計されたものである。設計者をもとに、メンターとして参加した大学院生は「総合活動型日本語」の授業に参加したことがある人で構成されていた。と同時に、大学に設置された活動型授業、およびネット対話の形式に担当者として関わっていた二人（筆者を含む）もメンバー参加した。

【活動の概要】

- (1) 自分のテーマを決め、動機文を書き、メンターとメンバー間でやり取りを行う。
- (2) 対話をし、報告をする。
- (3) グループ冊子⁴をつくる
 - ・テーマ：日本と私
 - ・タイトルは自由、自分でつける)
 - ・最終分量：5,000～8,000 字くらい（冊子作成の前までに）
- (4) 最終レポートをもとにしたグループ冊子を作成し、インターネット上で公開。

以上の活動に参加し、BBS のやりとりにも関わった筆者は、本報告書において同じグループに参加した 3 人のレポートの取り上げることとする。その 3 名は、後に「チーム思いやり」というグループ名を編成しているが、その意味はそれぞれに共通するテーマを見つけたことによる。そしてそれは、「見えてきた作りたい自分」をテーマであった。「チーム思いやり」の冊子タイトルは、『「個人から共通理想まで、そして…」一見えてきた作りたい自分』である。以下の表でその 3 人のレポートタイトルの変化を示しておく。

表 1 チーム思いやりのメンバー

名前（仮名）	最初のレポートタイトル	最終のレポートタイトル
ニカ	敬語の大切さ	私にとって敬語の大切さー日本と私
フェデ	日本の部活動	日本の部活動から生まれた『私の教育』

² 2013 年 3 月 5 日～3 月 8 日までカ・フォスカリ大学、東洋・北アフリカ研究学科にて行われた。

³ 早稲田大学大学院日本語教育研究科の修士課程のメンバーで構成された。ファシリテーター (facilitator) のような役を持った。

⁴ 本稿では、「冊子」と「レポート集」を同一意味で用いることとする。

ティッティ	日本語から日本語教育まで	日本語から日本語教育、自分を救うため
-------	--------------	--------------------

本報告書においては、1 か月間におよぶ BBS のやりとり、学生の成果物、筆者のフィールドノーツを報告の資料として用いた。なお、学生の語りやメンターの質問などを引用するが、それはすべて〈 〉と記す。

3. 3 人が語る「見えてきた作りたい自分」とは

3.1. ニカさん

【敬語の大切さ】

ニカさんは「敬語の大切さ」というテーマで動機文を提出した（20130213⁵）。彼女が敬語に興味を持ったのは大学 3 年のときの「商談」という科目でビジネスマナーを習ったことがきっかけである。その授業では、「適切に電話に出ることやお客と取引に使う適当な敬語」などを学び、新入社員としてふさわしい態度などのエチケットなど学んだという。ニカさんはその授業を受けてから敬語に興味を持つこととなり、卒業論文も「礼儀作法とビジネスマナー」について書いたという。ニカさんが敬語を大切だと思う理由には彼女のなりたい夢も関係していた。ニカさんは日本と関係のある貿易商社で働きたいと考えている。また、商社ではあるが、世界を飛び回ることではなく、〈事務職〉に就きたいと希望している。

ニカさんは、〈学んだことを経験できた〉ことの素晴らしさをあげていた。つまり、イタリアで日本の敬語や日本語を学びそれを 3 か月間だけだが、京都でホームステイを通して実際に経験できたことを素晴らしいこととして動機文①において説明している。

その時、日本の日常生活を直接に生きていることができました。毎晩、ホストファミリーと一緒にこたつにあたって夕食を食べていました。毎日、学校へ行く時、「行ってきます」と言って、「いってらっしゃい」が答えられましたが、学校へ帰った時、「ただいま」と言ったら、「お帰り」が返事されました。初めて、私はそのようなことがあまり慣れていなくて、大学の授業の中では、先生が説明されてくれただけ、具体的にすることはすばらしいと思いました。

（20130213 動機文①）

動機文①の段階では、彼女自身にとって「敬語」が大切な気はしているが、それがなぜ大切なのがまだ伝わらず、プロジェクトの全体のテーマである「日本と私」の中で考えな

⁵年度と日付である。2013 年 2 月 13 日を指す。また、このような表記は論文の全体を通して統一する。

ければならないと思っていたことが見てとれる。なぜなら、ニカさんは〈日本を愛する理由〉をあげ、日本の文化に興味があることを説明していたからだ。彼女が説明する日本の文化とはく挨拶する時お辞儀をすることや、誰かを訪問する時プレゼントを持って行く習慣があることや、家に入る前に靴を脱がなければならないこと〉であった。そしてその説明と共に日本でのホームステイをあげていたからだ。

したがって、メンターからのコメントも〈あまりにも礼儀作法に捉われてばかりいると、気持ちが見えなくなってしまう〉という個人的な意見が述べられていた。

わたしも新入社員だった時、ビジネスマナーのセミナーなどに何度も行かされました。ははは。その会社はいろいろ酷く、仰るように残業は当たり前、1か月で平均100時間は残業してました。しかも残業代なしで。いわゆるサービス残業です。いろいろ思い出してムカムカしてきました。これは悪習です。間違いない。あまりにも礼儀作法に捉われてばかりいると、気持ちが見えなくなってしまう。大切なのは気持ちだをつくづく思います。でも、どうしてこの礼儀作法やマナーにニカさんは心を奪われたのですか。

(メンターN 20130213)

ホームステイの時の経験について質問したいです。ニカさんはホストファミリーと「いってらっしゃい」とか「ただいま」のあいさつを交換したとき、どういう気持ちでしたか。そのとき感じた気持ちは、イタリアの家族の家から出かけたり帰って来たりするときとは違いますか。M1さんが「あまりにも礼儀作法に捉われてばかりいると、気持ちが見えなくなってしまう。大切なのは気持ちだをつくづく思います。」とおっしゃいましたが、私も同感です。私が高校生の時、クラブ活動の先輩には礼儀正しくして、敬語で話さなくてはいけないというルールがありました。でもそれがルールだったために、心が近づいても敬語にとらわれて上手な話し方ができず、なかなか打ち解けあって話すことができないということがありました。

(メンターM 20130216)

二人のメンターからは、「敬語」は形式にとらわれていると「気持ち」が見えなくなるのではないか、というコメントであった。ニカさんはメンターMさんのコメントを受け、次のような返信をした。

メンターMさん、コメントしてくれて、ありがとうございます。返事が遅れてしまって、どうもすみません。ホストファミリーと「いってらっしゃい」とか「ただいま」のあいさつを交換した時、ホストファミリーのメンバーのような気持ちでした。イタリアの家族の家から、出かけるする時、「さようなら」のあいさつがあって、家にとどまる人

も「さようなら」を言います。帰るする時も、二人とも「今晚は」とか「今日は」を言います。気持ちはちょっと違うと思います。日本のあいさつの方が、「早く帰ります」や「あなたを待っています」などの表現に似ていると思います。ホストファミリーの家から出かけたり、帰ってきたりする時あいさつを交換して嬉しいことは、日本へ行った時、日本語を勉強するだけではなく、日本の家族生活を直接にしてみたいことも目的でした。

(ニカさんからの返信 20130216)

ここでもニカさんは敬語の形式な面については触れていない。むしろ、ホストファミリーと交わした挨拶やその時の気持ちを説明している。実は、動機文①においても彼女は敬語の形式な面について重要であると述べてはいない。つまり、彼女にとって敬語は形式ではないことがうかがえる。

【あなたにとって敬語とは何？】

筆者は、ニカさんが一般論として挙げていた「日本の社会」について触れ、一般的な話ではなく、あなたとこのテーマとの関係が聞きたいこと促すことにした。

ニカさん。「敬語の役割」と日本の礼儀作法、ビジネスマナーの関係は为什么呢。
「敬語」をニカさんはどう思っているのかと関係していますが。「敬語」と「礼儀」「マナー」は何か人間社会において共通する何かがあるように思われますが。また、勤務時間や会社員の服装など、「日本の社会」をニカさんがそのように思っている理由は何かなと思いました。私は韓国から日本にきて 13 年目ですが...、私が経験を通して思う「日本の社会」は必ずしもそうではないので、いろいろとニカさんのお考えをお聞きしたいと思いました。

(筆者 20130216)

ニカさんは筆者のコメントに敬語についての一般的な知識—上下関係—を説明し、＜イタリアでは、敬語に似ている話し方はあるが敬語のように相手に尊敬を示すことはない＞と述べていることを述べる。つまり、ニカさんにとって「敬語」は、単なる形式ではなく、人への「尊敬」などの気持ちを重要視していることがわかる。このようなやり取りの後、ニカさんは動機文を修正し、提出した(20130227)。そこには「敬語」から「尊敬」と「敬意」の意味が述べられていた。

敬語を勉強してから、敬語は複雑でも、相手と関係を規制するために、つまり特に年上の人に尊敬を示すために必要だとわかりました。それに、日本の社会は規則を守るため

に、世界中有名だから、私は日本を感心しています。イタリアの社会は、規則を守るに関して厳しくないと思っています。なぜなら、どの面にも、相手と無礼に話す場合や、規則違反などことがあります。例えば、学校の中では、学生はよく先生に尊敬を示さずに、失礼な方法で話します。または、労働者に関して、病気を振りして、仕事に行かず家にとどまる人が大勢います。**そのため**、敬語はイタリアではあったら、イタリア社会はだんだん改善するだろうかと思っています。

(動機文② 20130227)

ニカさんが再度提出した動機文には彼女が人間関係の中で敬語を捉えようとしていることが伺えた。それについて筆者は、以下のようにコメントをした。

動機文第2を読ませていただきました。「敬語の大切さ」というのは、ニカさんの思いですね。日本語には「敬語」がありますが、学生が先生を尊敬しない、仮病で会社に行かない...などなど。いろいろとあります。「敬語」があるからといって必ずしもすばらしい人間関係ができるわけでもないと思います。私はニカさんが、「敬語」(敬意を含めて!)を通してどのような人間関係をしたいのか、将来の仕事—事務職—にどのように活かしたいのかなどなどが話されるとニカさんの気持ちがより伝わるのではないかと思います。

(筆者 20130301)

ニカさんは、筆者の意見に、<「敬語」ができるからすばらしい人間関係ができることは無理だけど、敬語は人間に敬意を教えるいい手段だと思う>ことだと語る(ニカ20130303)。彼女が考えている<敬意を教える手段>とは後に「教育」とも関係していることがわかるが、動機文②においてはまだそれが伝わらないままであった。

【人間関係と敬語】

ワークショップが始まり、グループ分けが行われた。グループ分けは興味のある人が集まることになった。したがって、計4つのグループは4~5名と6名などに編成されていた。筆者とニカさんは同じチームになったが、一番人数が少ない3名となった。BBS上でのやり取りは顔が見えないため、相手がどのような人なのかを想像しながらの書き込みが多い。ニカさんの印象は真剣なまなざしを持ち、とてもゆっくり話しをしている—決してマイペースではない—し、相手の話をじっと聞いていると言えようか。

ニカさんには、グループのメンバーから「なぜこのテーマなのか」がわからないという質問があった。ワークショップの1日目は敬語の一般的な話で盛り上がりようとしていた。筆者は質問を変え、「なぜ敬語が自分にとって大切なのか」を聞くことにした。ニカさんが

敬語を大切だと思う理由は、人と人との間において「尊敬」の気持ちや相手を「思いやる」気持ちが無くなっているからだを説明する。

ニカさんが日本でのホームステイを大切な経験として挙げた理由もグループのやりとりの中で明らかになったが、帰宅すると家族がいて、家族の年長者に子どもが敬意を払い、家族の愛が敬語、つまり、人を思いやり尊敬する気持ちで表れていることを経験していたからであった。すなわち、動機文①で彼女が話していた＜素晴らしい経験＞とはここにつながるものであった。また、彼女が考える「ビジネスマナー」というツールもその気づきであったことがうかがえる。つまり、ニカさんはマナーや思いやりは人に対して行うこととして捉えていることがわかる。

しかし、グループではやはり一般的な「敬語」のイメージに対することが議論された。メンターNさんも同じグループにいたが、メンターNさんは、自身にとって敬語はあまり重要ではないと話し、敬語を重視すると気持ちが見えないことを説明していた。するとニカさんは、言葉ではないことを説明しようとしていた。つまり、敬語という「敬語の形式」ではないこと、「敬語が人と関わること」であることを彼女は説明していたのである。さらに彼女は、敬語を話す自分、敬語を勉強していききたい、探求していききたいという気持ちの中に彼女のこれからそうありたい自分を説明していることに筆者は気づいた。

【敬語を通してなりたい自分を考える】

ニカさんの敬語の大切さというテーマの中には彼女の未来予想図が見られた。将来、日本とイタリアをつなぐ仕事をする。また、結婚をし、子どもを産み、親になり、そしてイタリアで教育を受けさせるとき、「敬語」—尊敬・思いやり・敬意—があることによって人間として成熟していくとニカさんは考えているのであろう。つまり、彼女にとって「敬語」が大切な理由は、自分にとってなりたい姿がわかってきたからではないか。ニカさんは周りの人に失礼な態度を見せる若者の話を喩にし、＜失礼な自分になりたくない＞ことを話していたからだ。

彼女が見つけたテーマとは、ぼんやりとしていたこと—自分が仕事をし、人と関わる—が、「こういう自分を作りたい」という鮮明な何かに変わったことではなかろうか。そしてそれは彼女が語る「自分にとって敬語の大切さ」であろう。

3.2. フェデさん

【驚きであった経験—日本の部活動】

フェデさんが日本でのホームステイの経験で驚いたことはいろいろあるが、なかんずく日本の「部活動」であった。2012年8月に日本でホームステイをした彼は日本の有名な観光地に訪れることの経験より、驚きの経験をすることとなる。ホームステイ先の15歳の子

どもは学校のバレーボールのチームで毎日練習をしていたこと、しかも真夏の8月なのに朝から午後までトレーニングをし、試合に備えている姿にフェデさんは驚いたことを動機文に描写している。

また、＜イタリアにおける学校は、先生が授業をしてそれで終わる。つまり、「教育」という面が重要視されていない＞。フェデさん自身も12年間続けている水泳を学校とは関係のないプライベート活動として行っていたことをあげ、＜学校は出席をするためであった＞ことを告白する。しかし、第一回目の動機文にはその驚きの経験がなぜフェデさんにとって意味のあるものなのかがわからないままであった。なぜなら、＜動機文には外国語の勉強のためにはその国の文化を理解することが大切である＞と述べられていたからだ。

＜私はイタリアの学校や大学も日本のようになればいいなと考えています＞と書かれていますが、フェデリコさんは日本の教育制度では、学校教育の中で部活動を行っているのはなぜだと考えていますか。なぜ＜もっと学校を楽しめる＞のか、なぜ＜社会はうまくやっていける＞のか、これからフェデリコさんの考えを聞けるのを楽しみにしています。

（メンターO 20130213）

さっそくフェデさんは、メンターOさんのコメントに自分にとって部活動の意味を二つ挙げ丁寧に説明している。

私にとって、部活動を行っている理由いろいろありますが、主に二つあります。一つは、協力することを教えるためで、もう一つは同じ興味がある人を会わせるからだと思います。どこの国も若者は恥ずかしくて、親交を結ぶのはそんなに簡単ではないかもしれません。ですから部活動に参加させると、類似の興味や趣味を持っている人と会うことが楽にできます。スポーツの部活動の場合は、行っている理由は共に生きることを学ぶのではないかと考えています。スポーツチームと社会は全く異なることだと強く感じています。勝てるようになる方法は、仲間と努力をし、みんなと一緒に同じ目的を達成してやることでしょう。個人主義的な社会は問題の解決の方法は見つけれられません。学校というのは勉強だけでなく、社会に生きることを教えるものです。勉強は個人的な行動ですが、勉強するためクラスメートと一緒にいるのは必要です。お互いに迷惑をかけない理由は、クラスメートは皆同じ目的を持っているのではありませんか。上下や親疎の関係は全く同じです。このように努力をすると、自分を受ける恩恵は増えると思います。

（フェデさんからの返信 20130215）

フェデさんのコメントの中に部活動を「教育」と結びついて考えていることがわかる。また、彼の考えの中には、「教育」とはどういうものであるかがうかがえる。だが、この「教育」観というやり取りは、イタリアの教育制度まで話が広がり、BBS 上でも社会を変えることとフェデさんにとって部活動がなぜ重要なのが伝わってこない質問やコメントが目立つこととなる。

【テーマとあなたの関係】

しかし、依然としてなぜ彼にとってこのテーマなのか、という答えが見えない。部活動を取りあげた理由の中に彼が思う何かがあるのではないか。

イタリアの教育制度改革までお話が広がりでしたね。それはおそらく、フェデさんのお話しにみんなが共感することがあったからでしょう。日本の部活動は協力と同じ興味を持った人を合わせてくれることに意味があるという意見にもなるほど、と思いました。学校で勉強だけで学ぶのではなく、部活動や掃除などを通して人と調和し、協力することを学ぶことができるからでしょう。それでは、少し話が戻り、日本でのホームステイでの経験でこのような日本の部活動に興味を持ちましたか。人との協力や同じ興味を持つことは、学校で正式に認めてくれた活動ではなくてもできると思いますが。つまり、このテーマとフェデさんも関係ということが聞きたいですが...

(筆者 20130219)

角度を変えた 筆者のコメントにフェデさんは彼の将来の夢を語っていた。彼の夢は<外国へ住みに行って教授になること>だそうだ。つまり、彼は「教育」に関わることがしたいことであった。イタリアの教育を改革したい、という彼の意見に他の学生からも<日本の生徒は自分の学校の掃除をしてきれいにし、イタリアの学生は自分の学校を大切にしない (K20130214)>、<学校を改革すれば、必然的に社会も改革されるという思いが強くありますね (V20130218)>。という議論が行われていた。

そして、<フェデさんにとっては、学校の掃除のようなことをしていたら、どうして社会で人との関係がうまくいったと考えているかもう少し知りたいと思いました。(V20130218)>と Vさんは親友として彼の意見を率直にうかがっていた。

しばらくしてフェデさんは動機文②を提出した。そこにはフェデさんの夢が語られていた。先生を夢見る彼は日本とイタリアの教育制度から何かをしていきたいのであろうか。

私の将来の夢は、先生になることです。イタリアの学校や大学も日本のようになればいいと考えています。なぜなら、イタリアの教育制度に比べたら日本の教育制度は心理的に学生に対して強く圧迫するかもしれませんが、私にとって立派な教育を受けさせる

と思います。日本人の学生はいい結果を得ることに深い興味があるのはずです。たぶん理由は有名な大学に入学できたり、大切なスポーツ大会に参加できるためだけですが、とにかくにも学生は一生懸命頑張ります。その上、学校は学校と関係ない活動でも、学生の興味を振興しようとするのは必要だと思います。逆に、イタリアの学校が教室を出た後スポーツなどの学生することは気にしないのはずです。ですから、イタリア人の学生は普通学校は面倒くさい勉強のところだけだと思って、教育の目的がないと考えようとし、何にも興味を示しません。上記の理由で、イタリアの教育制度を改革しなければならぬものだと感じています。

(動機文②20130227 提出)

だが、2 回目の動機文は教育制度の改革の話で終わっていた。教育制度を改革することがフェデさんにとって何の意味があるのか。先生として「教育」のことを考えるならそれは制度以前に自分が思う良い教師像を持って学生と接することで可能になるのではないかということも言えるからだ。ワークショップの 1 日目、彼のレポートの検討は部活動の大変さやいろいろと一般的な話で終わろうとしていた。

【なぜ教育を考えるのか】

ワークショップの 1 日目のランチはみんなで食事をしに行くことになった。たまたま筆者のとなりにはいたフェデさんとはいろいろな話をする事になった。そのとき彼は、母親が教師であることを話していた。また、教師である母親はとても厳しく、彼は日差しをよけてかけていたサングラスを取り、とても怖い母の目を真似しながら、<いつもこんな目をしています>と笑いながら話を続けていた。彼が「教育」を考えたことはもしかして教育者である母親の厳しい一面と日本で経験した部活動、そしてその部活動をする自分の子どもを応援している両親の姿に何かを感じたのではないかと、と筆者は彼との会話の中に思いにふけた。だからこそ、ワークショップ 1 日目の午後の活動において彼のテーマをもっと真剣に向き合うようにそこに参加している筆者も向き合わざるをえない、いや、向き合うべきだと考えることとなった。

【教育と自分の義務】

フェデさんはグループのメンバーと対話をする事にした。ワークショップ 1 日目と 2 日目にわたって、3 人はそれぞれのテーマで対話を重ねた。対話相手の一人であるティッティ (T) さんは日本語の先生を夢見ているため、二人は「先生になること」「どんな先生になりたい」かについて 2 時間以上対話をしたのだという。

* どんな先生になりたい？

F: 私にとって、先生は難しい仕事だと思います。なぜなら、学生の意欲を引き出さなければならぬ考えがあるからです。

T: 確かに、私は学生に興味がある先生になりたいです。

F: そうですね。学生は問題があったら、どうしてですか分かるのは先生の義務ではないかと思っています。もちろん学生の自分の意志も必要ですが、先生というのは学生を手伝うものではありませんか。

(対話報告より 20130308)

フェデさんは＜先生の義務＞という言葉を用いている。これはワークショップ3日目の議題になったが、先生はそれぞれ「義務」と思うことが異なるのではないか、という指摘があった。フェデさんは「義務」とは先生という職業を持つ人がすべてもつことではなく、自分がそのような教師になりたい、＜自分の義務＞であることを説明する。フェデさんは、＜人々をつなげる＞教師になりたいこと、そしてそれを「教育」で実現したいのだと語っていた。つまり、彼は部活動という経験を通して協力を学び、そこで人と人がつながる事を学ぶこと、それを教師として実践していきたいことを語っているのかもしれない。

【日本の部活動から生まれた『私の教育』】

フェデさんは、なぜ自分が日本の部活動を自分のテーマとして挙げていたのかが本プロジェクトの活動を通してはっきりしてきたことがわかる。自分が目指したい「教育」、彼が考える＜教育の義務＞が見えてきたと言えよう。

フェデさんは、最後にこのように述べている。

もし先生になったら、具体的に同伴者として見なされたいです。一人前の大人になるまで学生の成長を手伝う人になりたいということです。これは教育の義務という意味だと思います。最後に、教育の目的はそれぞれの人の能力を最大まで上達することだと思います。

(フェデさんのレポートより)

「日本の部活動から生まれた『私の教育』」。フェデさんはこれから自分が作っていききたい教育の姿をはっきりとしたものにし、そしてこれから自分が目指したい教育へ向かっていくのであろう。学生と＜同伴者＞であることは、共に学ぶ共に成長していくことであろうか。彼が発見したテーマとはまさに彼が目指したい道でもある気がして、その発見の道に共にできたことを筆者は心から嬉しく思った。

3.3. ティッティさん

【迷いのない日本語の選択】

2007年大学生となったティッティさんは「日本語と日本文化」を専門と決めた。実家から少し離れた大学で日本語と日本文化を学びたいと強く思ったという。＜専門を選ぶとき迷いがなかったのは、子供のころから漫画やアニメが大好き＞であったからだ。日本のポップカルチャーに惹かれて日本語の勉強を始めたということも言えるが、勉強すればするほど一番気に入ったのは、文学でも歴史でもなく、結局日本語のことだったという。

小学校の時にドイツ語を学ぶ、中学校と高校では英語とドイツ語を同時に勉強していたという。「外国語」の勉強はなんの問題なく済み、今は、イタリア語を始め、英語、ドイツ語を話せるほどになった。そんなティッティさんが初めて日本語に触れたのは、日本のアニメソングだったという。偶然、インターネットで見かけたが、その一曲が＜日本語の世界を目の前に開けたくれた＞と語る。

日本語の単語は全く分からなかったが、毎日のように日本の音楽ばかり聴いていたという。次第に、アニメソングからＪポップスまで好きになり、その曲が理解できるといいなと思い始めることとなる。彼女はインターネットの翻訳サイトでそれらの曲を理解した。しかし、やはり＜他人を通じるのではなく、自分の力で知らない言語の秘密を解きたい＞という思いは芽生えた。

そのような思いで大学に入ったものの＜自分の母語と日本語のように違う言語を勉強するにはどれぐらい努力が必要かと初めて知った＞と語る。彼女は英語やドイツ語も「外国語」として習ったため、「外国語」としての「日本語」も簡単だと考えていたのだろうか。しかし、ひらがな・カタカナはまだ覚えやすいが、漢字を正しく書くには何冊ものノートを使い尽くしたり、聴解力のために同じ録音を何回も繰り返し聴いたり、言語を習うのは楽ではない経験を初めてすることとなる。それと同時に、彼女の中である疑問が芽生えてきたことが動機文に記されている、

同じ授業を受けてるのに、みんなが自分なりの日本語を使い、異なるレベルまで上がってきたということに気がつき、それはなぜなのかという疑問が、答えるわけも無いが、自分にたずねはじめた。日本語の勉強をはじめた理由は一人一人違うとわかるが、一人一人の業績はそれに結ぶわけが無いと思う。もともとみんなは日本の魅力にひかれてはじめてだろう。

それから、日本語を習うことより日本語の習い方に興味を持つようになった。人はどうやって外国語を覚えるだろう？なぜ外国語の中から日本語を選んだだろう？人にどうやって日本語の勉強を楽にして楽しませてもらえるだろう？このような質問に答えるため、これからは教育について調べて行きたいと思う。

【日本語から日本語教育へ】

彼女の興味はいつの間にか「日本語」から「日本語教育」へと移ろうとしていた。メンターからはくみんなが自分なりの日本語を使い、異なるレベルまで上がってきたということに気がつく>という文章が印象的であり、それに共感していること。また、どんなところからそう感じているのかという質問が相次いだ。それについてティッティは以下のように説明している。

まず、みんなの異なる日本語あるいは異なるレベルには、どんなところから気づいたかということについて述べたいと思います。それは、主に授業で質問されたとき、私が思っている答えとは内容が同じだとしても、口にするたびはみんなはかなり違う表現を選ぶというところからその印象をもらいました。別に、誤解や間違いをしているというわけではありません。ただ、みんなは違う言葉を選んで、自分を思っていることを日本語で発表するということが興味深く思います。しかし、それはなぜでしょうね。もう少し考えさせてください(笑)

(ティッティさんからの返信 20130215)

ティッティさんの答えを受け、メンターからは彼女が感じている日本や日本語の魅力とはどういうものなのか、という質問が続いた。<一人一人個性があるように、人によって使うことばも違ってきますよね。ティッティさんの文章を読んで、ことばに興味があるのかなと思いました(メンターI 20130215)。>というコメントとともに、<ティッティさんと日本はどんな結びつきがあるのか、ティッティさんの中でなぜ「日本」が大きな存在なのか(メンターT 20130216)>といった質問が彼女にぶつかる。筆者も彼女のレポートややり取りから彼女の中にあることを聞きたいと感じた。なぜ「日本語」から「日本語教育」なのか。アニメソングや音楽などから日本語に出会う人が多いということは予想されるが、なぜそこから「日本語教育」なのか、はなかなか結びつかない。だからこそ、彼女の話を聞かねばならないと考えた。

私も「外国語」として日本語に出会い、今はその日本語を教えています。人はどうやって外国語を覚えるのか、本当に様々ですね。他者を通じるのではなく、自分の力で知らない秘密を解けたいと思ったことにも大変共感を思えます。私は、「ティッティさんの日本語」に興味があります。いろいろとお話できると良いですね。「自分が思っていることを日本語で表現することに興味深いと思った」理由はありますか？そのときの感想や思ったことなどで良いですが、もう少し具体的にお聞きしたいのですが。また、日本語を「楽に楽しく勉強させる」教育を調べていきたいと書いてありますが、これは「方

法」のことをさしていますか？もしくは、ティッティさんが目指す教育というものでしょうか。

（筆者 20130216）

ティッティさんは、「なぜ日本？なぜ日本語を選んだのか？」という問いに対する自分の答えは、＜興味を引くものに取り付けられる癖がある自分の性格＞に結び付けて説明する（20130218）。その上、＜自分の日本語の勉強を通じて、他人の日本語がわかりたい＞という意見を述べ、日本語は、個人性を表す方法が多いことをあげ、人称代名詞が数多く存在するから日本語で自分を表すことができるのであり、日本語を自分を表す手段として用いることが可能であることを説明する。

だが、彼女のコメントにはなぜ「日本語教育」なのか伝わらないままであり、日本語が好きな自分が、日本語を勉強したからこそ＜他人の日本語＞を気にするのかもわからないままであった。しかし、メンターとの続くやり取りの中で、彼女は一貫して＜大学に入ってから、自分の人生の中の日本語の存在が大きくなったのは、また自分の性格に結びついていること（ティッティ 20130219）＞だと説明する。その後、彼女は動機文②において『日本語から日本語教育まで日本と私』Ver2 をアップする（20130219）。

そこで彼女は、＜将来、日本語の教師になるのは目的で、そのときまでに、どうやって自分の体験を生かし、他人の役に立てる方法を見つけない（動機文② 20130219）＞と述べている。ここでは、彼女にとって単なる「日本語」から「日本語教師」という道を選ぶことになったこと、そして、自分が日本語教育でいたいことを示していることがわかる。そして彼女は、＜確かに、「今の私」と「日本」を結びついているのは「将来、日本語の教師になりたい！」という夢のことです（20130226）＞と述べ、対話もその夢について話したいと考えていることを BBS にコメントしていた。

だが、＜日本語教育という広いテーマの中でもティッティさんにとって重要なテーマは＜自分なりの日本語＞なのか＞、＜どうやって自分の体験を生かし、他人の役に立てる方法を見つけないのか＞、＜ティッティさんが生かしたい＜自分の体験＞はどんな体験ですか？（メンターO 20130227）＞というコメントがメンターから寄せられた。

もはや、ティッティさんは自分が思っていることを誰かと対話していくことによって具現化していく過程が必要ではなかろうかと筆者は考えた。彼女に対話を促すことにしてみた。

対話のテーマはティッティさんの中にありますよ。そして、それはレポートややりとりの中で感じられました。日本（あるいは日本語）を通して、「今」の自分が「将来」の自分をみつけ、そしてつなげようとしているように私には思えて、とてもすてきです。ぜひ、ティッティさんのテーマに興味をもってくれそうな相手、あるいは、ぜひ話してみたい相手と対話ができるとよいですね。のいろいろな「不安」がきっと「期待」に変

わる対話になれることを祈っています。

(筆者 20130301)

ティッティさんは、同じグループの人たちとも対話することにした。「日本の部活動」についてレポートを書いているフェデさんとは先生を目指すものとしてその役割について話していた。先生の役割は授業だけではないこと、教育とは社会をつくるから先生は人を育てないといけない話をしていたことを報告してくれた。

また、親友の R さんと対話を行ったことを 3 月 6 日のワークショップのときに報告してくれた。「どうやって自分の体験を生かして、他人の役に立てる方法を見つけたい」というテーマで親友の R さんと率直に話ができたと感じた。大学院に進学し出会った親友の R さんとは、共通点が多く背景も似ていることからすぐ仲良くなったという。R さんを＜理想的な対話相手＞として挙げたティッティさんは、＜自分のことをよくわかってくれて、思っていることを、私の意見と違っても、遠慮なく言ってくれる人であるから＞だと紹介していた。そして彼女は、対話の中であることに気づく。

対話を進めながら、テーマは「日本と私」から「私」に移って、告白のようなものになった。

(ティッティさんの対話報告より)

先生として他人を手伝うことがしたい彼女の意見に R さんは、なぜ人を助けたいのかを聞く。これに関してはグループ内でも質問があったが、人を助けることとは何か、なぜ助けるのかという質問があったからだ。人を助けたい。何か役に立ちたいと考えた彼女にとって日本語の勉強を活かしたいなら教育しかないことを述べていた。それに対して R さんは＜人との関係が気になるからじゃない？ただの推量だけど、もしかしてティッティが手に入れなかったものを他人にあげようとしているかも。＞と対話中に述べていた。＜ティッティさんが手に入れてないものとは何か＞。対話報告を通し、彼女の声が聞こえてきた。

彼女はつらかった学生時代を振り返る。小学校からクラスメートより勉強ができ、成績もよかった彼女はエイリアンと呼ばわれ、仲間外れされたという。あるときには仲間に入れてもらえるように勉強を控えたこともあるという。＜私がみんなと同じレベルになったら差別されないかもしれないと思うこともあるが、それより、私と同じように勉強ができる人がいたら「私は独自ではない！」とも思える。私は何よりも、比類の無い存在と思われたくない＞。彼女が教師になりたいと思う理由にはこのように個人的な経験が深く関わっていたのだ。

【自分を助けたい】

＜私が教育の環境を改善したいのは私のためにしてくれた人はいなかったからかもね＞。
このように語るティッティさんは、教育を通して自分を助けたいことの意味について語り始めた。

教育を通して、昔の私を救おうをしているかもしれない。それは、私が一番願っていることは一般人に思われることだが、それと同時に日本語を勉強しようと決めたのは日本語は私だけのもので、それは他人から自分を区別してくれるものであるから。自分に「どうして？」ときいてみたら、単純に「自分がみんなと同じようになれないならどれぐらい違うかをみせる！」と思ったのは答えになるだろう。確かに、教えてくれた人がいなかったから、自分で「違っても平気」と思うようにした。

（ティッティさんのレポートより）

彼女は、＜このプロジェクトのおかげで、少しでも自分のことをわかってきた気がする＞と述べていた。「自分のことがわかる」という意味とは何か。自分でもわからなかった、自分でも気づかなかったことを見出したからではないか。確かに彼女は、辛かった学生時代を振り返り、涙していた。だが、その過程を通して彼女は一生自分が進むべき道—あるいは信念—を確かめるきっかけになったのではないか。

自分のことについて話すのを避ける癖があるのに、自分のことについて話させて、思っていることをはっきり言わせて、自分でも気づかなかった本音が見えてきた。それはこれからどの場面でも役に立つと思う。「したいことがしたい」だけと言ったら、疑われるとすぐ自信をなくしてしまうだろう。「どうして、どうして」と聞かれて、答えを見つけて、自信を持って「私はこういう人だから」とは言えるようになった気がする。

（ティッティさんの終わりにより）

彼女が言うように、「私はこういう人だから」ということ、つまり、自分のテーマを発見してきたことは自分の生き方を確信し、それをこれからどのようにデザインしていくかを確かめられたことになったのである。彼女の涙と一緒に涙をしてしまった筆者は、これから彼女を応援している。

4. 結論

4.1. テーマの発見が意味することとは何か

ニカさんは、本プロジェクトを「教育的な経験」とであると述べている。一人ひとりが日

本語の勉強を通し、自分の将来を結び、自身の生き方に繋がり、自分の可能性を見出していたことはまさに「教育的な営み」であることは確かであり、一人ひとりの成長の実感につながることであった。

私にとって「考えるための日本語」というコースの目的は、自分と日本の一番強いつながりがわかることだと思います。それに、自分の性格や希望していることや将来になりたい人間など、そのようなことについて考えさせることのためにも役に立ったと思います。初めに、このコースに参加した時、日本語は自信があまりなくて、ちょっと心配しました。インターネットで意見を交換することは、ちょっと難しいと感じました。なぜなら、言いたいことはみんなに説明することは、難しいだと思ったが、三日間に同じグループの同級生とメンターと一緒に直接に話していたことは、本当のテーマ動機を深くわかることとよくレポートを書いて終わるために重要だと思いました。このプロジェクトに参加したのは楽しくて教育的な経験でした。

(ニカさんの終わりにより)

教育的な活動。つまり、成長を実感し、自分と他者がつながり、自分の成長が見えたことであろう。そしてその実感は、ニカさんが発見した自身のテーマの意味からではなからうか。テーマの発見というのは、人生という長期的な視点から良い影響をもたらしたのではないかと考える。言うまでもなく、3人のテーマの発見とは、3人が冊子のタイトルにも挙げたように『見えてきた作りたい自分』である。3人は共通テーマとして挙げているが、その中にはそれぞれが見出した自分の道、なりたい自分、自分の未来予想図、信念や確信などが描かれていたのだ。

筆者は、本プロジェクトの意義を自分の「将来」を具現化し、自分と可能性を見出したことであると考え。学習者各々が自分の考えを積極的に他者に示し、また、他者の考えを理解し意見を言うことを重ねることによって自身と他者の考えがお互いに刷新されるという過程を経たとき、学習者にとっての「言語観」や「人生観」にとって何らかの影響が与えられたといえるのではないかと考える。

4.2. では、発見すべきテーマはどこにあるのか

筆者は、「考えるための日本語」という授業を担当し、その授業が終わるたびに、TAやメンターとして参加していた人が声を揃え言うことを耳にする。「私が答えを持って、誘導している気がした」、「どこまで持っていけばいい」。答えは誰も持っていない、どこまでということもない。テーマは学生の中にあり、それは学生が提出するレポートややり取りの中にあるからだ。

「日本の部活動」や「日本の敬語」など、一見、一般的な日本の姿を描いているのかもしれないと、と思われるテーマ〔題目〕であっても、そこには一人ひとりにとってそのテーマの意味が描かれている。だからこそ、このような活動に参加する人―メンターや担当者―は、学生のレポートを読み、学生の話に耳を傾け、共に考えないといけない。すると、自分にとってのテーマも発見していくこととなる。本プロジェクトに参加した筆者は、学生たちが自分のテーマに向き合い、発見していく過程の中で自身が目指したい教育観をより強く考える経験をした。

筆者は、このような総合活動型日本語教育に関わるもの、あるいは関わりたいと思うものは「テーマとは何か」という問いを持つことから始まると考える。つまり、テーマを発見していくことがどのような意味を持ち、なぜこのような活動を言語教育で行っているのか、ということへの重要性につながることを本プロジェクトにおいて改めて実感した。

「考えるための日本語」の意味と可能性

—メンターの役割への気づきから—

The meaning and possibilities of the “*Japanese for thinking*” project

- A report based on realizing the role of the mentor -

小山いずみ・古屋憲章

(KOYAMA, Izumi・FURUYA, Noriaki)

概要

本報告では、参加学生、メンター双方の観点から本プロジェクトで行われた活動を記述し、「考えるための日本語」の意味と可能性を探る。具体的には、筆者がメンターとして関わったグループメンバーの一人、リア（仮名）に着目し、①リアはどのようにテーマを発見したか。②筆者はメンターとしてリアがテーマを発見する過程にどのように関わったか。という二つの観点から、リアのテーマ発見までの過程を描いた。その結果、リアが自分のテーマ、すなわち、自分が大切にしている何かを発見する過程には、五つの段階があることがわかった。また、筆者はその各段階に関わることをとおし、徐々にメンターとしての役割に気づいていった。このリアのテーマ発見までの五段階とメンターの気づきの考察から、「考えるための日本語」には、「自分とどのように向き合うか」、「自分以外の他者とどのように向き合い、理解し合おうとするか」を参加する全ての者に問うという意味があると同時に、対話相手となる参加者の周辺にいる人々にも、自己の省察と相互理解を促す対話の場を提供する可能性があることが明らかになった。

Based on the viewpoints of both participant students and mentors, this report described the activities carried out in the project. It searched for the meaning and possibilities of “*Japanese for thinking*.” Specifically, the authors were mentors who acted as parts of the group. We paid close attention to a certain “Ria” (pseudonym), focusing on 1) how she discovered her theme and 2) how the mentor became involved in the process of Ria’s discovery. From these two bases, we illustrated the process of discovery. In the end, we realized that there were five levels in the process of realizing what her individual theme was, the theme which she herself took as very important. Having involved in every level of the process of discovery, we the authors also gradually came to realize our own role. Based on this

realization, we considered that this project questions how all the participants of “Japanese for thinking” faced themselves individually and how they faced others and tried to mutually understand one another, which we thought it had a meaning for all the participants. At the same time, it also became clear that the project had the possibility of offering a place for conversations that stimulated self-reflection mutual understanding ~ for the participants as well as for the surrounding people who became conversation partners for the participants.

1. はじめに

私たち（筆者ら）は、「「考えるための日本語—日本と私—」ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト」（以下、プロジェクト）にメンターとして参加した。次節以降で述べるように、プロジェクトは主にグループでの活動を中心に進行した。グループに別れた後、グループのメンバーと相談し、各グループにふさわしいグループ名を決めた。中でも私たちは「スプリッツ」というグループのメンターを務めた。本報告では、「スプリッツ」のメンバーの一人であったリア（仮名）という学習者が、プロジェクトをとおり、「自分だけ」のテーマを発見するプロセスを次の二つの観点で描く。

- 1) リアはどのように「自分だけ」のテーマを発見したか。
- 2) メンター（小山）はリアが「自分だけ」のテーマを発見するプロセスにどのように関わったか。

私たちが特にリアに注目した背景には、プロジェクトへの参加を通じて得られた小山の次のような経験に伴う実感があつた。

- ① リアとはオンライン上で頻繁にやりとりをし、所属するグループのメンター¹を務めると同時に、リアの対話²相手を務めた。そのため、リアがテーマを発見するプロセスに深く関わった。
- ② 対話やグループ活動におけるリアとのやりとりをとおり、メンターとして参加者のテーマ発見にどのような働きかけができるかに関し、気づきを得ることができた。

2. 本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、2013年2月4日から3月8日までのおよそ1か月間で行われた。本

¹ メンターは、活動において、学生のテーマ発見をサポートする役割を担った。

² 本プロジェクトにおいては、自分のテーマに関心を持ってくれそうな人物と対話を行った上で、対話の内容を報告する。

プロジェクトの目的は、「日本と私」というテーマに関し、日本語で話したり、書いたりすることをとおし、参加者が自分にしか書けない「自分だけ」のテーマ、すなわち自分が大切にしている何かを見出すことである。上述した目的を達成するための具体的な活動として、参加学生は、次のような手順で「日本と私」というテーマに関するレポート（5,000～8,000字）を書き上げる。

【プロジェクト前期：Web 上での活動】

- 1) 参加学生、およびメンターが Web 上に設置された BBS（電子掲示板）でそれぞれ自己紹介を行う。
- 2) 「日本と私」というテーマに関し、BBS 上でメンターとやりとりする。やりとりをとおし、「日本と私」というテーマに関する自分のテーマを設定する。
- 3) 1) のやりとりをもとに、「動機文」（「日本と私」の関係に関し記述した文章）を作成する。
- 4) 「動機文」を題材にメンターと Web 上でやりとりする。やりとりをもとに「動機文」を修正し、完成させる。

【プロジェクト後期：カ・フオスカリ大学におけるワークショップ（対面によるグループ活動）】

※「動機文」の内容をもとに、参加学生を四つのグループに編成した。

- 5) 完成した「動機文」を題材に「日本と私」に関し、更に対話する相手を決めた上で、どのような対話をするかを考える。（どのような相手とどのような対話をするかに関し、メンターと対面で相談する。）
- 6) 5) で決めた対話相手と対話を行った上で、対話した内容を記述した「対話報告」を作成する。
- 7) 「対話報告」をもとに、どのような対話をしたかをグループで報告する。グループのメンバーは、「対話報告」にコメントする。（この際、対話が十分ではない場合は、再度対話を行う。）
- 8) 「動機文」と「対話報告」に「まとめ」と「終わりに」を加え、レポートを作成する。

3. Web 上の活動（対面でのグループ活動以前）

本節では、2月4日から3月3日まで行われた Web 上におけるリアとメンターのやりとりやリアが執筆した動機文を紹介するとともに、動機文ややりとりに対する私（小山³）の解釈を記述する。なお、本文中の＜ ＞はリアや私を含め参加者のコメントを抜粋した箇所を表し、「 」はリアのコメントを要約したもの、あるいは文の中で強調したいことばを表

³ 以下「私」の表記は小山を意味する

す。

3.1. 国際結婚に対する単純な問い –自己紹介–

プロジェクトの開始に際し、参加学生、およびメンターが BBS 上でそれぞれ自己紹介を行った。その後、何をテーマにレポートを書くかに関し、主に参加学生とメンターの間で意見交換が行われた。リアはプロジェクト開始当初から国際結婚をテーマにしたいと述べていた。具体的には、以下のようなやりとりが行われていた。

リア：私は国際結婚に関してお話ししようと思っています。国によって文化が本当に違うので、国際結婚が長く続けるかどうか相談したいと思っています。しかし、どこから始めたらいいかちょっと困っています。[2013/02/05]

メンターH：国際結婚について以前から興味を持っていたんですか。それはどうしてですか…。国際結婚に興味を持ったきっかけはなんかありますか？[2013/02/08]

リア：実は以前はそういう興味がありませんでした。しかし、去年彼氏ができました。イタリア人ではなくて、怒る時もありますが、その時ほとんど誤解です。文化が違うので、もちろん考え方も違います。そこで、私たちは、二人とも考え方が近づくために、頑張って、二人の考え方の違いを分かるようにしています。ですから、最近国際結婚がうまくいけるかどうかと自問しています。[2013/02/08]

ここでは、国籍や文化的背景の異なる彼氏との交際経験をとおり、「国際結婚はうまくいくのか」という疑問を抱いたことが、リアが国際結婚をテーマに選ぶ動機になっているようであった。私は当時、上記のやりとりを読み、リアは、本プロジェクトに参加することとおし、「国際結婚はうまくいくのか」という Yes/No クエスチョンの答えを得ることで、自身の将来への不安を解消したいと考えているのではないかと推測した。

3.2. 国際結婚への不安の表出 –「動機文」1–

3.1.で紹介したやりとりのあと、「動機文」1が提出された。リアは BBS 上でのやりとりを参考にしつつ、「国際結婚」というテーマに関し、特に国籍とアイデンティティーという観点で「動機文」1を書いていた。しかし、「動機文」1では、「国際結婚がなぜリア自身のテーマになるか」ではなく、以下のように国際結婚に対する不安や疑問が述べられていた。

国際結婚は、違う文化の人間を融合する可能性の一つとして良策といえるでしょう。しかし逆に考えると、自分自身のアイデンティティーが失われてしまうという恐れが
--

できます。恐らく日本国籍を習得できても、日本人には外国人だと思われる恐れがあるかもしれません。

そして自分自身の感情の問題も発生する恐れがあります。少し前にインターネットのサイトで、国際結婚の記事を見た際、子供を産み育て、その子供が成人となり、自分自身の国籍を決心しなければならないという事が記載されていました。(中略) 国籍を一つだけ持っていて、国際結婚の夫婦の子供は母語は二つ、自分の文化だと感じている文化も二つなので、国籍を一つ失うことは自分自身の心の部分も、両親を一人失うようではないでしょうか。[2013/02/12:「動機文」 1 より]

リアは、国際結婚をすることで、＜自分自身のアイデンティティーが失われてしまう＞可能性や、子どもが生まれたとき＜国籍を決心しなければならない＞ことを子どもがどう受け止めるのかといったことに不安や疑問を抱いていた。私は、リアは「国」という枠から国際結婚を捉えているように感じた。つまり、リアにとって国際結婚とは、文字通り日本とイタリアという異なる国、文化背景を持った者同士が交わることである。そのため、彼女の不安は日本社会や日本人への疑問へもつながっていた。

私のテーマの答えをこのプロジェクトで皆様の意見からきちんと探索、追究したいと考えています。上記の疑問について対話、相談して、恐らく今は疑問だと思っている疑問は解決するかもしれません。もしくは、もう少し日本人の考え方が理解できるようになるかもしれません。[2013/02/12:「動機文」 1 より]

この時のリアは、メンターの意見をとおり、日本社会や日本人を理解できれば、国際結婚への不安や疑問が解消できるのではないかと考えていたのではないかと考えた。それゆえ、リアは、自分が抱える国際結婚への不安や疑問に関し、日本人であるメンターの意見を積極的に聴きたいと考えていた。一方で、私には「動機文」 1 から、リアがなぜ国際結婚をテーマとするのかが見えてこなかった。私は、この「動機文」 1 を一読し、リアは「国際結婚」というテーマの中でも特にアイデンティティーに関し、何らかの問題を抱えているのではないかと考えた。そこで、＜アイデンティティーとは、イタリア国籍を持つイタリア人としてのアイデンティティーか＞また、＜リアと日本について考えた時、一番大切なことは何か＞という二つの問いかけを行った[2013/02/13]。すると、リアからは以下のような返答が寄せられた。

リア：よく理解されました。そのとおりです。このコンテキストの中にアイデンティティーというのは性格、パーソナリティのことではなくて、国籍のことです。大好きな育った国のことは捨てられたくないという思いが固くあります。しかし、日本人と

結婚することになれば、自分自身の国籍を捨てなければならない掟があります。したがって、このような恐れが出てきました。

恐らく、一番大切なのは日本の社会で生活できる恐れがあるかもしれません。(中略) 日本に行ったことがなく、勉強していてももちろん日本のことが全部理解できなく、日本語も全然上手ではありません。[2013/02/14]

上記の返答から私は、リアは将来日本に住むことで付随的に発生するであろう、様々な問題に対し漠然とした不安を抱いているのではないかと考えた。そして、この不安が「国際結婚」という問題を越え、リア自身のイメージの中にある「日本」の社会制度と、イタリア人としての自分のアイデンティティーとの摩擦や葛藤を語らせているのではないかと考えた。しかし、それはリアの想像上の問題である。私は、国際結婚はあくまできっかけに過ぎず、リアのテーマは他の何かではないかという思いを抱いた。

そこで、＜一度日本社会のイメージを忘れ、リアさん自身が日本でどんな生活を送りたいのか、何がしたいのかを考えるともっと具体的に大切なものが見えるかもしれません。リアさんは日本で何をしたいとありますか？＞[2013/02/15]と問いかけた。するとリアにはまず、日本でイタリア語の先生になり、その後、結婚し家族を作りたいという希望があることが分かった。この家族を作りたいという希望は、最終的にリアのテーマと大きく関わることになった。

私とのやりとり以外にも、リアは他のメンターから「どうして国際結婚なのか、普通の結婚と国際結婚は何が違うのか」といったコメントを受けていた。それらのコメントを受け、リアは次第に国際結婚も普通の結婚と変わらないのではないかと考えるようになっていった。そのことをリアは＜人間の感情は全然変わらないと思います。したがって、恋愛感情は恋愛感情です＞と表現している。一方で、＜しかし、国によって国際結婚の掟が違い、結婚した時住んでいる国と違う国籍を持っている人の生活はどうなるか分からなくて、恐らく困るかもしれないと思っています＞と書いているように、外国で暮らすことへの不安は依然として拭かれていないようであった。

3.3. 国際結婚に対する不安の揺らぎ - 「動機文」 2 -

「動機文」1の提出から2週間後、「動機文」2が提出された。自分の考えをまとめることに苦労していたのか、リアは「動機文」2を設定されていた締め切りから1週間ほど遅れて提出した。「動機文」1では、リアが抱いていた国際結婚への不安が「国際結婚はうまくいくのか」という一般的な疑問として書かれていた。しかし、その後のメンターとのやりとりを経て、自身が国際結婚に対し抱いている不安や考え方に揺らぎが見え始めていた。そして、「動機文」2においてリアは自分の考えを表現し始めていった。

リアの「動機文」2は、次のような「国際結婚が特別なものではない」という考えの表明から始まる。

初めは国際結婚は違う文化と違う習慣がある人の性格を受け入れ、融合を表すことだと思っていました。今もそうだと思いますが、それは国際結婚だけでなく、同じ国の人の結婚もそのようだと思います。[2013/02/26:「動機文」2より]

リアは国際結婚も同国籍の結婚も、結局は違う者同士が互いを受け入れていくことではないかと、自分の考えが変化したことを綴る。けれども、上記の文に続く文では、国際結婚も他の結婚と変わらないと認めながらも、国際結婚、外国に住むことへの不安が述べられる。

国際結婚のほうが問題が起きやすいと思っています。なぜなら、違う文化・マナー・習慣などの国で生まれ育ったパートナーとの誤解が多いだと思うからです。(中略) もう一つの問題はやはりアイデンティティのことなのです。(中略) 恐らく日本国籍を習得できても、日本人には外国人だと思われる恐れがあるかもしれません。[2013/02/26:「動機文」2より]

上記のような不安を述べた後、ようやくリア自身が現在の彼氏との関係をどう捉え、それが自分のイメージである国際結婚とどう関わるのかというリア自身の考えが、以下では表現されていた。

上記に書いたこと(国際結婚への不安やアイデンティティのこと)を読むと怖くなります。しかし、書いたことは抽象的なことだと分かって、彼氏を考えてみたら、全然怖くないです。やはり、この話をしても、恋愛感情は恋愛感情です。彼氏に信じていたら、抽象的に問題がいくらあっても、一気に全部なくなります。そして、掟のせいで、一番高くて険しい山を登るような大変なことになっても、一緒に力を合わせ、互いに自分自身を強くし、全部溶解するという思いが強くあります。確かに、恋愛感情の強さで何でもできると思います。これは少しロマンチックっぽいのですが、そうだと思います。

もちろん彼氏が日本人なので、国際結婚にしましたが、それは彼氏を理解したいからだけでなく、本当にこのような結婚の夫婦が末永く生活できるか知りたいです。国際結婚が普通の結婚とどのように違うと考えてみた私は、人間の感情は全然変わらないと思っていました。また言いたいですが、やはり恋愛感情は恋愛感情です。

リアは国際結婚に際し、起こるのではないかと予想していた問題を、「抽象的な」不安であったと捉え直している。その上で、実際のリアと彼氏の関係をふりかえり、あらためて国際結婚に関し考えてみると、たとえく掟のせいで、一番高くて険しい山を登るような大変なことになっても、力を合わせれば一緒に乗り越えていけるのではないかと考えている。そのような捉え直しが起きたのは、＜人間の感情は全然変わら＞ず、＜恋愛感情は恋愛感情＞であるという、リアの気づきがあったからであろう。

以上のように、「動機文」2には、リアがプロジェクト開始前から抱いていた国際結婚に対する漠然とした不安と、その不安を否定するような気持ちの変化、「自分が抱えている不安は、国際結婚に限ったことではないのかもしれない」の両方が表現されている。

4. 国際結婚への不安の解消とテーマの喪失

4.1. ワークショップ：2日目（対面でのグループ活動）

3月4日からカ・フォスカリ大学において対面でのグループ活動が行われた。1日目は、それぞれがグループのメンバーのレポートを読み、意見交換が行われた。そして、翌日までに各自で対話をするためのポイントを決めてくることになった。

ワークショップ（2日目）において、リアは対話のポイントとして、「私は違う文化と違う習慣の性格を受け入れる。なぜこんな問題を考えたか。で、日本は国際結婚のいい点は、阻止してるみたい。」と述べた。そしてグループ活動では、主にリアが抱える不安、すなわち「自分が日本社会で受け入れられなかった場合、どうすればいいか」に関し、話し合われた。

以下、グループ活動内でのやりとりの抜粋を示す。なお、文頭のアルファベットは、F=古屋、I=小山（私）、L=リア、M=グループメンバー1、S=グループメンバー2を表す。

L：日本は私はこのままでいやだみたいな感じ。私は外国人として見られていて、私の国を捨てないといけないみたいな感じ。

M：実は自分の文化を捨ててもまだ外国人だ。そのことは変えられない。

L：そう、でも日本は国として、私は日本人になりたくなかったらやだみたい。

I：その日本はだれですか。

L：日本はね、あの、それも考えてた。政治かな。政治家は日本人が思ってることの代表者ではないかな。

F：国籍が二つあったらイタリア人性っていうのは維持されるんですか。国籍の問題ですか。

L：私は別にいいけど、他の人から嫌われてるのは、私はこの社会でいらないみたいなかんじ。

F：でも社会って言うのは具体的には日々接する誰かなわけでしょ。だから、社会って言う人はいない。社会さんって言う人はいないから。社会っていうのは結局毎日の生活の中で接する色々な人なわけ。で、その中には嫌う人もいればそうじゃない人もいるっていうただそれだけ

(中略)

L：そうでも日本は、私じゃない、外国人はここにいるのはダメみたいな感じ。私たちは日本人だから日本人じゃなかったら行けて感じ。

F：その感じっていうのはなんですか。単なる感じですよ。

L：まあそうだね。

(中略)

S：国籍を日本人に変えたら日本人はリアのことを外国人じゃないと思わなくなりますか。

L：うーん、やっぱり思うと思う。社会的にではなくて、具体的に掟とからわからないけど、住んでる国にその

F：それが分かんないとただの心配じゃないんですか。

話し合いにおいて、リアはまず、仮に国際結婚をして、日本に住んだ場合、＜日本は私はこのままでいい感じ＞と日々の生活の中で他の日本人から外国人として扱われることへの不安を話し始めた。しかし、その後、古屋から＜社会さんって言う人はいない＞、リアが抱えている＜日本人じゃなかったら行けて感じ＞は＜単なる感じ＞にすぎないという指摘を受け、自分が抱えている不安はあくまでイメージであり、実際に日本に住んだ場合、どうなるかは分からないという気づきを得たようであった。そして、リアが抱いていた国際結婚に対する不安は、ある程度払拭された。その一方で、リアは自分が何を書きたいのか、自分のテーマは何かということが分からなくなってしまった。

ワークショップ（2日目）の午後は、メンバー各自で対話を行い、対話の報告を翌日までに書いてくる予定であった。しかし、テーマを見失ったリアは、対話ができないということで、寮に帰って行った。私自身、自分のテーマを発見することが容易でないことを身を以て体験していたため⁴、この日のリアの様子を見て、心配になった。しかし、余計なコンタクトをすることは、リアにとってかえって負担になるのではないかと考え、彼女からの反応を待つことにした。深夜になり、リアが悩んだ末に書き上げた「動機文」3が届い

⁴ 私（小山）も本プロジェクト以前に「考えるための日本語」に参加し、自身のテーマを発見する活動を行なったことがあった。また修士論文の執筆にあたり、テーマが見つからず、「自分は何を書きたいのか」と混沌とした時期を過ごした経験があった。

た。メールの本文には以下のようなコメントが書かれていた。

皆さん

申し訳ないんですが、国際結婚というテーマをあきらめたくなくて、今日は言いたいことについてすごく考えていました。そうするとこれを書きました。

これは本物の対話報告ではなく、少しだけ皆さんの意見を聞いて、国際結婚というテーマに関して考えて、何がいいかと思ったレポートです。

このコースのプログラムをよく進めなくて本当にすみません。しかし、私はいくら悩んでも、いくら困っていても、ぜんぜんあきらめたくないなので、頑張ります。

リアはこの時の心境を、最終レポートの「おわりに」に次のように記述している。

実は私はイタリア語でも自分の意見を言うのが苦手なので、ワークショップが始まったとき、決めていた締め切りまでに対話報告ができませんでした。その時、頑張るといつてくれた人がいなかったのが本当に大変でした。しかし、すごく考えて、あきらめないで、もう一回言いたいことを書いてみました。[2013/03/08:「最終レポート」より]

リアは、苦しみながらも、自分が何を考え、表現したいのかを考えていた。リアが<ぜんぜんあきらめたくない>と思うほど、自分のテーマを探し続けることができた要因の一つとして、「あなたのテーマが知りたい」と問いかけるグループのメンバーの存在があったのではないかと考える。実はリアが「動機文」3を提出する前に、私個人宛に「いずみさん（私）寝ていませんように」で始まるメールが届いていた。そこには、「今日（ワークショップ2日目）、対話ができずとても困ったこと、家に帰り一人でずっと考えたこと、1日目と2日目の話し合いのおかげでようやく自分が言いたいことが分かった気がするの、自分の意見が分かるか、これで対話ができるかどうかいずみさんの意見を聞きたい。」というようなことが書かれていた。

自分のテーマは自身の中での対話（自問自答）の結果として見出されるものであると同時に、相手に分かってもらうために伝えようとする過程で自分と相手の間に見出されるものでもある。それゆえ、リアはグループのメンバーに自分の考えが伝わるかどうかを、まず、これまでのリアのやりとりを知るメンターである私に問いかけたのであろう。

4.2. ワークショップ：3日目（対面でのグループ活動）

ワークショップ（3日目）には、午前中にグループで作成する冊子のタイトル、および

冊子作成の役割分担等を決めた。私たちのグループには、いまだ対話を行っていない参加者がリアを含め二人いた。そのため、午後、グループのメンバーの一人が住むアパートへ行き、そこで対話を行った。

リアの対話相手は、結局、私が務めることになった。「動機文」3からは、リアの苦しみながらも、諦めずに自分のテーマを見出そうとする姿勢が伝わってきた。また、グループのメンバー全員が「動機文」2に比べ、リアの言いたいことが分かるようになったと納得していた。

私は、リアの真摯な姿勢を受け、一人の友人として、またメンターとして⁵ 彼女と精一杯向き合い、ともにテーマを探求するという姿勢で対話に臨んだ。リアが前日の深夜まで作成していた「動機文」3をもとに、対話のポイントを話し合うところから対話を始めた。「動機文」3の内容は以下の通りである。

国際結婚

私は「国際結婚」というテーマを決めた理由は二つあります。一つは私は今年日本で留学します。それが終わった時、卒業します。したがって、このコースに参加させていただく前に小論文のテーマを決めなければなりません。そのテーマは国際結婚となりました。小論文は『国際結婚論』の部分翻訳することだけなので、このテーマに対して、もっと詳しく知りたくなり、このコースのテーマを決めなければならなかった時は、国際結婚にしたらいいと思っており、そのテーマにしました。確かに彼氏が日本人で、結婚についても話して、やはり私は国際結婚するかもしれません。なので、最初のレポートに本当に国際結婚の夫婦が末永く生活できるかどうか知りたいと書きました。なぜなら、普通の結婚より国際結婚の方が誤解が起きやすいと思うからです。

(中略)

もちろん話し合って誤解が解ければいいのですが、誤解は多すぎたら二人のフィリングがなくなったのではないかと感じ、離婚してしまうかもしれません。

しかし、国際結婚といっても、普通の結婚と同じだと思います。なぜなら、結婚はカップルが決めたことなのです。カップルは同じ国の人でも、違う国の人でも、同性

⁵ 私はリアの対話相手になる以前、同じメンターの先輩からメンターの役割に関し、次のような話を聞いた。メンターの役割は、参加者のことばに耳を傾け、彼／彼女があるエピソードを選択的に語ることとおし、どのようなテーマに近づこうとしているかを把握しようとするものである。この話を聞き、私はこれまで、参加者に質問を投げかけ、何かを引き出すことに集中するあまり、発言から垣間見える真意を見落としていたのではないかと感じた。そこで、リアの対話相手になるにあたり、一見、レポート内容と関係なさそうな発言であっても、その発言をすることとおし、リアが何を訴えかけようとしているかを考えながら、対話を進めることを心がけた。

愛のカップルでも、自分自身で決めたことなので、「〇〇結婚」といっても、それも結婚だという思いが強くあります。そして、結婚は二つの見方があると思えます。外からの見方とカップルからの見方です。外の見方というのは社会、国の制度からの見方です。つまり、他人の意見や、その国の掟などです。私は初めにこの見方しか見えなかったが、少し対話をする、大変になれると思ったことはもう問題ではありません。例えば、国籍のことです。それが焦点にした私は、「別にそんなに大きい問題ではないでしょう。ビザを取ると生活できるために十分と思いませんか。」を聞くと、頭が変わりました。確かに私は別に日本人になりたいわけではありません。具体的に住む国の国籍を持っていたら、便利だと思っていますが、よく掟が分からないので、その話はやめようと思いました。また、日本で住むことになれば、日本人のような態度しないと、社会は自分を受け入れてくれないかと思っていました。しかし、ふるやさんは「社会さんがいないので、友達と彼氏だけは受け入れたらいいのではないのでしょうか。」と言いました。その時、ふるやさんの言ったとおりだと思います。なので、「そうですね。」しか答えられませんでした。そして、カップルの見方の場合は個人的で、外の見方を全く気にしないので、時々気づかないことがあると思います。私は互いを大切にする気持ちや尊重する気持ちがあれば、カップルの見方の方が強いと思います。なぜなら、一番大きい大変なことになっても、一緒に力を合わせ、互いに自分自身を強くし、全部溶解するという思いが強くあります。それにもう少し考えてみたら、もしかしたら国際結婚は普通の結婚より、もっと長く続くことができるのではないかと思います。なぜなら、問題が起きたら、きちんと話し合って、二人は溶解できるようにすると思うからです。

(中略)

私が言いたいことは国際結婚は普通の結婚より、もっと長く続くことができると思っています。

リアはプロジェクトをとおして、＜国際結婚も、普通の結婚だと同じだと思う＞、そして日本の掟などよりも＜カップルの見方の方＞が重要であるといったように、自分の捉え方を変化させていった。その上で私は、＜国際結婚は普通の結婚より、もっと長く続くことができるのではないか＞＜私が言いたいことは国際結婚は普通の結婚より、もっと長く続くことができると思っています＞という部分で、なぜ＜国際結婚は普通の結婚より、もっと長く続くことができる＞ことがリアにとって重要なのかということが分からなかった。そのため、「なぜ結婚生活を長続きさせることがリアにとって重要なのか」をリアに尋ねた。リアは自分にとって家族の存在が自分を支えており、もし家族がいなければとても寂しくなるということを語った。

このやりとりから、リアにとっては国際結婚か普通の結婚かは、実はあまり問題ではなく、結婚、より正確に言えば家族関係が「長く続く」ということが重要であることがわかってきた。そこで私たちは、「家族」と「寂しさ」をポイントに対話を行うことにした。

5.「家族」というテーマへの気づき -対話活動-

リアとの対話はまずリアにとって家族とはどんな存在なのかということから始まった。
(冊子 p.5)

リア：私にとって家族というのは、いつでも帰られる所、安心し、好きなように態度できるところだと思う。なぜなら、血縁関係がある人と気にせずに態度できると思う。

私：あ、そう？

リア：親しい友達とするけど、なんか、友達のレベルが違う。

私：そうか。なるほどね。自分らしくいられること？

リア：ふーん・・・私の本当に本当に本当にまずい所。まずいっていうか、短所!!本当に悪い悪い悪いところ。

私：みせても大丈夫？受け入れてくれること？

リア：それは、友達でも入れてくれるんじゃない？でもなんか、家族とは・・・家族は友達と違うことは家族がきえなくなる可能性がない。一番違うところが。

私：消えて欲しくない。一緒にいてほしい。

リア：うん。だから、家族の一番長所が寂しくならないことだと強く感じている。

リアにとって家族とは自分の全てを受け入れてくれる存在であり、常に側に居て寂しさをかき消す存在である。リアは、上記の対話から考えたこととして、レポートに家族とは両親だけでなく、彼氏も彼女と作った家族も含む、愛し愛される存在であると記述している。このような家族の愛に対する考え方には、母からの影響があった。レポートの中でリアは、母が話す「愛があれば大丈夫」という言葉を聞きながら育ったこと、母はいつも無条件の愛をくれること、それゆえ、自分にとって愛されていることが大切になったことを記述している(冊子 pp.6-7)。

私は、ここまでの対話からリアがお母さんによって生かされているような印象を受けた。そこで、リアが自分自身のことをどう捉えているのかを聞きたいと思い、以下の問いを投げかけた。(冊子 p.9)

私：じゃあ、自分はどんな人だと思う。

リア：私？

私：うん。なんか、リアがお母さんに見える。

リア：私は本当にお母さんのようになりたいから、私のモデル。

私：リアをお母さんによって生かされているみたいな感じがする。私には。なんか、私はお母さんが愛してるから、これこれしてくれるから、私は今生きているんです。お母さんが死んでしまったら、私も死んでしまうみたいな感じ。

リア：でも私は生きて続けても、自分の心の中に、一番でっかいな部分死んでしまうと思う。

私：他に何を狙っている？向かっている？

リア：家族を作ることに向かっている。確かにそうしている。仕事をするのは、子供を育てるためにも、自分は生活できるためにも、お金が必要だから、それだけのために、仕事をしたい。

私：家族がいたら家族でいきているの？家族はいたら自分はそれで生きられるの？

リア：はい。

上記のやりとりをとおし、リアは自身がお母さんを筆頭とする家族に支えられて生きており、自分自身も家族を作ること为目标に生きているという気づきを得たようであった。これに対し、私は「なぜ彼女にとって家族を作ることがそこまで大切なのか」という疑問を抱いたため、その点に関し、質問した。

私：自分が一人でいるときとか考えたことない？

リア：そうね。全然。私は一人で生きていけるかな。死んじゃうかも。

私：家族ができたらどうなる？

リア：幸せになると思う。

私：何が幸せ？

リア：子供がいる幸せ。愛してくれる人がある幸せ。今もいるけど、自分の子供のは違うでしょう。

私：でも、子供は愛してくれなくてもいいの？

リア：私は愛してくれるように育ちたい。

私：愛されたい？

リア：愛されたいけど、愛されなくても、私は仕方なく愛するでしょう。

私：それでも幸せ。

リア：だと思う。もちろん愛してくれたらもっと幸せになる。

私：とりあえず一人じゃなかったらいい？

リア：うん。やっぱり私は一人だとやだね。

私：不安？

リア：なんか、一人だったら、寂しい感じしか出てこない。友達がいても楽しいときがあっても、そのときだけ、ずっとではない。家族がいればずっとだと思う。ま、もちろん悲しいときもあるけど、そのときだけ。でもほとんど幸せだと思う。

この対話から、リアは、幼いとき両親が離婚したこと、自分は一人っ子で兄弟がおらず、小さいときからつまらなくて寂しかったこと、その経験からずっと大家族が欲しかったことを思い出す。そして、リアは、国際結婚に対する不安の背景に自分の家族、しかも大家族を作ることができるだろうかという不安があることに気づく。その上で、自分の家族という無条件の愛を与え合う関係により、恒常的に寂しさから解放される幸せな生活を送るという自分のテーマを発見した。自分のテーマを発見した喜びをリアは結論で以下のように、表現している。

私は一人になってしまう恐れが強くあります。そして、以前はあまり考えていませんでしたが、小山さんと対話すると、確かに私のしていることは全部大家族を作るためだと気づきました。それで、これをよく分かると、嬉しくなって、安心しました。前は心配していたということではないですが、私の心が少し軽くなったみたいな感じがします。

6. リアのテーマ発見の過程とメンターである「私」の関わり

3～5節では、リアが自分のテーマを発見するまでの過程、およびその過程に私がどのように関わったかを記述した。以下では、「リアはテーマの発見に至るまでにどのような段階を踏んでいたか」、「それぞれの段階において、私はリアのテーマ発見にどのように関わっていたか」を記述する。

1) 国際結婚に対する単純な問い

「動機文」1に表現されていた「国際結婚はうまくいくのか」という Yes/No クエスチョンへの答えを求めている。

2) 国際結婚への不安の表出

「動機文」1をもとにしたやりとりをとおり、アイデンティティーの問題を中心に国際結婚への不安を表現する。

【私の関わり】

リアが国際結婚の何を問題であると考えているかがわからなかったため、リアのテーマ

と関係がありそうだと感じた記述、具体的にはアイデンティティーに関する記述に対し、問いかけを行った。この時の私は、「動機文」1に書かれていたアイデンティティーということばに興味を覚え、個人的な興味からリアのテーマはアイデンティティーと関わっているのではないかと漠然と考えていた。

3) 国際結婚に対する不安の揺らぎ

「動機文」2において、国際結婚も普通の結婚も恋愛感情という点では変わらないという立場を取りつつも、依然として国際結婚への漠然とした不安を抱えている。

【私の関わり】

対面でのグループ活動が行われるまでの間、リアとBBS上で15回やりとりを行った。やりとりの中では、「なぜテーマが国際結婚なのか」を、表現を変えつつ、質問し続けた。やりとりの途中まではこのプロジェクトのテーマが「日本と私」であるため、私のイメージする「日本」、ある意味で固定的な日本とリアを結びつけようと、リアと日本との関係を問うていた。しかし、リアや他の参加学生とのやりとりが増えるにつれ、リアにとっての「日本」を語らせることは彼女のテーマ発見には必ずしも必要なことではないということに気づいた。つまり、「日本と私」という大枠からテーマを探していく過程には、様々な「日本と私」の関係が存在しており、その「日本」は「私」から分離できるものではなく、あくまで「私」を語る中に、私の「日本」が語られていくのだということに気づいた。それは、メンターの私が参加学生に固定的な「日本」との関係を問うても、参加学生の語る日本は自分のイメージによって作られた日本像であり、ステレオタイプな日本像から離れることができないということへの気づきでもあった。

このような経験から、「自分だけ」のテーマを見つけるためには、大枠としてのテーマが重要なわけではなく、あくまで「各々がなぜ当該のテーマをテーマとして設定するのか」に注目する必要があることに気づいた。それ以降、リアへのコメントも彼女と国際結婚との関係を問うような内容へと質的に変化した。

4) 国際結婚への不安の解消とテーマの喪失

対面でのグループ活動をとおり、自分の抱える国際結婚への不安が実は問題ではないことに気づく。その一方で、レポートのテーマを見失う。

【私の関わり】

あらかじめ設定されていたセッションの時間以外でも、レポートのテーマに関し、メールでリアとやりとりをするなど、「動機文」3を執筆する彼女をサポートした。私は、自身の経験からテーマを発見することは容易ではなく、他者と対話をする中で自分が分からなくなったり、自分の言いたいことが相手に伝わらないという経験をしたりするなど苦痛を伴うということを知っていた。同時に、テーマを発見するプロセスは、自分のテーマが相

手との対話により明確化していくという喜びや、達成感を味わう体験でもあるという実感もあった。また、そのような実感からテーマを発見するためには、自分と向き合い、話を聞いてくれる人や他者からのサポートが欠かせないと考えていた。そのため、リアに対しても、グループのメンバーとして、またメンターとして、テーマを発見しようとする彼女のことばに耳を傾け、真摯に向き合いたいという思いがあった。

5)「家族」というテーマへの気づき

「動機文」3に基づく対話のポイントを決めるための話し合いをとおり、テーマを焦点化する。

【私の関わり】

私はリアの対話相手を務めた。対話の際には、メンターとしての視点で相手に耳を傾けること、すなわちリアがあるエピソードを選択的に語ることをとおし、どのようなテーマに近づこうとしているかを把握しようとすることを心がけた。具体的には、どのようなテーマに近づこうとしているかを考えながら、対話を進めることにより、レポートのテーマを「リアにとっての家族とはどんな存在であるか」、「リアはなぜ友達ではなく家族をより重要視するか」等へと焦点化していった。本稿の注5で記したように、リアとの対話を行う前にメンターとして参加学生一人一人が発することばにしっかりと耳を傾け、そのことばから各々が何を伝えようとしているのかを考えることが大切であるという気づきを得ていた。そのため、リアとの対話にあたり、リアの発することばを表面的に理解するのではなく、これまでのリアとのやりとりを踏まえ、リアが何を大切にしているかを把握することを意識しながら、対話をおこなった。

また、リアとの対話をとおり、彼女が発する一つ一つのことばから彼女にとっての家族や友達、生きる意味を理解しながら、私もまた自身にとっての家族や友達、生きる意味を考えざるを得なかった。なぜなら、対話をとおり相手の考えを理解するためには、相手が伝えようとしていることを自分の経験などと照らし合わせ理解した上で、自分はどうか考えるのかということを相手に伝える必要があったからである。

7. テーマ発見の過程におけるメンターの働きかけとその意味

6節で述べたように、リアが自分のテーマを発見するまでの過程には、1) 問いを設定し、答えを求める。2) 問いへの答えを表出する。3) 設定しようとしているテーマに疑問を抱く。4) レポートのテーマを見失う。5) レポートのテーマを発見する。という五つの段階が見られた。五つの段階は、あくまでリアという特定の人物に見られた段階に過ぎない。しかしながら、今後、「考えるための日本語」のような活動型日本語教育実践に参加する学習者がテーマ発見に至る過程を観察する際、この五つの段階を参照することによ

り、学習者の状態を把握できる可能性がある。また、テーマの発見に五つの段階があるということを前提に考えれば、メンターはテーマ発見までの各段階において、以下のような働きかけを行うことが可能であろう。

【段階1】 問いを設定し、答えを求める

まだ自身のテーマは設定されておらず、参加者が興味・関心のある対象に関する調査をしようとしている段階である。そのため、メンターは、参加者がなぜ当該の対象をテーマとして設定しようとしているかを問うことで、参加者に自身とテーマとの関係を意識させる必要がある。

【段階2】 問いへの答えを表出する

メンターがなぜ当該の対象をテーマとして設定しようとしているかを問うことにより、参加者は少しずつ自身が当該の対象をテーマとして設定しようとする理由を語り始める。このとき、メンターは参加者が語る理由の中から、メンター自身がキーワードと感じるものをピックアップした上で、当該のキーワードが参加者との間にどのような関係があるかを問う。

【段階3】 設定しようとしているテーマに疑問を抱く

自分自身と興味・関心の対象との関係を問われ続けることにより、参加者は、自分自身と興味・関心の対象との関係について、深く考えるようになる。そして、設定しようとしているテーマは、実はあまり重要なことではなく、自分との関係が希薄なのかもしれないという気づきを得る。このとき、メンターは参加者が表出するエピソードに対し、様々な観点から問いかけることで、参加者のテーマを探究する活動に寄り添う必要がある。

【段階4】 レポートのテーマを見失う

参加者がレポートのテーマとして設定しようとしていた対象が、実は自分との関係が希薄な対象であると気づくことは、テーマを設定するための思考の手がかりを失うことを意味する。参加者にとって非常に苦しい段階である。本段階において、メンターは、問いかけを行うだけでなく、参加者の精神的なサポート役となり、参加者が活動続ける原動力を失わないよう、メンター自身も諦めずに参加者と向き合う必要がある。そのためには、活動をとおり、メンターと参加者の間に、一種の信頼関係が築かれるようなやりとりが行なわれていることが、参加者とメンター両者がテーマを発見することを諦めない原動力となると考える。

【段階5】 レポートのテーマを発見する

テーマを探究するため、参加者により、自身に関する様々なエピソードが語られる段階である。メンターは、参加者があるエピソードを選択的に語ることをとおし、どのようなテーマに近づこうとしているかを考えながら、対話を進める必要がある。そのような対話をとおり、参加者は徐々にレポートのテーマを焦点化していく。

参加者が自分のテーマを発見するまでの過程において、メンターが上述したような働きかけを行うことは、参加者が自分だけのテーマを発見するための手助けとなると同時に、メンターにとっては、メンターとしての役割への気づきを生む。

8. メンターとしての気づきから考える「考えるための日本語」という実践の可能性

本プロジェクトにおいてリアのテーマ発見に寄り添う過程で、私自身のメンターとしての役割や参加者との関わり方も変化していった。その経験から、自分のテーマについて考え、書き続けるために次の二つが重要であることを実感した。

①苦しみなながらも、諦めずに自分のテーマにたどり着くためには、(メンターだけでなく、他の参加者も含め) 自分の考えを伝える相手の存在が欠かせない。

②相手のことばに耳を傾け、何を伝えようとしているのかを受け止め、理解しようとする。

また、その過程で生じる疑問を相手に問い返し、諦めずに対話を続ける。

考え、書き続けるという行為は、自己との対話と他者との対話が両輪となり、前進していく。それゆえ、テーマの発見に至る過程において、両者が②で述べたような対話を継続しようとする姿勢を持つことは、非常に重要である。おそらくメンターの働きかけ方次第で、参加者は全く異なるテーマ発見に至る過程を経るはずである。このように考えると、「考えるための日本語」は、「自分とどのように向き合うか」、また「自分以外の他者とどのように向き合い、理解し合おうとするか」を参加する全ての者に問う実践でもある。

具体例を挙げれば、私は、特に3月4日からの対面でのグループ活動において、リアにとっての自分の考えを伝える相手となった。その後、リアの対話相手になったことで諦めずに対話を続けざるを得なくなった。対話の際には、リアにより語られる自身の家族や将来像などといった価値観に対し、私自身もそれに対する自分の考え方や価値観を語る必要があった。このようなお互いの価値観を重ね合うようなやりとりをとoshi、互いに対する理解を深めていった。私にとってこのようなやりとりは、リアという相手を理解するプロセスであると同時に、自身が普段あまり考えたことがなかったと意識していなかったことを意識化するプロセスでもあった。私は、リアとの対話をとoshi、自分自身を振り返り、自分はどのような価値観を持っているかが明らかになっていくという体験をした。このように「考えるための日本語」という活動は、単なる日本語学習者を対象とする日本語教育実践という枠を越え、対話相手となる参加者の周辺にいる人々にも、自己の省察と相互理解を促す対話の場を提供する可能性がある。

対話を通じて見つけた自分の考えと語り合える仲間 —エマとパオラが行った他の参加者とのやり取りの意味—

岡田みなみ
(OKADA, Minami)

はじめに

本稿は、2013年2月から3月にかけて実施された『ヴェネチア・ワークショップ・プロジェクト』（「考えるための日本語—日本と私—」）の報告書である。本プロジェクトには、ヴェネチアのカ・フォスカリ大学の日本語や日本について学ぶ学生と早稲田大学日本語教育研究科の大学院生や研究者が参加した。カ・フォスカリ大学の学生は、「日本と私」というプロジェクトの大枠に基づき各自のテーマを決め、他の参加者とやり取りをしながら、そのテーマに対する自分の考えをレポートとしてまとめていった。早稲田大学からの参加者は、その活動を支援するメンターの役割をした。

筆者は、はじめはプロジェクト全体の一員として、そして途中からは5人の学生と2人のメンターによって構成されるグループの一員として、本プロジェクトで参加者たちのレポートをめぐるやり取りにメンターの立場で参加した¹。そのグループでは、グループ内でさらに2人ずつに分かれてグループメンバー同士で対面の対話活動を実施した。筆者は、「エマ」と「パオラ」の対話活動に同席し²、二人が苦勞しながらも根気強く対話を続ける様子を目の当たりにした。

対話活動の途中休憩の時間、二人から、このようなやり取りは「(母語である) イタリア語でも難しい」ことだという話が出た。うまく話せないのは日本語のせいではなく、自分の頭の中がすっきりしないからだ、と。それでも、二人はそれをどうにか相手に伝えようと少しずつ少しずつ言葉を紡いでいった。それは自らの頭の中と格闘し続けることでもあり、二人にとって非常に労力を要するものであった。しかし、そんな苦勞を口にする一方で、対話活動をする二人の表情は生き生きとしており、筆者同席の対話活動が終わってからも場所を変え二人で対話活動を続けていった。二人が徐々に多くの言葉を交わすようになり、二人の伝えたいことが次第に明らかになっていく過程を、筆者自身も非常に「おもしろい」と感じ、毎日の活動に参加することを楽しんでいった。プロジェクトが始まってか

¹ メンターは、参加者間のやり取りが発展するように、適宜問いかけをしたり自分の考えを述べたりする。

² 基本的にはエマとパオラの対話が中心であったが、筆者も単なる傍観者ではなく、二人の発言や対話内容に対する質問や自らの意見を表明し、対話に参加することもあった。

らそれまでの、なかなか言葉にできないもどかしさを経て、それはまるで、複雑にからまっていた糸がずっと一本にほどけていくような、曇っていた空がさっと晴れていくような、そんな爽快感を覚えるものだった。

では、エマとパオラそれぞれにとって、対話活動におけるやり取りはどのような意味をもっていたのだろうか。他方で、対話活動にいたるまでの多様な参加者とのやり取りは二人にとってどのような意味をもっていたのか。そして、それはどのように変化していったのか。プロジェクトを振り返り、活動の鮮明な記憶として残る様々なやり取りの躍動感を思い出しながら、そのことを改めて考えたいと思った。

本稿は、エマとパオラの活動内容を記述し、他者とのやり取りが二人にとってどのような意味を持っていたのかを考察することで、本活動の意義を考えることを目的とする。本稿の構成としては、最初に、本プロジェクトの理念的基盤をなす『総合活動型日本語教育』の考え方を概観した上で、本プロジェクトでの活動概要を紹介する。そして、全体でのやり取りと対話活動でのやり取りに大別し、それぞれの場で二人がどのような活動を展開したのかを追い、それぞれの場でのやり取りの意味を解釈していく。

1. 総合活動型日本語教育のめざすもの

まず、本プロジェクトにおける実際の参加者の活動内容に目を向ける前に、その活動の基盤となる「総合活動型日本語教育」の理念とそこでの他者とのやり取りの位置づけを簡単に押さえたい。

細川（2003）では、「総合的な活動」で中心となる理念は、「学習者の『考えていること』を引き出し、それを素材として、担当者も気づかなかった新しい世界へと教室を巻き込んでいくことになる」（p.9）ことであると述べられている。そして、総合的な活動の素材となる学習者の「考えていること」というのは、「学習者の外に存在している静態としての知識を意味するのではなく、学習者が外部を自分自身の中に巻き込んで社会関係を結ぶことによって明らかになる動態的知識」（p.12）である。つまり、その活動の素材 今回の活動で言うところの各自の『テーマ』とは、ひとり一人の学習者が捉えている学習者自身と外部世界との関連にある。

そのため、「総合活動型日本語教育」において各自のテーマを追究するということは、学習者と切り離して何かの物事について突き詰めていくことでは決してない。学習者自身とその関心事の結びつきを明らかにしていくことである。それは、その学習者にとって、その関心事とは具体的にどのようなことなのかを理解することから始まる。それと同時に、なぜその物事にその学習者は関心をもつのかを語り続ける。そうして、その学習者とその関心事との関連を明らかにしていくのだ。ゆえに、それは、その物事に関心をもつようになった学習者自身について知ることであり、学習者自身がその関心事とのこれからの関係

を考え直すことでもある。

そうした各自のテーマに基づく活動を通じて学習者は、「自己確認と自己表明の繰り返しと、他者とのインターアクション体験によって『私』は、新しい『私』への変容を自覚する」(p.13)。学習者自身が自分と向き合い、自分の考えを理解し、それを他者に向けて表現するだけではなく、それに対する他者の意見を理解することが欠かせない。そうした他者の意見があって初めて、自分の考えを新たな観点から考え直すことができるからである。それによって、今の「私」を知るだけでなく、「新しい『私』」に気づいていくことができるのだ。

次章からは、こうした理念のもとに行われた活動の中で、エマとパオラがどのような経験をしたのかを見ていく。なお、活動理念の詳細については、参考文献をご参照いただきたい。

2. 活動概要

本プロジェクトにおいて、参加者はまず、「日本と私」という大枠を基に、自らテーマを選ぶ。そのテーマについてレポート（対話活動を通じた思考を記述する「対話レポート」）を書くのだが、最終的にレポートを完成させるまでにはいくつかの段階が設けられている。①テーマの動機1、②テーマの動機2、③対話報告、④結論を段階的にレポートの一部としてまとめ、書いたレポートを電子掲示板³（以下 BBS）上に随時投稿する。それぞれの内容を以下に簡単にまとめる。

段階	内容
テーマの動機1	テーマを選ぶ。自分のテーマとそれを選んだ理由を説明する。
テーマの動機2	テーマを再考する。自分のテーマとそれを選んだ理由を書き直す。
対話報告	対話活動を行う。対話内容と対話から考えたことを報告する。
結論	テーマについて考え直す。テーマへの自分の意見をまとめる。

これら四つの段階⁴を統合し、最終レポートが完成する。参加者が、四つの段階ごとに投稿するレポートには、その都度メンターや他の参加者からコメントが付けられる。そのコメントに対して返信をする形で、BBS 上のやり取りは行われる。

テーマの動機1、テーマの動機2までは、全て BBS 上のやり取りによって進められる。

³ 本プロジェクト専用として、インターネット上でグループページが作られた。そのグループページ上に、プロジェクト参加者はだれでも自由に書き込むことができた。このグループページは、レポートの投稿、コメントのやり取り、事務的な報告、プロジェクトに関する質問などに使用された。このグループページを、本稿では、BBS（電子掲示板）と表す。

⁴ 四つの段階とは別に、プロジェクト開始時には、各自の自己紹介が投稿される段階も設けられた。

BBS はすべての参加者に対して開かれており、テーマの動機 2 までの活動は全体での活動であると言える。全体での活動は一ヵ月ほどインターネット上で続けられた。一方で、対話報告、結論の段階には、グループに分かれた対面での活動に移行している。対面での活動は、5 日間にわたりイタリア・カ・フォスカリ大学（ヴェネチア）で行われた。

対面での活動の初日、参加者自身がそれぞれのテーマを照らし合わせながら、テーマに関連のありそうな参加者が集まり、グループを結成した。その後、メンターが各グループに二人ずつ加わった。筆者が参加したグループは、「日本の伝統」が共通テーマとしてありそうだと考えるメンバーが集まった。後に「ワッショイ」というグループ名が付けられ、『日本の感動させる力』というグループ冊子を完成させた⁵。「ワッショイ」というグループ名には、神輿を担ぐ時のように皆で一緒に努力して活動しようとする意味があり、『日本の感動させる力』という冊子のタイトルは、それぞれのグループメンバーの気持ちや感じたことが描かれているということを表している。「ワッショイ」グループの構成メンバーは次項の表 1 の通りである。

【 表 1 : 「ワッショイ」グループメンバー構成 】

名前	最初のテーマ	最終レポートタイトル	学年
パオラ	ジャポニズム (西洋美術と日本美術の関係)	日本と私 と ジャポニズム	大学 2
エマ	日本人の伝統的な美感	私の美感	大学 3
G	日本の祭り	日本の祭り	大学 2
J	古典文学（および音楽）	日本の色と私	大学院 1
M	言葉の魅力	言葉の魅力	大学院 2
平澤	メンター		大学院 1
岡田			大学院 1

(学年は 2013 年 3 月)

対面活動 2 日目の午後には、大学外のカフェに場所を移して、パオラとエマ、J と M がペアになり対話活動を行った。この対話活動に、それぞれ岡田と平澤が 1 人ずつメンターとして参加した。なお、G はこの日都合がつかなかったため、G のテーマについては、対面活動 3 日目の午前にグループメンバー全員で対話活動を実施した。

本報告書では、全体での活動と、ペアで行った活動における対話内容の違いに注目し、全体 BBS と対話活動においてエマとパオラがそれぞれどんなやり取りをしたのかを記述し、

⁵ 本プロジェクトでは、各自のレポートが完成した後、各自のレポートをまとめたグループの冊子を作り上げることになっている。対面活動の最終日には、グループ名とグループ冊子のタイトルをグループメンバーで話し合って決定した。

それぞれの活動におけるやり取りが両者にとってどのような意味をもっていたのかを考察する。

3. 活動内容

エマは【日本の美感】、パオラは【ジャポニズム】を自らのテーマとして活動を始めた。そのテーマの下、多様な他者とやり取りをする全体 BBS での活動と、一対一で向き合い、じっくり話し合う対話活動を経て、それぞれの結論を導き出していった。本章では、多様な他者とのやり取りを行った全体 BBS 上での活動と、エマとパオラの一対一でやり取りをした対話活動の二つに大別して、その過程を明らかにする。

3.1. 全体 BBS：テーマから見えてくる自分の考え

3.1.1. エマ：【日本の美感】への共感から見えてきたエマの美感

自己紹介とテーマを決めるための BBS 上のやり取りで、エマは、【日本人の特徴的な美意識に魅せられました。日本人の美感は、私のと意外に近いので、日本人とよく分かり合うかもしれないと思ってきました。】[エマ 2013/02/09]⁶と述べる。エマの活動は、【日本人の特徴的な美意識】を切り口として始まった。

それに対して、【エマさんの美感はどんな美感なんですか？何をみると心を動かされるのでしょうか？】、【日本人の美感、といっても人によって違うのではないかと私は思います。】[S 2013/02/10]とコメントが返される。エマの共感する【日本人の美感】がどういうものであるのかを問われたエマは、次のようにコメントを書いている。

- 日本人は他の国民より、小さいことに気を払って、真価が分かろうとするような気がします。外国人は枯山水、盆栽、生け花のような自然と強い関係がある芸術を好もうとしません。
- 人によって気持ちが異なりますが、ほとんどの日本人が桜の【美しさ】が分かるようです。イタリアには芸術が好む人が大勢いますが、小さい花の【美しさ】が分かるイタリア人が少ないです。

[エマ 2013/02/12]

また、エマは【やはり自然と強い関係があることが一番気に入って、心を動か】すのだということも述べている。エマにとっては、【日本の美感】は【自然と強い関係がある芸術】

⁶ BBS 上の投稿は、引用部分の後に、[投稿者 投稿日]を記す。投稿者にはエマとパオラが含まれる。エマとパオラは名前で記すが、それ以外の参加者はイニシャルで記す。

を生み出し、【小さい花の「美しさ」】を愛でるものだと言われている。ここでのやり取りを経て、エマにとっての【日本人の美感】では【自然】に対する感覚が重要であるということが見えてきた。

こうしてエマが、自分の考える【日本人の美感】を説明していくうちに、他の参加者はそれに共感するエマ自身の美感はどのようなものであるのかに注目するようになる。BBS上では、【エマさんの美意識について、よかったら教えてください！】[S 2013/02/10]、【エマさんの『自然と強い関係があることが一番気に入って、心を動かします』っていう思いを掘り下げたらいいと思います。】[S 2013/02/12]などのコメントが続く。

これらのコメントを受けて、**テーマの動機1** [エマ 2013/02/12]で、エマは【どのようにして私の美感が生まれたこととどうして私の作ってきた個人的な見方によって日本に興味を持つようになったことを説明】するために、祖母に引き連れられてよく自然の中を散歩した経験を書いている。祖母との経験によって、【自然に関してはかなり鋭い感性が成長してきた】、【自然と特別な絆が作った】、【自然を『交際』し続けて、自然界との関係が深まったなど、自然への自分の思いを書き出している。【自然と特別な絆】があると考えていることや、【『交際』】という自分なりの言葉で【自然界との関係】を表現しようとしていることから、エマが自然との特別な結びつきを感じていることが分かる。

しかし、ここではエマのテーマはあくまで【日本人の美感】であることに注目したい。エマは**テーマの動機1**の段階で、次のように述べている。

プロジェクトのテーマとして、日本人の伝統的な美感にしたいと思います。特にこの美感と現在社会との関係です。昔から伝わった美感が20世紀の技術進歩に大きく変化されて、これから絶滅していくのでしょうか。それとも昔のままで存在していくのでしょうか。また、今日の日本人は物の美意識を感じたり、理解したりできるかどうか尋ねたいです。

[エマ 2013/02/12]

この時点では、自分の美感における自然に対する考え方を語りながらも、あくまでテーマは【日本人の伝統的な美感】であり、【この美感と現在社会の関係】を知ることをこのレポートの目的としている。ゆえに、エマが関心をもっている物事について【日本人】はどう思うかということが中心的話題として扱われている。

この**テーマの動機1**に対し、さらにエマが知りたいと言う【日本人の伝統的な美感】、【日本の美感】とは何なのかが他の参加者から問われる。その返答として、エマは次のように語る。

- 【日本人の伝統的な美感】という表現で昔から日本人によって書かれた著作(源氏物語、芭蕉の俳句、川端の作品等)や考案した芸道(茶道、華道、香道等)などからとらえる美感を指し示そうと思いました。もののあわれや幽玄や侘・寂や無常などのような美的な理念が【日本の伝統的な美感】の代表的な特徴とわかれていませんか。よく考えれば、それぞれの理念は自然と関係があります。だから、自然の美しさが分からなかったら、この気持ちも分からないと思います。
- 前言ったとおり、私の考えでは、【日本の美感】は自然と強く結ばれて、大きい魅力があります。

[エマ 2013/02/15]

ここまでのやり取りを受け、エマが【日本の美感】について語るとき、【自然】との関わりが欠かせないことが何度も確認された。

一方で、他の参加者からは、エマの【『美しい』と思った気持ち】[H 2013/02/16]、【『エマさんの美観⁷』のエピソード】[O 2013/02/18]を求めるコメントや、【どのようにエマさんの美感が作られてきたか】[T 2013/02/19]などのコメントが続く。つまり、それほどまでに【自然の美しさ】へ重点を置くようなエマ本人の美感を語るように求められたのである。このときの他の参加者の多くは、【日本の美感】よりも、そこから見えてきたエマの感性に興味をもち始めたことが明らかであった。筆者も、次第にエマはこういう風に思うのだということが分かってきて、それと同時に、エマがどう思うのかをもっと詳しく知りたいと思い、エマの書き込みを楽しみにするようになった。

以上のようなやり取りを経て、エマは、テーマの動機 2でテーマを【日本の伝統的な美感】から【私の美感】に変更した。テーマの動機 2では、【感動させるほど自然が美しいという子供の思い出】から始め、【自分の環境に生きている花】から【自然の魂】を感じたこと、【好きなものを撮影することによって、『自然の美しさ』を持って帰ろうとして】いたことを具体的なエピソードを交えて語り、【日本を知れば知るほど自然との絆が強くなるような感じがします】と述べている[エマ 2013/2/25]。

【日本の伝統的な美感】を切り口として、自分が魅力を感じる【日本の伝統的な美感】とはどのようなものかを他者に説明していくうちに、その中でもエマが【自然の美しさ】を重視していることが見えてきた。そのことから、【自然の美しさ】を大切にしようとするエマの感性が表れてきた。すると、そうしたエマの感性に他の参加者の関心が一気にひきつけられていった。こうした全体 BBS の一連のやり取りを経て、まだ会ったことのない「エマ」がどのような人間であるのかが浮かび上がってきたと筆者は感じた。

⁷ 【美感】の誤り。

3.1.2. パオラ：【ジャポニズム】から見てきたパオラにとっての美術と文化のつながり

一方でパオラは、自己紹介文の中で、自分の興味関心について、【日本の文化に興味があるし、美術にも興味があるから、将来に日本の美術関係の仕事をするのがゆめです。】[パオラ 2013/02/05]と書いている。その書き込みに対して、【パオラさんは美術が好きなんですね！自分で作品を作るんですか？それとも鑑賞することが好きですか？】【パオラさんはどんな美術が好きですか？】[S 2013/02/09]との問いかけがされたが、パオラはこれに返信していない。この段階では、【美術】がパオラのテーマにつながっていきそうだということが分かっただけである。

その後提出された「テーマの動機 1」では、パオラは【西洋美術と日本美術を結んでいる関係】として【ジャポニズム】を自分のテーマに選び、美術作品の写真を提示しながら、【ジャポニズム】の現象を説明している。安藤広重とファン・ゴッホの作品を比べてその類似点を示したり、日本の着物を着た少女を描いたクロード・モネの作品に見られる日本の影響を述べたりしている。

そして、最後の一部分に、パオラは次のように書いている。

こんな遠くて違い文化はこんな関係で結んでいるのは、素敵なことですね！

私は、高校の時から、一番好きな美術思潮はユーロッパの印象主義ですが、日本の美術も大好きになって、もっと知りたくなりました。その結果、日本美術と印象主義の関係を見つけて、本当に面白いなテーマだと思いました。ですから、日本の美術にも興味になりました。たとえば、このテーマのおかげで日本文化を掘り下げて、日本語を勉強するになりました。

ですから、このテーマに感謝して、もっと掘り下げたいです。

[パオラ 2013/02/12]

パオラが【ヨーロッパの印象主義】と【日本の美術】を好み、【日本美術と印象主義の関係】に興味を持ったこと、そのことをきっかけに、【日本文化を掘り下げて、日本語を勉強する】ようになったことが書かれている。しかし、なぜ【ヨーロッパの印象主義】や【日本の美術】が好きなのか、もしくは、パオラにとってその両者の関係とは何を意味するのかは説明されていない。

このパオラの「テーマの動機 1」に対して、【ジャポニズム】の説明だけでなく、【ジャポニズム】に興味を持つパオラの考えを聞こうと、いくつかのコメントが寄せられる。

- なぜパオラさんは＜西洋美術と日本美術を結んでいる関係＞を＜面白いテーマ＞だと感じたのでしょうか。[O 2013/02/13]
- 「こんな遠くて違い文化はこんな関係で結んでいるのは、素敵なことですね！」とパオラさんは書きました。これをもっと説明してほしいです。どうしてパオラさんはそれが「素敵」だと思いますか。[S 2013/02/16]
- 美術におけるジャポニズムについてパオラさんはどう考えますか。[H 2013/02/16]

これらの質問はどれも、辞書的な「ジャポニズム」の意味ではなく、パオラにとって「ジャポニズム」とは何を意味するのかを知ろうとする働きかけであると言える。

こうしたコメントに対し、パオラは【美術高校で勉強し】、【上手な画家になるのは夢】だったが、【日本の文化にも興味になって、熱望も変えてしま】ったと美術に関連した自分の過去を話し始めた。そして、自らのテーマの動機を次のように語る。

ジャポニズムのムーブメントは私が勉強した西洋美術と日本の結んでいる橋で、私の夢も象徴します。

そのうえ、印象主義の画家は日本の版画に興味になって作りかたを習いたがっていたように、私も日本から習いたいです。

もし私が言ったことはロマンティックすぎますが、これは私の気持ちで、論文の動機です。

[パオラ 2013/02/18]

日本の美術との出会いが、西洋美術を学んでいた自分の【熱望】を変えるほどであったこと。自分が勉強した西洋美術と日本をつないでいる現象であること。その現象に見られる、西洋画家の日本から習おうとする姿勢が自分と同じであること。これらがパオラの【ジャポニズム】をテーマに選んだ理由として説明されている。【私が言ったことはロマンティックすぎますが】という断り書きからは、パオラがこのコメントで、これまでは述べるのをためらっていた率直な【私の気持ち】を表現することを試みたことがうかがえる。

この記述が反映された「テーマの動機 2」では、パオラは【将来、興味がある美術と日本の結び付けようと思っています】[パオラ 2013/02/18]という夢を描いた。その夢に対して、【どうしてこの二つを結びつきたいとパオラさんは思いますか？】[M 2013/02/20]という問いかけがあった。パオラの返信は次のようであった。

はい、そうですね、実は夢は美術や文化の架け橋になることです。(中略) 私は日本の文化に興味になった時、いろいろな面白くて新しいことを習って、すごく嬉しかったです。ですから、ファン・ゴッホとモネは日本の美術が大好きになったように、他人

にもこんな気持ちを伝えたいと思います。イタリアにあるイベントや展覧会で日本の文化を紹介したいです。その上、日本でも洋西文化や美術を紹介するのは夢です。面白そうな仕事だからです。

[パオラ 2013/02/21]

パオラ自身が【日本の文化】から【いろいろな面白くて新しいことを習って、すごく嬉しかった】ことが、ゴッホやモネに見られる【ジャポニズム】の現象への興味につながったことが分かった。

しかし、【日本の文化】の何が【面白くて新しい】と感じたのかというパオラの考えは明確化されないままだった。パオラが共感した【印象主義の画家】が習ったこととして挙げられていたのは、日本の版画の作りかたという技術面の話である。しかし、【美術や文化の架け橋】だというパオラの夢には何かもっと意味があるはずだろう。だがそれが具体的にどういうことなのかがなかなか見えてこない。強い思いをもっていることは分かってきたのに、その思いの正体がわからず、筆者は少しもどかしい思いをしたことを覚えている。

その後、【どうして美術や文化の架け橋になりたいのか】[M 2013/02/22]がさらに問われ、パオラにとっての美術と文化のつながりが語られる。

人々に気持ちを伝えるように、美術が一番手段だと思います。ですから、日本の美術でイタリア人に日本の文化を伝えようと思っています。美術は人の心の鏡だからです。これは私の意見です。

[パオラ 2013/02/06]

この時に初めて、【美術は人の心の鏡】だというパオラの美術に対する明確な意見を聞くことができた。それでも尚、美術によって【人々に気持ちを伝える】ことと、【日本の美術】で【日本の文化】を伝えることの関連性は不明瞭であった。美術作品が人の気持ちを表現するということは一般的にも言われることである。しかし、美術は誰のどんな気持ちを伝えることができるのだとパオラが考えているのかは、明確ではなかった。

以上のように、繰り返される問いかけに答えて、異なる表現で何度も語られる中で、徐々にパオラが美術に対して特別な思いをもっているということが伝わってきた。ただ、文面だけでやり取りをしていた全体 BBS では、それがどのような思いなのか、パオラがどのような視点で美術を捉えているのかはまだ明確にはならなかった。

3.2. 対話活動：表現手段の異なりから更に見えた自分の考え

全体 BBS での活動を通して、二人はそれぞれ【自然の美しさ】、【美術】への思いを語る

ようになった。【自然の美しさ】を表現する手段として【写真】への関心を記述していたエマと、【美術】への関心を記述していたパオラの対話活動では、自然の美しさの表現方法の違いが両者に共通の話題として見出された。そしてその話題を掘り下げていく形で対話活動が進められていった。何度も言葉に詰まったり、言い直したり、苦勞して対話を続けながらも、対話をする二人の表情はとても生き生きとしていた。その対話活動は、エマ、パオラの両者にとってどのような意味があったのだろうか。

3.2.1. エマ：「写真」に映し出すそのままの自然の美しさ

エマは【自然の美しさ】に対する思いを語った「テーマの動機2」で次のように書いている。

自然の「魂」を求める私は、14歳になってから、バイクに乗って、自然の美しさを探しに遠い所へも行くようになりました。そして、美しいと思ったものの写真を撮るようになりました。その所から帰えると自然を眺めなくなるので、好きなものを撮影することによって、「自然の美しさ」を持って帰ろうとしていました。

[エマ 2013/2/25]

【自然の美しさ】を感じるエマは、それをいつでも身近に感じられるように、その美しさを写真に残そうとするようになったと言う。パオラはこの記述に注目し、対話を始める。⁸

P 動機文に自然が好きでしたから写真を撮るのも好きになったと書いたでしょう。

E そうです。

O じゃ、初めは自然の写真だけ好きでしたが、それから写真が一般的に好きになりましたか。

E いいえ、実は自然以外のものを写真に写すのが特に興味がありません。写真はただ自然の美しさを「捕まえる」手段です。つまり自然の美しさを持って帰るために写真を撮るようになります。

この対話について、エマは【説明しながら私にとっても写真の役割がもっと明らかになったと書いている。【写真を撮るのが好きですが、写真家と違って芸術家になりたいわけではありません。ただ自然が好きな人です。】と、写真を撮るのを特別好むわけではなく、自分にとって写真が【自然の美しさ】を残すために重要であることを確認している。

そして、絵が趣味であるパオラと、【自然の美しさ】を表現するために写真と絵では何が

⁸ 対話活動の内容ではエマ、パオラ、筆者の岡田をそれぞれ E、P、O で示す。また、これ以降は全て参加者の最終レポート（それぞれ 3.2.1. はエマ、3.2.2. はパオラの最終レポート）からの引用であるため、投稿者・投稿日等は省略する。

異なるのかということ話を話していくうちに、写真に訴えるエマの【自然の美しさ】に対する美感がさらに明らかになっていく。あくまでエマにとって写真は【自然の美しさを「捕まえる」手段】のひとつである。そのため、写真という手段を選ぶ理由が明らかになるにつれ、【自然の美しさ】としてエマが何を感じているのかが浮き彫りになっていった。以下はその対話内容である。

E 私は写真を撮る時、できるだけ、本物をそのまま写真に写りたいです。パオラさんも目で見た物はそのまま絵に描こうとしますか。

P はい、でも絵に物だけじゃなくて、描いている時の気持ちも入っています。

E そうですね。このところは違います。私は心が自然に動かされても、気持ちを入れないようにしています。私の考えでは写真は客観的なものです。自分の気持ちが入っていたら、写真を見る人は本物ではなく、私の視点から見た物を見るしかありません。逆に私の気持ちに影響されないで、他の人は私が撮った写真を自分の視点から見てほしいです。

P わかりました。気持ちが入っていませんね。でもエマさんは写真が撮りたい時、気持ちがないわけではないでしょう。

E もう当然了。気持ちがなかったら、写真がうまく撮れないはず。パオラさんは絵を描こうと思って、その時の最初の気持ちで描きますか。

P 絵を完成するのに時間がたくさんかかるので、描きながら気分が変わっていきます。

E そうしたら、気持ちがいろいろなんではありませんか。

P はい、いろいろで、絵に全部入れます。

E でも、絵を描いている間に気持ちが逆になったら、もう描いた部分がどうしましか。

P そのままにします。いろいろな気持ちが入った絵のほうが好きです。

E そうですか。私の考え方は反対です。自然の美しさはあつという間変わるかもしれないので、感動させた美しさが写真に写したいです。それぞれの瞬間の美しさを一緒にしたらすこしもったいないです。でも、確かに、露出時間が長い絵も魅力がありますね。

この対話を通して、エマは、【異なった考え方を持っている人と話して、この比較のおかげで私の考え方をもっと理解できるようになり】、【『気持ち』と『露出時間』の話もできて、今まで考えたことがないことも出】たと振り返っている。パオラは、【絵に物だけじゃなくて、描いている時の気持ちも入】れ、絵を描きながら変わる【いろいろな気持ち】を【絵に全部入れ】ることを好む。それに対して【心が自然に動かされても、気持ちを入れないようにしてい】るエマにとっては、【自然の美しさはあつという間変わるかもしれない】から、【それぞれの瞬間の美しさを一緒にしたらすこしもったいない】のである。写真と絵と

いう異なる手段によって、それぞれどのように自然を表現するのかということを互いに理解しようとすることによって、エマは、【今まで考えたことがない】観点から自分が【自然の美しさ】の中でも何を大事に思うのかを知ることができたのである。

エマは、この対話活動を経て明らかになった対話相手のパオラとの違いから気づいたことを次のように結論に記述している。

私はどうして写真を撮るようになったのか。また、撮影の目的は何なんですか。この質問の答えがだんだんはっきりになってきました。自然が好きなので、写真が自然の美しさを「捕まえる」ための大切な手段です。少し対話したら、私のように自然の美しさが「捕まえたい」人が思ったよりたくさんいるそうです。しかし、まったく同じものが好きでも、やはり「好み方」が違います。それに自然の美しさの伝え方も違います。自分の気持ちがなくて、できるだけ純粋な美しさを伝えたい人がいれば、自分の気持ちで富ませた美しさを伝えたい人もいます。つまり、自然の美しさに接近して、「交際」する方法が色々あります。最初にあまり親しんでいない方法を納得できないかもしれませんが、少しずつ他人の見方も理解できるようになると思うので、努力のかけがあると思います。

最後に対話に通してよく分かったのは自然が美しいと思って、そんな美しさに何も除いたり加えたりしないつもりであることです。自然の美しさをそのままにして、見とめながら自然と一緒にすることです。これは私の美感です。

エマは、対話活動によって、自分が【自然の美しさ】を伝えるのに写真という手段を用いることの意味を初めて考えた。そして、写真とは別の手段を用いて何を伝えようとするのか他者の意見を聴くことによって、自分が写真を用いて伝えたいのは何であるのかを考える機会を得た。それはエマにとって【努力のかけ】があることであった。なぜなら、その努力を経て、エマは、自然の【美しさに何も除いたり加えたりしない】、【自然の美しさをそのままにして、見とめながら自然と一緒にな】ろうとする【私の美感】を知ることができたからである。

エマは、テーマを【日本の美感】から【私の美感】に変えた時のことについて、【私について書いた時、私の美感と自然が強く繋がっているのがすぐ分か】ったと振り返っている。しかし、そこからさらにパオラと対話することによって、エマは、自分が【自然の美しさ】をどのように感じているのか、自然とどのように関わろうとしているのかを語れるようになったのである。

3.2.2. パオラ：「絵」に映し出す変わりゆく様々な気持ち

パオラの「テーマの動機2」に関するエマとの対話活動では、まず、なぜパオラが【ジャポニズム】をテーマにしたのかを明らかにするために、【なんで浮世絵はそんなに好きですか】というエマの質問から対話が始まる。それに答えてパオラは以下のように説明している。

西洋画家も浮世絵に興味があったので、浮世絵はヨーロッパと日本を結んでいる関係になったからです。それで、西洋画家は日本の文化にも興味になりました。私も、その画家のように、日本の美日を見て日本の文化にも興味になりました。私の考えでは浮世絵で日本の文化がはっきり見えるからです。

ここでは、西洋画家が浮世絵などの日本美術に興味をもつようになった過程が、パオラ自身が美術から日本文化に興味をもつようになったことと重なるためだという理由が中心的に語られている。

しかし、ここで語られた【浮世絵で日本の文化がはっきり見える】ということに対してエマから更に説明を求められると、パオラは、【私の考えでは、美術は心の鏡だから】という表現で答えた。この表現は、全体 BBS でのやり取りの中で引きだされたパオラの考えである。これをエマとの対話活動で再び述べているということは、【美術は心の鏡】という考え方に、パオラならではの美術の捉え方が表れており、そこにパオラにとって日本の美術と文化をつなぐ何かがあるのだと考えられる。

その後、エマのレポートに関して、写真と絵という表現方法の違いについて語ったこともあり、話題は絵を描くことに移る。写真と絵では【自然の美しさの伝え方】が違いうことを実感したエマは、パオラが絵を描くことによって何を伝えようとしているのかを明らかにしようとする。

E 描くときにパオラさんの一番大切な目的はなんですか。気持ちも描き出しますか。

P はい、もちろんです。私の頭のなかには様々な気持ちがあるので、それを描き出すのは必要なことです。それに、書いた絵に自分の気持ちを入れるとき、私もその気持ちをはっきりします。それで、自分の気持ちを気付いて、のんびりになります。

E わかりました。それだったら、悲しい時に、うれしい時に、作った絵も変わりますか。

P はい、そうです。

(中略)

P エマニエルさんも写真の中に気持ちを入れるようにしますか。

E いいえ、実は、自然の美しさは感動させるので、自分の気持ちはいらないと思います。

そうですね。ですから、写真の目的と描いた絵の目的は違いかもしれませんね。

P 私もそう思います。どちらでも自然が表せますが、写真で現実が取れます。ところが、描いた絵で描いた人の立場も見られるので、それは現実ではありません。

エマのレポートをめぐる対話活動の中で、【心が自然に動かされても、気持ちを入れないように】するというエマに対し、パオラは、自分は【絵に物だけじゃなくて、描いている時の気持ちも入】れ、【いろいろな気持ちが入った絵のほうが好き】であると述べていた。ここでは、さらに、【私の頭のなかには様々な気持ち】があり、【書いた絵に自分の気持ちを入れるとき、私もその気持ちをはっきり】するのだと話している。つまり、パオラにとって、絵を描くということは、自分のいろいろな気持ちを表現するだけではなく、自分の抱える気持ちを明らかにする行為として重要なのだ。

パオラは、対話相手のエマと互いの表現方法の違いについて語った対話について、【ほんとうに役に立った】と捉えている。この対話を経て、【私は自分の気持ちを表したり、並べたり、はっきりしたりするので、絵画で表したほうがいい】という自分の絵画に対する思いを記述している。さらに、自分にとって絵画は【気持ち】を表現・整理・発見するために重要であるということに気づいたパオラは、自分がテーマとして挙げていた【ジャポニズム】について次のように述べている。

- 気持ちの大切さも気付きました。私は自分の気持ちを表すように、日本がかも絵画や版画で自分の気持ちを表しています。
- 私の考えでは描いたもので自分の気持ちを見せるのは、別の文化をわかるために、大切なことだと思います。

パオラにとって絵画は【気持ち】を表すものとして重要であった。それゆえに、パオラは【美術や文化の架け橋】になりたいと考えていたのであって、それが【ジャポニズム】というテーマの動機であったのである。ただ単に、印象派の西洋画家が日本の美術から日本の文化を学んでいて、自分もそうであるからではなかったのだ。自分にとって美術が、【気持ち】を伝える手段として重要であるがゆえに、美術作品によってそれに込められた日本の美術家の気持ちを伝えたいからであったのだ。

パオラは、【対話をする前に美術と日本の関係についてしか考えませんでした、皆様と相談して、どうして美術が好きかのに考えて始め】た。さらに、エマとの対話活動によって、【写真と絵画や版画の違いについても考えて、わかりやすくなり】、【なんで私の考えでは文化を伝えるために美術は必要なことだと思うかわかるようになりました。】とパオラは記している。そうして明らかになった自分の考える美術の魅力を、パオラは結論でこのように語っている。

対話でも言ったように、絵画や版画の特徴は、気持ちを表すことです。例えば、私は新しい絵を書いて始めるときに嬉しい気持ちがあったら、作った絵も嬉しい感じを表すでしょう。だけど、もし終わる前に自分の気持ちは変化をすれば、その絵も変わります。ですから、絵を描く時に、詳しい目的を決めないようにした方がいいと思います。描いたことは気持ちと一緒に変わるからです。

エマとの対話を通じ、パオラにとって【美術】がどのようなものととらえられているのかがわかり、パオラにとっての美術と文化のつながりがずっと明確に見えてきた。パオラにとって美術作品とはそれを作成した人の変わっていく人の様々な気持ちを表すものである。ゆえに、パオラは美術が遠く離れて暮らす人と人の文化をつなぐ橋渡し役を担うものと考えていたのだ。【ジャポニズム】を切り口として、エマとの対話活動によって、自らの美術への思いを知り、自分にとっての美術と文化のつながりを再考したパオラは、結論において以下のように記述している。

最後に、私の将来の夢について話したいと思います。この活動に参加した、自分の希望もはっきりしましたからです。作品は様々な気持ちを表します。私は人々にこんな気持ちを美術で伝えたいと思います。美術が一番手段だと思います。ですから、日本の美術でイタリア人に日本の文化を伝えようと思っています。美術は人の心の鏡だからです。これは私の意見です。

パオラは、美術作品の作り手として、自分が最も伝えようとしていたことが【気持ち】であると知り、自分にとっての美術と文化のつながりを確認することができた。そして、パオラにとっては【人の心の鏡】である美術作品に込められた【様々な気持ち】を人々に知ってもらうことが、【将来の夢】や【自分の希望】であるとはっきりと述べるようになった。パオラは、本プロジェクトを通じたいろいろな対話を経て、自分の夢に向けて【信じて強くなって頑張るための動機】も見つけたとも書いている。【ジャポニズム】というテーマから、自分が美術とどのように関わってきたのかを振り返り、自分にとって美術がどのような存在であったのかを考えることで、これから先、美術とどのように関わっていきたいのかという展望をより明確にもつことができたのだ。

4. まとめ

エマは、全体 BBS での他の参加者とのコメントのやり取りを通じて、【日本の美感】というテーマから、次第に【私の美感】を語るようになった。【今日の日本人は物の美意識を

感じたり、理解したりできるかどうか尋ねたい】、【日本人の方のご意見をお聞きするつもり】であったエマに、他の参加者はエマが共感するその【日本の美感】とはどんなものであるのかを問い続ける。エマは、その問いに向かい、自分の考える【日本の美感】を何度も説明していくうちに、気づけばそれへの共感を生み出した自然の美しさを重視する自らの美感を語るようになっていた。

一方でパオラは、最初は西洋美術における【ジャポニズム】の現象を長く語っていたが、なぜ【美術】なのか、なぜ【文化】なのか、なぜ【美術と文化】のつながりなのかということ問われ続ける。それに答えていくうちに、パオラは、少しずつ自分と美術の関係や自分が美術を通して日本の文化に興味を持ったことなどを語るようになった。パオラにとって【美術は人の心の鏡】であり、【人々に気持ちを伝える】手段であるがゆえに、美術を通して表された様々な気持ちを伝えたいのだという思いが語られる。

その後、エマとパオラの間で、対話活動が行われるが、中心的な話題は「写真」と「絵」という異なる表現手段となった。互いに、相手はなぜその表現手段をとるのか、その手段を取るによって何を伝えようとするのかを理解しようと対話を続けた。そして、対話相手を通じて、反対になぜ自分は異なる表現手段をとるのか、その手段によって何を伝えたいのかということを考えさせられた。自然の美しさに【何も除いたり加えたりしない】で【美しさをそのままに】し、【それぞれの瞬間の美しさ】を大切にするため、【気持ちを入れないように】するエマ。【気持ちを表す】ため、【頭のなかには様々な気持ちがあるので、それを描き出す】ので、【描いたことは気持ちと一緒に変わる】と言うパオラ。表現手段という接点を見だし、自分とは異なる表現手段をとる相手と対話したことによって、二人は、その異なりからその表現手段によって、自分にとって何が大切だったのかを自覚することができた。

そのことは、さらに、エマとパオラそれぞれが、自分のテーマとこれからどのように関わっていくのかという意思を明確に意識させた。エマは、これまでの自分と自然との関わりを振り返り、その中で育まれた自分の自然に対する感性を自覚した。それによって、自分がこれからどのように自然の美しさを受け止めていきたいのかを明確に述べるようになった。パオラは、これまで自分が行ってきた芸術活動や自分が美術作品から感じることを意識化することで、書き手の変わりゆく様々な気持ちを表すという、自分の考える美術の役割を自覚した。その上で、将来、自分が美術にどう関わっていくのかということ、自分の夢として自信をもって語るに至った。こうして、自分がどう考えているのかを知るとは、「自分はこう考える。だからこうしよう。」というこれからの自分の一つの指針となった。

そして、その背景には、参加者間のやり取りの経緯があった。まずは、互いのテーマから相手や自分の考え方が次第に見えてくる。その考え方は共感できるときもあるが、自分とは異なると気づくこともある。それが、「この人はどのように考えているのだろうか」と

いう相手への興味につながる。そんな相手の考え方を互いに理解しようとやり取りを続ける。そのやり取りの継続の中で、相手だけでなく、常にそれと照らし合わされて、自分はどうように考えるのかということを理解するようになるのである。

以上のことから、本プロジェクトを通したエマとパオラの行った他の参加者とのやり取りには次の二つの意味があったと考えられる。一つは、自分の考えを知り、これからの自分にひとつの指針を見つけたこと。もう一つは、自分だけでは中々気づけないそうした自分の考えを共に引き出していけるような相手を見つけたことである。最初はメンターからの問いかけに答えることが中心であったが、本プロジェクトを通じて、学生たちは少しずつ見えてくる互いの考えに関心を持ち、徐々に学生同士で考えを引き出し合うようなやり取りを繰り返し広げるようになった。それは、互いの考えを語り合い、引き出し合えるような仲間が徐々に増えていったことでもある。

そして、この変化に、本プロジェクトの意義があったのではないだろうか。エマとパオラに限らず、多くの参加者が、今回のプロジェクトを通して、他の参加者とのテーマの関連から自らの対話相手を見つけ、自らの力で対話活動を突き進め、互いの考えを引き出しあい、自分なりの結論を見出していった。今回の活動を通じて、それぞれの学生が自分のテーマに関する自分の考えを明らかにしたわけだが、それには共に考えを語り合える仲間の存在が不可欠であった。本活動で見つけたそうした仲間自体が貴重な存在であると同時に、本活動を通じてそうした仲間を見つけることができたという一連の経験も非常に重要である。それは、最初はもどかしい思いをしながらも、根気よく語り合うことで相手の考えも自分の考えもより明確に知っていくことができるのだという経験である。本プロジェクトの参加者にとって、各自が導き出した自分の考えがこれからの自分にとっての一つの指針になることに加えて、こうした経験が、これから先また自分の考えが分からなくなった時に自ら語り合う仲間を見つけていけるような自信につながるのではないだろうか。

エマ、パオラ、筆者の3人が活動した「ワッショイ」のグループ冊子のまえがきでも、「ワッショイ」というグループ名を次のように振り返っている。

「ワッショイ」という名前を通じて言いたいのは、相手の努力・手伝いなくしては、自分は誰か、どこに行くのかなかなか分からないということです。やはり、「ワッショイ」という言葉を聴くと「考えるための日本語」に関する経験を考えずにはいられないでしょう。

参加者の中にも、今の自分を知りこれからの自分を考えるために、それを語り合える仲間の存在の重要性が、活動の記憶として強く残っていると言える。この【相手の努力・手伝いなくしては、自分は誰か、どこに行くのかなかなか分からない】ということを経験する

ことに、本プロジェクトの意義がある。様々な参加者の声から、本プロジェクトは、参加者にとって、プロジェクト中の活動自体に重要な意味が生まれると言える。しかし、それだけにとどまらず、人と対話しながらこれからの自分の進む先を考えていくという生き方に気づかせる経験として、本プロジェクトは意義をもつのであろう。

エマ、パオラをはじめとした『ヴェネチア・ワークショップ・プロジェクト』（「考えるための日本語—日本と私—」）の参加者にとって、本プロジェクトでの経験が、語り合える仲間と共に未来を切り開いていく後押しとなれば幸いである。

参考文献

細川英雄（2003）【『総合』の考え方—問題発見解決学習としての総合活動型日本語教育】【総合】研究会編『【総合】の考え方と方法』早稲田大学日本語研究教育センター：2-17

「チーム思いやり」の３人はなぜ自分の更なる理解に至ったのか

Why did the three people of “*Team Omoiyari*” reach a better understanding of themselves?

松島 調

(MATSUSHIMA, Nari)

概要

「チーム思いやり」の３人は本プロジェクト「考えるための日本語 -日本とわたし-」を終えた後、３人とも「気が付かなかった自分に気が付いた」という感想を述べる。なぜこの３人はこのように思うようになったのか。この活動の何がそのように思わせたのか。

この３人の「対話報告」や「BBS」での他者とのやり取りを読み解くと、そこには他者からの「どうしてそう考えるのか」という問いが常にあったことが分かる。この「どうしてあなたはそう考えるのか」という問いが、それまで自分の外部にあったと考えていた自身の関心の方向を、自分自身に向けたと言えよう。その結果、自分自身について考えるようになった。この、自分自身について考えるという行為は、３人にとって、「難しさ」を伴うものであったと同時に、楽しく、面白いものでもあった。

本報告書では、彼らの自分の更なる理解に至った意識の変遷と理由を、他者とのやり取りを注視することで分析する。

Each of the three members of “*Team Omoiyari*” made comments that they became aware of traits of themselves they hadn’t noticed before the project “*Japanese for Thinking – Japan and Myself –*.” Why did they come to think like this and what part of this project caused them think so?

Reading their reports attentively, the fact that they were always faced with the question “why do you think so?” by others has lead them to change. It can be said that this question turned the direction of their view from the outside to inside themselves. They first thought the object of their concerns was outside but as the project progressed they started to think of themselves. For them, this act of thinking about themselves was accompanied with difficulty, but at the same time, it was considered interesting.

This report analyzes the vicissitude of their thinking and its reason that yielded a better understanding of themselves, by paying attention to the exchanges with others.

序章 はじめに

第1節 プロジェクトの概要について

この報告書は、2013年3月4日から8日までイタリアのヴェネチアにあるカ・フオスカリ大学東洋北アフリカ研究学科で行われたワークショップと、これに先立ってインターネット上で行なわれた約1ヶ月にわたるやり取りを基に考察したものをまとめるものである。

これは、「考えるための日本語 ―日本とわたし―」というテーマを持った総合活動型日本語教育の理念に基づく活動であった。「総合活動型日本語教育」とは、「参加者一人一人が『自分にしか書けない』レポートをめざす」ものである¹。なぜこれを行うのかと問えば、「自己確認と自己表明の繰り返しと、他者とのインターアクション体験によって「私」は、新しい「私」への変容を自覚することができるようになる」²ことが期待できるためである。この他者とのインターアクションが必要となるレポートを書くことが本活動全体の目標であった。

カ・フオスカリ大学側からは約20人の日本語に関わる学生や教員が参加し、早稲田大学側からは日本語教育研究科の学生がメンターとして8人参加した。

対面でのワークショップに先立ち、インターネットを通じて2月4日からグーグル・グループの掲示板³を開設し、1ヶ月にわたって事前のやり取りを行なった。まず、このプロジェクトの早稲田の学生側のチームリーダーであるFから次のようなアナウンスがなされた。

(BBS より)

本プロジェクトでは、次のような活動を行います。

- ◆対話レポートを書き、グループ冊子をつくる
- ◆テーマ: 日本と私
(タイトルは自由、自分でつける)
- ◆最終分量: 5,000～8,000 字くらい(冊子作成の前までに)
- ◆最終レポートをもとにしたグループ冊子を作成し、インターネット上で公開。

実際には、下記のスケジュールによって進んだ。

【準備期間】

1. 「日本とわたし」をテーマとするレポート制作活動のテーマ決め(各人)
2. そのテーマを選んだ「動機文⁴」の提出(2月12日締切)
3. 「動機文」へのコメント(2月13日～18日)
4. 「動機文」の書き直し⁵(2月18日締切⁶)

¹ 細川(1999)

² 細川(2003)

³ 以下、「BBS」という

⁴ 最初の「動機文」をここでは「1回目の動機文」と言う。

⁵ 1回目の動機文の後にBBSでのやり取りを経た後に書き直した動機文を「2回目の動機文」とここでは言う。

5. BBS でのやり取り（2月18日～3月1日）

【対面でのワークショップ】

6. テーマによるグループ分け（3月4日）
7. グループ毎での「動機文」に関する話し合い
8. 「対話」
9. 「対話」の内容に関する話し合い
10. 「結論」に関する話し合い
11. レポート集のコンセプトや中身に関する話し合い

準備期間の最中、BBS での活動では特に誰か誰を担当するか等は定めず、レポートを書く 1 人につき 1つのスレッドを立ち上げ、それについてメンターも参加者も自由にコメントをつけていった。一人ひとりが何をテーマとするかについては、BBS 上で動機文の提出とそれに伴うやり取りである程度は知っていたが、対面でのワークショップの初日に自己紹介と共に再度発表され、近接するテーマにより 4つにグループ分けを行った。（上記 6）。そして、そのそれぞれのグループにメンターが 2人ずつ入り、話し合いに加わった（上記 7～11）。

「対話」とは、自分のテーマについて他者と話し合うセッションのことを指す。自分がなぜそのテーマを選んだのかという動機や、テーマそのものについて話す。対話の相手は授業のメンバーに限らず誰でもいいことになっていたが、対話を有益なものとするためにはその相手を誰にするかということも考えて選ぶ必要があった。対話は、当初は対面でのワークショップの前に各自行なう予定でいたが、実際にはワークショップが始まってから行なわれることが多かった。また、対面でのワークショップの流れとしては上記に挙げた通りではあるが、どの活動を何日に行なったかについては、グループ毎や本人の進捗状況により異なる。

第 2 節 レポートの作成過程について

レポート完成に至るまでには多くの他者からコメントや質問がされ、それを受けて幾度も書き直すことが必要となる。例えば、「動機文」は 2回は提出することが定められている。また、2回目の「動機文」を書いた後の「対話」でも、自分が一方的に話すのではなく、相手のコメントを受け止め、考え、再度、返答をするが、それを持ち帰り「対話報告」として文章化する。

「動機文」と共にその「対話報告」もグループ内で読み合い、ディスカッションを行なう。その後に、考えたものを「結論」とするが、これも文章化し、グループで話し合う。最終的には、「結論」の後に「終わりに」をつけて個人のレポートが完成する。

⁶ 実際に提出されたのは、必ずしもこの締切に沿われたものではないことが多分にあった。

個人のレポートが完成したら、グループ毎にレポートをまとめたグループ冊子を作成する。グループ冊子全体に「まえがき」、「あとがき」、「奥付」をつける。グループで1冊なので、全体を貫くコンセプトが必要となる。グループとしての1つコンセプトを考えることで、グループとしての活動全体を振り返ることができる。また、冊子のタイトルやグループの名前も、グループのメンバーが主体的に決めた。

第3節 この報告書の内容について

この報告書では、「チーム思いやり」のメンバー3人がなぜこの活動を通して自分の更なる理解に繋がったのかを、BBS や対話における他者とのやり取りの中から分析する。「チーム思いやり」とは、筆者がメンターとして参加したグループである⁷。最終的に出来上がった本グループの冊子を見ると、3人が3人とも、「難しかった」と語ると同時に、「気が付かなかった自分に気が付いた」と述べている。これはなぜか。この活動の何がそのように思わせたのか。

以下、第1章では、「チーム思いやり」の3人がどのようなレポートを書いたのか概観し（第1節）、「終わりに」でそれぞれが書いた「自分の更なる理解」というものについて考察する（第2節）。第2章では、その「自分の更なる理解」がどのようにして起こり得たのかを、時間を遡り、BBS や対話を詳察し、分析する。

第1章 3人の「終わりに」に見る「更なる自分の理解」

第1節 「チーム思いやり」はどのようなグループか

「チーム思いやり」のメンバー構成⁸とレポートのタイトルは下記の通りである。

名前	レポートのタイトル	立場
V氏 ⁹	当初：敬語の大切さ ―日本と私	カ・フォスカリ大学院 2年
	最終：私にとって敬語の大切さ ―日本と私	
F氏	当初：日本の部活動 ―日本と私	カ・フォスカリ大学 3年
	最終：日本の部活動から生まれた「私の教育」	
T氏	当初：日本語から日本語教育まで ―日本と私	カ・フォスカリ大学院 2年
	最終：日本語から日本語教育、自分を救うため	
H		メンター
筆者		メンター

V氏の1回目の「動機文」と2回目の「動機文」は共に「敬語の大切さ ―日本と私」というタイトルで、敬語に対する関心の高さを表している。1回目での動機文では、このテーマ

⁷ グループ名は活動の最中に付けられた。

⁸ 学年は2013年3月末時点のものである。

⁹ 活動時に呼び合っていた名前のイニシャルを本報告書では用いる。

を選んだ理由を「卒業論文の話題は礼儀作法とビジネス・マナーことだったから¹⁰⁾」とし、京都でのホームステイの時に感じた日常の挨拶の中にある敬語の意識や、大学での商談のコースの中で感じた敬語の大切さを語り、これらの経験を通して感じた礼儀作法やビジネス・マナーの必要性に興味があるため、敬語の役割を深く研究したいと述べる。「私の将来の夢は、日本と関係がある貿易商社に勤めたいと思っているから、日本のお客様と取引をするため、商談を学ぶことは必要だと思います。¹¹⁾」と言うように、V氏にとってのこの時点での敬語とは、本人が抱く将来のビジネスの場面という夢の中で、ツールとしての役割を担うものであり、それを今よりも深く知りたいと考えているように思われる。

これに対しメンターHから「「敬語の役割」と日本の礼儀作法、ビジネスマナーの関係は为什么呢。『敬語』をVさんはどう思っているのかと関係していますが。¹²⁾」という質問がある。V氏は、「敬語は複雑でも、相手と関係を規制するために、つまり特に年上の人に尊敬を示すために必要だ¹³⁾」「敬語はイタリアではあったら、イタリア社会はだんだん改善するだろうかと思っています。¹⁴⁾」と述べてV氏自身が敬語に興味があることの理由を説明している。このことは、次第にV氏が発する言葉は、敬語そのものの機能というよりも、自分が敬語に対しどのように考えているか、ということに移行していくことを窺わせる。

そして、最終レポートの「結論」の箇所では、「私には人間関係のために、相手に対して尊敬することは、不可欠だと思っているからです。¹⁵⁾」とV氏が尊敬の気持ちを持ちながら人間関係を持つことを重要視する自分自身の考えを語るようになる。

F氏のテーマは、「日本の部活動」であった。このテーマにした理由について1回目の動機文では「日本とイタリアの教育システムには違っている点がたくさんあり、それをもっと詳しく知りたいと思ったからです。¹⁶⁾」という。F氏は日本でホームステイをした時に、ホストファミリーの15歳の息子が8月であるにも関わらず毎日部活動に行っていたことを目の当たりにし、イタリアとの習慣の差異に「本当にびっくりしてしまった¹⁷⁾」と述べる。F氏自身も水泳をずっとしていたが、「学校と全く関係がない活動で、学校は授業に出席する為だけのもの¹⁸⁾」であった。そして「私はイタリアの学校や大学も日本のようになればいいと考えています。学校が勉強する為だけのところではなく、授業が終わった後図書館や体育などの場所で友達と時間を過ごす機会があったら、きっとイタリアの学生たちはもっと学校を楽しめるでしょう。

¹⁰⁾ V氏1回目動機文より（2月13日提出）

¹¹⁾ Ibid.

¹²⁾ メンターHのBBSでのコメントより（2月16日）

¹³⁾ V氏2回目動機文より（2月27日提出）

¹⁴⁾ Ibid.

¹⁵⁾ V氏最終レポートより（3月8日提出）

¹⁶⁾ F氏1回目動機文より（2月12日にBBSに貼りつけ）

¹⁷⁾ Ibid.

¹⁸⁾ Ibid.

そして、もしイタリアにも各学校のスポーツチームがあったら、イタリアの社会はうまくやっ
ていけるのではないかという強い思いがあります。¹⁹⁾ という期待を日本の部活動に寄せてい
る。この段階では F 氏にとっての部活動は、それをイタリアの学校教育システムに取り入れた
いという位置づけである。

1 回目の動機文の後、BBS では F 氏に対し、「なぜ＜社会はうまくやっ
ていける＞のか²⁰⁾」「ど
うして、イタリアにも各学校のスポーツチームがあったら、イタリアの社会はうまくやっ
ていけると思っていますか²¹⁾」という質問が続く。これを受けて F 氏は 2 回目の動機文で「私の将
来の夢は、先生になることです。イタリアの学校や大学も日本のようになればいいなと考
えています。なぜなら、イタリアの教育制度に比べたら日本の教育制度は心理的に学生に対して強
く圧迫するかもしれませんが、私にとって立派な教育を受けさせると思います。」と、F 氏がな
ぜ教育の観点として日本の部活動を捉えているかを、自分の夢を語ることで説明する。

更に、対話を経た後の最終レポートでは、この自分が理想とする教育についての語りの箇所
が更に発展していることに気がつく。「教師になりたいくて、具体的に他人に対して配慮するこ
とも知識の大切さも学生に気付かせようとしたいです。²²⁾」「教育の意味は人によって、私も自
分の意見があります。もし先生になったら、具体的に同伴者として見なされたいです。一人前
の大人になるまで学生の成長を手伝う人になりたいということです。²³⁾」と、なりたい教師像
の夢を語る。この段階においては、「部活動」とは、もはや、自分がなりたい教師の姿を語る
に至った最初の具体的なきっかけという位置づけである。そこでは F 氏にとっての「部活動」
の持つ理想の教育のあり方という意味が抽出された形で語られ、「感じていることも思ってい
ることも深く熟考し、自分自身が大切にすることを思っていたより分かるようになりました。
²⁴⁾」と自分自身を見つめるようになった。

大学での専攻を日本語と日本文化にしたのは「子供のころから漫画やアニメが大好き²⁵⁾」で
あったからという T 氏は、それまでに学習した英語やドイツ語とは全く異なる日本語に対し、
「自分の力で知らない言語の秘密を解きたい²⁶⁾」という興味で、特に日本語という言語への興
味を抱く。しかし、「同じ授業を受けてるのに、みんなが自分なりの日本語を使い、異なるレ
ベルまで上がってきたということに気がつき、それはなぜなのかという疑問が、答えるわけも
無いが、自分にたずねはじめた。²⁷⁾」と自身が日本語を学ぶ過程で生じた疑問を述べる。そし

¹⁹⁾ Ibid.

²⁰⁾ BBS でのメンター M の発言 (2 月 12 日)

²¹⁾ BBS での VA の発言 (2 月 16 日)

²²⁾ F 氏の最終レポートの「結論」より (3 月 8 日)

²³⁾ Ibid.

²⁴⁾ F 氏の最終レポートの「終わりに」より (3 月 8 日)

²⁵⁾ T 氏 1 回目動機文より (2 月 12 日に BBS に貼りつけ)

²⁶⁾ Ibid.

²⁷⁾ Ibid.

て、「日本語を習うことより日本語の習い方に興味を持つようになった。人はどうやって外国語を覚えるだろう？なぜ外国語の中から日本語を選んだだろう？人にどうやって日本語の勉強を楽にして楽しませてもらえるだろう？このような質問に答えるため、これからは教育について調べて行きたいと思う。²⁸⁾」と語るように、T 氏の関心が日本語から日本語教育へ移っていく様相を記述する。

1 回目の動機文の後、BBS では興味深いことに、2 回目の動機文にはこの文言が若干変わる。それは、「教育について調べる」ということではなく、「このような質問が自然にできてきたので、答えるために教育を勉強することにした」というものである。更には、この文言の後には次の語句が付け足される。「将来、日本語の教師になるのは目的で、そのときまでに、どうやって自分の体験を生かし、他人の役に立てる方法を見つきたい。²⁹⁾」と。

これに対し、BBS では「T さんが生かしたい＜自分の体験＞はどんな体験ですか？³⁰⁾」という質問がされるが、それに対する返答は無いまま、対面のワークショップが始まる。そして、T 氏が対話相手に選んだのは、「よくわかってくれて、思っていることを私 (T 氏) の意見と違っても、遠慮なく言ってくれる³¹⁾」「親友³²⁾」の C 氏であった。C 氏はこの「手伝いたい」という部分について「でも何でそんなに手伝いたいのか？」と鋭く質問する。これに対し T 氏は「何でって、何で・・・何でそんなに人を助けたいかな・・・」と自問しつつ次のように答える。「この私の体験、誰かの役には立てないかなと思って・・・でもどうして誰かに役に立ってほしいかな？だって、日本語の勉強を生かしたいなら教育しかないかも。」。しかし、この堂々巡りとも言える自問自答に対し、C 氏は「いや、研究もあるでしょう？もしかしたら、人との関係が気になるからじゃない？ただの推量だけど、もしかして TT³³⁾が手に入れなかったものを他人にあげようとしているかも。」と日本語教育を T 氏が「人との関係」として捉えているのではないかと推察する。

T 氏はこの対話を次のように考察する。「私の手に入れなかったものといっても、自分でもそれは何だとはっきり言えない。クラスメートにおかしく思われたくないことかもしれない。確かに、私の高校までの学生時代はつらかった。小学校からクラスメートより勉強が早くて成績もよかったので、エイリアンさえ呼ばれるように仲間から外されたことがあった。その結果、仲間に入れてもらえるように勉強するのを控えた。私がみんなと同じレベルになったら差別されないかもしれないと思うこともあるが、それより、私と同じように勉強ができる人がいたら「私は独自ではない！」とも思える。私は何よりも、比類の無い存在と思われたくない。」。これは、自分の日本語や日本語教育に対する思いというよりも、かつての「つらかった」経験の

²⁸⁾ Ibid.

²⁹⁾ Ibid.

³⁰⁾ BBS でのメンター M の発言 (2 月 27 日)

³¹⁾ T 氏最終レポートより (3 月 8 日)

³²⁾ Ibid.

³³⁾ TT は T 氏のニックネーム。

告白であろう。C氏が指摘したT氏が手に入れたかったものとは、「自分でもそれは何だとはっきり言えない」としても、「クラスメートとの関係」ということがこの叙述から分かる。そして、クラスメートと自分を分つものは、T氏は他の人よりも勉強ができてしまったという事実であった。だからこそ、T氏は、他の人の勉強を手伝って、自分の世界にクラスメートが来ることを臨んでいたのかもしれない。

すなわち、T氏にとっての日本語教育は、他人を手伝うことで、同時に、過去から自分を解放するものであったのだ。そして「それと同時に日本語を勉強しようと思ったのは日本語は私だけのもので、それは他人から自分を区別してくれるものであるから。」と言って「単純に「自分がみんなと同じようになれないならどれくらい違うかをみせる！」と思ったのは答えになるだろう。」と日本語に対する思いを吐露し、T氏にとっての日本語と日本語教育の意味が明らかにされるのである。

対話は、T氏の人生の奥深くまで共に航行していき、結論として、「理想的に、学生一人一人が安心して勉強のできる教育環境が作りたい。そのため、「あなたは悪くない」「一人ではない」という不安をとけたい。それは私のために言ってくれた先生がいなかったからだと思う。見せてくれた人がいたなら、自分で見つけた答えは正しいかなという不安は出てこなかっただろうと思うので、私自身はそういう存在になれるようにしたいと思う。」という、T氏の理想のなりたい教師の像が語られた。

当初は自分の外にあった対象について夢を見ながら考察していたとも考えられる「チーム思いやり」の3人は、それぞれ次第に自分自身を見つめるように変容した。

最終的に3人のレポートは1つの冊子『個人から共通理想まで、そして。。。 ―見えてきた作りたい自分―』にまとめられた。対話を通し、それぞれが抱く自分の理想を語るようになった変遷が見られる他、自分自身とチームメンバーの理解が同時に進んでいるのが分かる。活動の過程でこの3人に共通の要素があることに気がついたからこそこのタイトルになったと言える。

この冊子は3人のそれぞれのレポートが完成した後に、「まえがき」や「あとがき」、「感謝」、「執筆者一覧」、そして「奥付」が全員の手によって付け加えられ、「なりたい自分」という一つのコンセプトを持つものとして編纂された。



「チーム思いやり」の冊子の表紙

第2節 3人が書いた「終わりに」を分析する

個々のレポートは、自身のテーマの「動機文」と「対話報告」に続き、「結論」と「終わりに」の部分によって構成される。「結論」ではその自分のテーマに関して最終的にどのように考えるかを述べるのに対し、「終わりに」とは活動全体を振り返り、この活動が自分にとっていったい何だったのかを内省するような位置づけであると考えられる。したがって、「終わりに」を読み解くことで、各メンバーがこの活動を振り返って、どのような思いを抱いたかを知ることができる。

まず、V氏の「終わりに」では、次のように述べて全体を締め括る。

私にとって「考えるための日本語」というコースの目的は、自分がと日本語の一番強いつながりがわかることだと思います。それに、自分の性格や希望していることや将来になりたい人間など、そのようなことについて考えさせることためにも役に立ったと思います。

初めに、このコースに参加した時、日本語は自信があまりなくて、ちょっと心配しました。インターネットで意見を交換することができてすることは、ちょっと難しいと感じました。なぜなら、言いたいことはみんなに説明することは、難しいだと思ったが、三日間に同じグループの同級生とメンターと一緒に直接に話していたことは、本当のテーマ動機を深くわかることとよくレポートを書いて終わるために重要だと思いました。

このコースはたくさん日本語で考えたり話したりしなければならぬから難しくても、本当に面白かったです。それに、他の人と意見を交換することができて嬉しかったです。このプロジェクトに参加したのは楽しくて教育的な経験でした。

V氏は、日本語で考えたり話したりすることを「難しい」としながらも「面白い」ことであって、他者と意見交換をして「嬉しい」と言う。それは「自分の性格や希望していることや将来になりたい人間など、そのようなことについて考えさせる」ことを経験したためだ。このコースを「難しい」と感じたのは、日本語の問題ではなく、考え、意見を交換し、自分自身に気がつくことができたからである。そして、それだから「楽しい」のだ。普通「難しい」という言葉はネガティブな感情である。それに対し、「面白い」「嬉しい」「楽しい」はポジティブな感情である。ここでも一見そのように述べているようだが、この「難しさ」があるからこそ、日本語で考えたり話したりすることを「面白い」ものとして感じているのではないか。

また、最後に「教育的」と述べていることも興味深い。当初は「日本語は自信」が無かったものであったが、最後には他の人に説明したり話をしたりすることで自分が持つテーマ動機への深い理解へ繋がった。この理解とは、「自分が希望していること」や「将来になりたい人間」について考えることである。この「将来になりたい人間」について考える機会でもあったという

意味で、「教育的」であると言っていると考えられるが、それは、この自分について考えるということが「教育的」であるという視点も持ち合わせているということを同時に意味する。

次に、F氏の「終わりに」を見てみよう。

このプロジェクトに参加できて、良かったです。初めに易しかったと思っていましたが、どんどん難しくなって、一生懸命努力して嬉しいです。自分が考えることを日本語で書くのは本当に複雑ですが、挑戦に応じて面白かったです。感じていることも思っていることも深く熟考し、自分自身が大切にすることを思っていたより分かるようになりました。よく考える為特に団体の活動は役に立ったと思います。興味があることは他人の視点から見られたので、教養を積み重ねました。外国語の勉強が大好き理由は、他の国の人と意見を交換するようになるからです。他人が分かってみることは、自分が知られることと同じだと感じています。ですからまだこのような経験するのを楽しみにしています。

F氏もV氏と同じく、「難しい」と言うと同時に、「嬉しい」「面白い」という感想を述べる。「感じていることも思っていることも深く熟考し、自分自身が大切にすることを思っていたより分かるようになりました」とは、面白さを感じた一つの要因であろう。考えを日本語で産出することは複雑であって困難さも伴っているが、「考える」という経験を経たからこそ自分自身の理解に繋がり、面白いと言っている。

また、「他人が分かってみることは、自分が知られることと同じだと感じています」とは、チーム名が「チーム思いやり」と名付けられたことを仄めかす。他者の理解と自分の理解が平行に行なわれたからだ。他人の視点が自分の理解のために重要であったことを表すものである。

最後に、T氏のレポートの「終わりに」を見る。

このプロジェクトのおかげで、少しでも自分のことをわかってきた気がする。自分のことについて話させて、思っていることをはっきり言わせて、自分でも気づかなかった本音が見えてきた。それはこれからどの場面でも役に立つと思う。「したいことがしたい」だけと言ったら、疑われるとすぐ自信をなくしてしまうだろう。「どうして、どうして」と聞かれて、答えを見つけて、自信を持って「私はこういう人だから」とは言えるようになった気がする。

それに、初めは全然知らない人に自分のことはうまく話せるかなと悩んでいたのに、対話はだんだん進んでいって、「全然知らないのにこんなに気をかけて聞いてくれる」と思っ
ってすごく感動した。

日本語のほうから見ると、頭にあることをうまく伝えるのにすごく努力がかかったけど、成長もしたという気がする。普通書かされる作文は決まった形で、ある程度固まった文型を使わないと失敗しやすいものなので、一度ぐらい形を気にしないで書けるとすっきりした。いろいろむずかしかったけど、参加してよかったと思う。

T氏はこのプロジェクトを通し、現在に続いている過去の自分自身に向き合った。そしてそのことを自分でも自覚している。相手に対し自分について語り、説明していく過程で、自分を意識するようになったのだ。また、「頭にあることをうまく伝えるのにすごく努力がかかったけど、成長もした」とは、「難しい」けれども、「自分のことについて」話させる段階を経ることで自分自身に気づきを得て、そして成長することに繋がったと言える。

第3節 「考えること」という「難しさ」からの成長

「チーム思いやり」の3人に特徴的なのは、全員が日本語で自分の考えを伝えていくことは「難しい」が、それが成長に繋がった、と自覚している点だ。「難しい」とはネガティブな言葉であるが、「自分の更なる理解」に繋がるものとして語っている。それはなぜだろうか。それぞれが「自分自身を理解するようになった」と語るに至るには、どのような過程を踏んでいったのか。次章では、3人のそれぞれについて活字媒体として残されたBBSとレポートを紐解き、手掛かりを探していきたい。

第2章 実際の活動の何が「考える」に至らせたのか

第1節 V氏の場合

「私にとって敬語の大切さ」をテーマに選んだV氏は、対話を3人と行なっている。1人はV氏のボーイフレンドで、もう2人は同じグループのF氏とT氏だ。ボーイフレンドとの対話は、日本語の敬語とは何かを説明してから、相手に意見を求めることにより始まる。ボーイフレンドが自分の考えを述べると、その理由をV氏が尋ね、ボーイフレンドが自分の考えを説明する。これに対し、対話自体はV氏の「そうですね。私もそう思っています。³⁴」という同調の言葉で終わっているが、その後に次のように考えを述べる。(傍点は筆者)

Eさんと意見を交換してから、敬語のような手段はイタリアの社会に合わせるかもしれないかと思い始めました。イタリアでは、尊敬しない人は大勢いると思っている人は私だけではなくそうです。相手に対して、特に目上の人、敬意を教えるいい手段は本当にイ

³⁴ V氏対話報告より（3月6日提出）

タリアでもあってほしいと思っています。³⁵

ここで注目したいのは、「Eさんと意見を交換してから、敬語のような手段はイタリアの社会に合わせるかもしれないかと思いはじめました。」という箇所だ。Eさんと対話し意見を交換したことで、一つの新たな考えを持つようになった。このことを考えると、「終わりに」で、他者と意見交換をすることが嬉しいと言っていることが、このボーイフレンドと意見を交換したことにも起因しているということが推測できる。

また、V氏は、同じグループのT氏とF氏との「敬語のテーマを選んだ理由」と「責任は成長してからわかることか」の2つについて対話報告を行っているが、前者に関する対話報告は、T氏とV氏の1ターンずつの計2ターンしかない。しかし、そのうちのV氏の発言は非常に長い。その後に自分の考えをまとめて述べているが、自分が敬語についてどのように思うかを表明することとなったのは、T氏の「まず、どうしてこのテーマを選びましたか。³⁶」という質問からであった。この短いながらも、「どうして」と理由を尋ねられたことにより、敬語のテーマを選んだ自分自身を説明している。

また、「責任は成長してからわかることか」という話題に関する対話でも、T氏は「責任の話なら、Vさんはイタリア人がもっと責任になってほしいことはどうしてですか。」と、再び「どうして」という質問で始める。これに対しV氏は、「責任がなかったら、特別な面だけに影響を与えなく、どの面でも無責任になってしまいます。それに、どの状況にも相手に対して、敬意が示しません。」と責任がなかったら相手に対する敬意も示されないことに繋がるという考えを説明する。この説明は、動機文やボーイフレンドとの対話の中にも見られるV氏の考え方であるが、T氏からは「しかし、個人的な成長をしたら、尊敬がわかることではないかと思っています。たぶん、昔は若いころから仕事を始めるので早く成長するかもしれませんか。」という反論がされた。これは、「若者が両親に対し尊敬しなくなった」というV氏が表明した意見とは相容れない考え方である。これに対し、V氏は、

そうかもしれませんが、これだけではないと思います。現在、大多数の両親は一日中仕事があるから、子供たちと一緒に過ごす時間は少ないです。それから、両親は欠席したから、謝るために子供たちがほしがっていることを全部買ってくれます。その結果、物の価値が教えられなくてしまいます。

とT氏の意見を一部分では受け入れながらも、親の教育に関する現状を述べて反駁する。それは、V氏の「物の価値が教えられなくなる」という状況を忌避したいという価値観を表明するものであった。また、これはF氏の発言により、V氏の意味は補填される。

³⁵ Ibid.

³⁶ Ibid.

F：だから、子供たちの教育ために両親が足りないんでしょうか。例えば、学校も援助したほうがいいですね。

教育に関心がある F 氏ならではの発言ともとれるが、「学校も援助したほうがいい」という F 氏の意見と共に、両親による教育の欠如が問題であるかと問うている。V 氏は、

はい、そうです。日本のように、部活動があったら、子供たちは同じ年の同級生と一緒に授業以外、他の時間も過ごすことができます。それを言ったら、私のテーマは教育のテーマとつながっています。

と言って、自分の問題意識が教育のテーマと繋がっていることを初めて述べる。確かに、V 氏は敬語の概念があればいいと最初から言うてはいたが、それを教育という方法を通して育てるとまでは言及していなかった。心中にあったのかもしれないが、内に留まるものでしかなかった。それが F 氏の指摘により、自分の考えが外化された。

まとめとして V 氏は「私のテーマは敬語についてですが、対話をしている時敬語だけではなく、一般的に敬意の話だと気づきました。」と新たな気づきを得たことを述べているが、これは「どうしてそう思うか」という質問に端を発し、そう考える自分を表明することで得たものと言えよう。

第 2 節 F 氏の場合

F 氏は最終レポートの「結論」を次の言葉で始める。

初めてこの部活動のものに関するレポートを書いてみたとき、イタリアの教育制度の改革の話まで広がることを全然想像していませんでした。しかし対話などの活動が続けば続くほど、なんて変えるべきものだと考えがあるのにどんどん気づきました。改革というより、個人として自分の義務は教育の改良をしなければならないと思っています。教師になりたいくて、具体的に他人に対して配慮することも知識の大切さも学生に気付かせようと思います。

他者とのやり取りを経た後に辿りついた地点は、活動が始まる前とは全く異なる地点であったことを述べ、その過程の中で気づきを得て新たな考えを打ち出している。それだけでなく、自分が将来になりたい教師像までも描いている。果たしてこれは何故か。F 氏は T 氏と V 氏と対話をしているが、その中で鍵になる言葉がある。それは、「どうして」という言葉である。代

表的なその例を下記に挙げる。

T: どうして部活動について書きたいと思いましたか。³⁷

T: F さんはどうしてイタリアにも部活動のようなものがあつたらいいと思いますか。³⁸

これらの質問に対し、F 氏は自分は将来先生になりたいという夢を語り、部活動を教育のシステムとして考えると、人と人を繋げ、関係をより深くするものとして優れているという F 氏の抱く考えを語る。この考え方は 1 回目の動機文にも 2 回目の動機文にも見られない理由であった。確かに F 氏は部活動というシステムはイタリアの学校の中にはないものであるため、もしあれば学校というものが楽しくなる、とは述べている。しかし、それはイタリアの教育システムはこうあるべきだ、という考えを述べている次元に留まっており、そのように考える自分について語る発言は少なかった。また、T 氏も F 氏と同様に先生になりたいという夢を持つことから、「どんな先生になりたい?」³⁹と語り合う。

自分の考えは、現代の若者は教育の大切さがあまりわからないことです。理想的にどうして若者は勉強しようとしなないか見つけることは先生の務めだと思います。この理由で、T さんも私も感じたことは、勉強したくない学生に理解してみることは先生の義務です。

このように部活動の話題を通し、自分が先生になったらどのようにありたいか、という話題に至る。ここに部活動の F 氏にとっての意味付けが明らかになる。

続いてテーマを敬語とする V 氏との対話が続く。V 氏が「最近の若者は特に授業中先生に全然尊敬しようとしなないと感じています。⁴⁰」「最近の教育者もあまり気にしないでしょう⁴¹」と述べるのに対し、F 氏は「先生だけではなく、一般的に目上や年上の人にも敬意を表さなければなりません。ですけれども学校のことだけではなく、家族も関することだと思います。両親からもらった教育を学校で学ぶことで補わなければならないとおもいます。⁴²」と自分の意見を一つひとつ語っていく。そして、F 氏は「どうして若者は無礼な態度をとると思いますか。」と「どうして」と逆に V 氏に尋ねる。V 氏は「両親とあまり時間が過ぎさないからでしょう。」という考えを述べるが、それに対し「自分の考えは特にこの問題について V さんの全く同じで

³⁷ F 氏対話報告より (3 月 6 日提出)

³⁸ Ibid.

³⁹ Ibid.

⁴⁰ Ibid.

⁴¹ Ibid.

⁴² Ibid.

す。」と意見の同調を述べ、部活動の教育的な意味を「部活動は教育に関するものです。なぜなら、教育的な時間の過ごし方だからです。スポーツなどの団体でされる活動に参加したら、子供たちは協力を学んで、同時に健康にいいものするようになります。」と語った。

対話はV氏に共鳴するかのように理想の教育を語る形で終わった。そしてグループ全体のテーマを「教育制度改革」だと考えて、最初のテーマと対話後のテーマが大きく変容したことを自覚する。F氏の気付きや夢の語りは、他者の「どうして」という質問を受けて、語りの対象が発展していった結果であるのだ。

第3節 T氏の場合

T氏のBBSでは「自己表明」と他者による「疑問」が数多い。1回目の「動機文」で自分の日本語を好きになった理由や、日本語の勉強を楽に人にさせる方法の模索という日本語教育への率直な動機を2月13日に提出した同日、メンターIはT氏が「みんなが自分なりの日本語を使い、異なるレベルまで上がってきたということに気がつき」と言ったことに対し、「どんなところからそう感じたのですか」と質問し、「Tさんにとって日本語の魅力と日本の魅力は違うものですか?」「日本の魅力とはどんなことでしょうか。」「Tさんは日本語を教えることに興味がありますか?」といくつも質問の形で返事を行なっている他、メンターMも「Tさん自身は、今の時点ではそれはなぜだと考えていますか?」と同日に質問している。参加者のRも「日本語の教え方と洋語の教え方はかなり違うのでしょうか。Tさんはこれについてどう思いますか。そして、数年間日本語を勉強した結果、何か日本語の習い方についてのヒントを見つめましたか。⁴³」などと質問を立て続けにしている。これに対し、T氏は

主に授業で質問されたとき、私が思っている答えとは内容が同じだとしても、口にするたびはみんなはかなり違う表現を選ぶというところからその印象をもらいました。別に、誤解や間違いをしているというわけではありません。ただ、みんなは違う言葉を選んで、自分を思っていることを日本語で発表するということが興味深く思います。

しかし、それはなぜでしょうね。もう少し考えさせてください(笑)⁴⁴

と「なぜそう考えるのか」に対する返答をしようとしつつも、この段階でははっきりとした理由は明示できていない。「もう少し考えさせてください」ということは、この質問に対し十分に熟考できていないことを示すが、その後もこのことについて考えていこうという気概をも表していると読み取れる。現に、上記の返答の3日後の18日には次のような独白がある。

⁴³ T氏BBSより(2月14日)

⁴⁴ Ibid. (2月15日)

「なぜ日本？なぜ日本語を選んだのか？」という質問が自分でも自分に何回も聞いてきました。

見つけた答えが自分の性格に結びつくので、少し説明しにくいと思いますが、とにかく述べてみます。

他者からの「なぜ日本語を選んだのか」という質問は、T氏にとって深い質問であった。だからこそ上記に続き下記のような「わたしは～という人だ」という語りをするのである。

私に、興味を引くものに取り付けられる癖があります。

たとえば、気に入る曲を見つけたら飽きるほど繰り返したり、感動させる小説を読んだらその作家の作品を全体読んだりすることが私にとって普通のことです。

それに、「気に入ることに関わりのあるものも好き」という子供っぽく単純な考え方を持っています。

「なぜ日本語を選んだのか」という質問に対し、最初はその直接的な理由について語っていたものが、「なぜ」と聞かれ続けるうちに、そのように考える自分自身を語るようになった。考察の対象が、「理由」ではなく、その理由の源泉である「自分自身」に変容していったのである。このことに関する自覚は、第1章でも引用したように、「終わりに」にも見られる。

このプロジェクトのおかげで、少しでも自分のことをわかってきた気がする。自分のことについて話すのを避ける癖があるのに、自分のことについて話させて、思っていることをはっきり言わせて、自分でも気づかなかった本音が見えてきた。それはこれからどの場面でも役に立つと思う。「したいことがしたい」だけと言ったら、疑われるとすぐ自信をなくしてしまうだろう。「どうして、どうして」と聞かれて、答えを見つけて、自信を持って「私はこういう人だから」とは言えるようになった気がする。

「どうして」と聞かれて「私はこういう人だから」と言えるようになったが、「思っていることをはっきり言う」ことで自信を持って自分のことを他者に言えるようになったのだ。そして、自分を「私はこういう人」と言えるようになったという経験を経たからこそ、結果として自分のことをわかってきたのだと言える。

第3章 この活動から言えること

第1節 「難しかった」が、「楽しくて嬉しくて面白いもの」であった

また、通常、「難しい」というものは、ネガティブな意味合いを持つものである。可能であ

れば避けて通りたいようなニュアンスすらある。しかし、この3人とも「難しさ」というネガティブな気持ち以外にも、「楽しくて嬉しくて面白い」という肯定的な意見をしている。

V氏にとっての「難しさ」とは「言いたいことはみんなに説明すること」と「たくさん日本語で考えたり話したりしなければならない」ということであった。しかし、「本当のテーマ動機を深くわかることとよくレポートを書いて終わるために重要」であり、「他の人と意見を交換することができて嬉しかった」のだ。

F氏にとっては「自分が考えることを日本語で書く」ことは複雑なことであったが、「挑戦に応じて面白かった」ものであった。だからこそその後も「このような経験するのを楽しみにしています」という感想を持ち得るのだろう。

T氏は「全然知らない人に自分のことはうまく話せるかなと悩んでいた」最初の気持ちは、終いには「全然知らないのにこんなに気をかけて聞いてくれる」と思っすぎて感動した。」と述べるに至った。何が難しかったかということについては、「いろいろ」というが、「参加してよかった」活動であったのだ。

第2節 他者からの反応「反論」「疑問」が自分の更なる理解をもたらした

「チーム思いやり」の3人に共通なこととして、BBSや対話の場において自分が出した意見に対し、他者から感想や質問が繰り返されている。質問をされると、それに対し返答をしなければいけない。しかし、説明して返答しているのにも関わらず、再び質問があった。中でも、他者から「どうしてそのように考えるのか」と尋ねられることは、自分にとってそれまでは当然であったその対象物に対して、改めて考えるだけではなく、そのように考える自分自身についても考えることにも繋がった。すなわち、「どうしてそのように考えるのか」という問いは、「そのように考えるあなたは何者か」という質問と同義となってくるのだ。なぜなら、当初は自分自身のことについては疑う余地のあるものではなかったものが、それが他者の目で「なぜそう考えるか」と問われると、そう考える自分自身について改めて説明しなければならないことになるからである。自分自身について説明するということは、自分自身がどのように考えていたかを改めて確認することに繋がる。

そうして、最初は自分の外にある対象物に向けていた目が、次第に自分自身に向けられるようになった。この時に、「チーム思いやり」の3人は、「自分の理解に繋がった」と、それまでに気が付かなかったような自分を新たに知ることができたのだと言うことができよう。

終章

ある一つの問題に対し、「どうしてわたしはそう考えるのか」という問いを自分にしてみるとしよう。そうすると、この質問に答えることは非常に難しいと気がつく。自分に向き合うことになるからだ。

「自分を見よ」と言われても、なかなかできることではない。なぜなら、自分の目で自分を見るということはそれまでに考えている自分という地点からではなく、一段上がったより客観的な次元から自分を見ることにほかならないからである。結果として、それまでは見えていなかった自分に気がつく。だからこそこの活動は「難しかった」のかもしれない。

今後、この問いを他者にするだけでなく、自分自身に対しても行なっていくことが自分を理解していく手立てとなるだろう。このプロジェクトではそのような示唆を得た。

最後になるが、この「チーム思いやり」のメンバーに感謝の気持ちを伝えたい。共に考えたと思う。他者が自分自身について考える時に居合わせたのは感慨深い思い出となった。

また、この報告書を書く段階においても、共にヴェネチアへ行ったメンターとコメントを付け合い、そのように考える自分をも考察した。自分が何気なく書いた箇所を褒めてくれたり、これは「独創的であろう」と思った箇所に「勝手な解釈ではないか」という批判的なコメントもあったりした。他者のコメントで、自分には無い新たな着眼点を得た。

この機会をくださった細川英雄教授とマルチェッラ・マリオッティ教授に改めて感謝の意を表したい。

参考文献

細川英雄（1999）『日本語教育と日本事情——異文化を超える——』明石書店

———（2003）「『総合』の考え方—問題発見解決学習としての総合活動型日本語教育」

『「総合」の考え方と方法』早稲田大学日本語教育研究センター「総合」研究会編 pp.1-17

講演「言語教育におけるメディエーションの意味」

細川英雄（早稲田大学大学院日本語教育研究科）

今回は「言語教育とメディエーションの意味」ということで、日本語教育としての意義と可能性というタイトルでお話しします。

このメディエーションという用語は、日本語教育の中では、まだまだあまり使われていないものですが、こういう試みの機会を与えてくださいましたマリ奥特ティ先生はじめ、今回のワークショップの受け入れをしてくださいました、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学に感謝をしたいと思います。

今なぜメディエーションか

まず、今なぜメディエーションかという問題について少し考えたいと思います。メディエーションという用語は、日本語では、仲介とか調整というように訳されています。しかし、ことばの教育において、仲介とか、調整というのはどんな意味を持つのか、ということは、ほとんど研究されていないといってもいい状況です。法律とか医療の分野では、かなりさかんに使用されている用語です。それはなぜかという、さまざまな要素が複雑にからんだ現実社会の中で、当事者同士で、解きほぐしていくためには一定の仲介者が必要だという考え方です。つまり、一定の仲介者が間に入って、そして、その複雑にからんだ問題を、当事者同士が解決していくためにサポートする、というようなこと、それがメディエーションであり、そのサポートする人はメディエーターと呼ばれています。それが教育、とくに言語教育の分野では、どのように解釈したらいいのかということを考えてみたいと思います。

ただ、その役割の説明とか重要性ということ以前に、教育、とくに言語教育の考え方、教育概念というものが90年代後半から大きく変わってきていることを指摘しておく必要があります。そのことをふまえないと、単にその役割や方法の問題にとどまってしまうと思うからです。ですからここでは、メディエーションということを考える前提として、社会的、状況的、価値の転換、ということと、教育概念の方向性の変化ということについてお話ししていかなければならないと考えています。

社会的、状況的価値の転換と、教育概念の方向性の変化

では、その社会的、状況的価値の転換と、教育概念の方向性の変化について、いくつか

のポイントを挙げることにします。

ひとつは、複言語、複文化主義、という問題です。様々な移動によって、複言語的状況、あるいは複文化的状況というのが言葉の教育の上で起こっているということ。もう一つは、インターカルチャーという問題です。これは、「相互文化性」と私が訳している概念です。インターカルチャーというのは、日本語では一般的に「異文化間」と訳されていますが、そのように日本語に訳すことによって、本来、インターカルチャーが持っていた意味を失ってしまう、と私は考えていて、あえて「相互文化性」という訳をあてています。インターカルチャーというのは、複数の文化が、交錯し合う状況の中での、個人の考え方、あるいは価値観、アイデンティティ、そうしたものが交互に交流していくこと、そして、さらにそれが社会形成につながっていくということが、インターカルチャーだと考えています。

もう一つは、市民性教育の問題です。このインターカルチャーの考え方を進めていくと、市民性教育の課題に行き着きます。市民性というのは、いわゆるシティズンシップと言われているものですが、この市民性教育というものが重要であるという主張です。この市民性教育というのは、個人が他者との協働においてどのような社会を形成するのかを考えるようになるような教育、ということになります。つまり、市民とは何かということを考えさせる教育、それが、市民性教育であると。これはヨーロッパの文脈の中で、フランスのジュヌヴィエーヴ・ザラトとか、イギリスのマイケル・バイラムというような人たちが、少しずつ指摘していますし、2001年に公開出版されたヨーロッパ言語共通参照枠（英語ではCEFR）の考え方のいちばんの出発点になっているが、この市民性教育ということです。

そのような社会的な、状況的な動き、価値の転換があって、それが、教育の概念の方向性の変化につながっていると考えることができます。

教育実践における方向性の変化

では、教育実践における方向性の変化というのは具体的にどういうものか、という議論に入りましょう。

ここでは、それまでの、決められたことを決められたように教える、あるいは覚えるという活動、つまりテキストがあって、そのテキストを順番に覚えていく、そのことによって知識が集積していくことを学習とするという考え方から、そうではなくて、それぞれ学習者一人一人のアイデンティティに働きかけつつ、それぞれが自律的に学ぶ空間をどう創っていくかという活動の方向へだんだん移ってきています。今までは、学習者にとっては、教師が持っている知識、あるいは教科書に書かれてある情報、そういったものを覚えればいい、それを自分のものにすればそれでいい、というように考えられてきました。あるいは、その変形として、そういう学習者をどうやってサポートしていくかというような考えが一般的だったんですけれども、このように、それぞれのアイデンティティに働きかけつ

つ、それぞれが自律的に学ぶ空間をどう創るかという活動になったときに、では、学習者はどうすればいいのか、ということが課題となってきました。また同時に、教師自身も、教師は一体何をするのかということが課題となってきたわけです。

ある一定の、実体としての知識を与えないということを考えようとする、教師は答えを持たないという活動になっていきます。つまり、教師が答えをもたない、テキストのなかにも答えがない活動とは何かということを考えなければならなくなってくる、ということなんですね。

教師が答えを持たない活動とは何か

では、教師が答えを持たない活動とは何かというと、最終的には、一人ひとりの価値を伴う行為の交錯するなかで、人間はどのようにして生きていくことができるのかということを考える活動だということができます。価値観というのは一人ひとり違うわけですから、それらが交錯するとか、入り乱れるわけですね。そういう状況において何ができるのか、ということを考えなければならない。ここには答えがありません。つまり、このようにすれば答えが見つかる、このようにすれば人は幸せに生きていけるんだみたいなことを、だれも答えとして持っていないからです。しかし、考えるためのある方向性は創っていかなければならない、ということになります。それが活動における問題発見と解決の方向性を模索していくということです。

練習・訓練から経験へ

そうすると、改めて教育活動というのは一体何かということが問われることになります。今までは、決められた実体としての知識や情報を覚える、あるいは教えるということだったわけですから、練習とか訓練という形が重要でした。それは、Exercise とか Training というように言われてきました。現在も、そういうふうを考えられている教室もたくさんあるんです。むしろそのほうが多いかもしれない。なぜ Exercise、Training をするのかというと、教室の外に出たらそれが使えるようになるという、ある大きな幻想、イリュージョンの中で、Exercise や Training をしていくわけです。それが役に立つかどうかは、実際だれにもわからない。しかし、役に立つだろうという仮定のもとに、その Exercise や Training が行われるわけです。例えば、野球やサッカー、どんなスポーツでもいいのですが、そのスポーツで、ゴールにボールを入れるとか、あるいはホームランを打つとか、なにかそういうことをするためには力をつけなければいけない、そこで腕や足の筋肉を鍛えるわけです。しかし、ゴールをとるとか、ホームランを打つとか、そういうこと自体はもっと総合的な活動の集約したものだということができます。つまり単純に身体の一部を訓練したりトレーニングしたりするだけではない、もっと総合的に起こることだということ

ができます。

誤解してもらいたくないのですが、これは訓練や練習を否定しているわけではないのです。問題は、訓練や練習が目的化してしまうということなんですね。そうではなくて、Exercise や Training、それ自体を目的化させないで、その実際の活動そのものが、その人のひとつの経験となるような場をつくるような活動でなければならないということなのです。

このときに、メディエーションという行為が、非常に重要になってくるのではないかと私は考えています。やや抽象的になりますけれども、さまざまな「結び・つなぎ」のあり方の認識、つまり、人と人を結ぶ、あるいは、その行おうとしている事柄とそれを経験しようという人たちを結んでいく、そのような概念をメディエーションというふうに言うことができるのではないかと考えています。ですから、単に道筋を示して、何かを仲介したり調整したりするということにとどまらず、むしろコミュニケーションという行為によって、その経験的な行為を支えていくこと、これがすべてメディエーションにつながると考えることができると思うのです。

各分野・領域と日本語教育との乖離

ここで日本語教育の歴史を少し振り返ってみます。ヨーロッパの場合ですと、まず日本語を使う分野との関係を考えることから始まるでしょう。19 世紀の中頃に日本学がオランダで生まれますよね。そのころから、日本語の、いわゆる習得が必要になるわけです。そのあと、フランスのパリの東洋語学校で日本語講座も生まれて、それがずっと発展してくるわけです。一方、日本では、海外の日本の言語、文化、社会に関心を持つ人をどう受け入れるかということが常に問題になってきました。日本語を学ぶという動機と、それぞれの分野・領域とをどう結んでいくかということがとても大きな課題になってきたわけです。

ところが、それぞれの分野・領域と日本語教育との関係では、一言でいうと、かなり分断化された状況が起こっています。19 世紀半ばに日本学が生まれたときには、おそらくそういう認識はなかったと思うんですけれども、1970 年の後半から 80 年代にかけて日本語の学習者が増大するという現象が起こります。日本の経済発展に伴って日系企業が海外進出をしたために、そこで働くためには日本語習得が必要だという認識が広がったためで、それまでは限られた人しか日本語を勉強しなかったんですけれども、学習目的が急激に大衆化することになります。反対に、日本研究希望者はずっと減少するという問題が起こります。ですから、地域研究としての日本研究の分野では、一方で日本語学習者がどんどん増大しているにもかかわらず、日本研究志望者は減少するという現実と向き合わざるを得なくなるのです。これは、ほぼ全世界的に起こっている現象です。そして、そこでは、教

師と学習者が乖離する不幸も起こっています。ちょうどこの 70 年代後半から 80 年代にかけて、コミュニケーション育成ということが盛んに言われるようになります。ヨーロッパで生まれたコミュニケーション・アプローチという考え方がアメリカに伝わり、全世界的に広がります。このころから、言語教育というのはコミュニケーション能力を育成する教育なんだと言われ出します。だから、コミュニケーション能力を育成しなければ意味がないというようにも規定されてしまうのです。これが 70 年代後半から 80 年代にかけてです。

このことは、一つの問題を生みます。これまで訳読法に慣れてきた日本学研究者にとっては、コミュニケーション能力育成というのは技術的に高度であるために、荷の重い仕事になってしまうのです。今までは翻訳して説明していれば済んだのですがけれども、学習者のコミュニケーション能力を育成しなくてはならないということが課せられると、これはとても自分の専門ではないというふうな認識が生まれます。つまり、余技としての日本語教育というスタンスになるのです。

このことによって、いわゆる専門の日本研究の方々と日本語教師とはさらに分断化され、その溝が広がってしまった。教育と研究の分業化というところに進んでいくわけです。この現象は、1970 年代後半から 80 年代にかけて起こり、21 世紀に入ってもどんどん広がっていつているということが出来るでしょう。

この技術主義について、もう少し説明をしましょう。実社会に役立つ、コミュニケーション能力育成主義というのは、必要な言語知識と場面のタスクという、二つのものが組み合わされています。必要な言語知識というのは、日本語における語彙・文型のことです。それは、すでにリスト化されていますから、それを場面と結びつけるためのタスクというものがあります。しかし、先程もお話したように、場面というのは、一歩教室を出れば無数にあるわけで、その無数の場面に対応することはできないのです。ですから、いくつかそれを切り取って、例えば、買いものするとき、とか、人にお詫びをしなければいけないとき、とか、あるいは、人にものを頼むときとか、そういう形で、いろいろな場面を、仮想の場面を作り、そのタスクをすること、そのような、いわば練習をすることによって、コミュニケーション能力がつくというように考えられてきたわけです。興味深いことに、その技術主義というのは、活動内容を拒否します。この技術としてのスキルやテクニックが専門化し、それが専門性となることによって、活動内容には入らなくなるんです。たとえば、作文指導においても、作文の内容がいか悪いか、いい作文とは何かという議論はまったくせずに、文字や文法のどこが間違っているというようなことだけが問題になるんです。こういう経験はどなたでもお持ちだろうと思います。

言語教育の専門性とは何か

そこで、ある特定の分野、領域に対するお手伝いの発想が起こるわけですね。肯定的な

言い方をすれば、縁の下の力持ちということになるんですけど、実はそれは単にお手伝いをしているにすぎないということなんです。すなわち、役割として主体になれないという問題が起こってくるわけです。しかもその役割を固定化させることが専門性であるというような錯覚に陥ってしまう。

このように、それぞれの分野・領域では、日本語が研究のツールとしてしかみなされず、その教え方や方法についてはだれも関心を持たないため、日本語習得の問題は日本語教育の専門家に任される、一方、日本語教育の側では、日本語を知らない人に日本語を教えるという、一種のパターナリズム(抱え込み主義)が生れ、両者はやはり乖離してしまう。排除と抱え込みが同時に双方で起きるということが、乗り越えるべき大きな課題になっているわけです。

これを乗り越えるためには、1990年代の後半ぐらいから指摘されはじめてるように、固定的な知識や技能を実体化させて、それを教えるということに対する限界を自覚する必要があるということだと思います。ポストモダンとかポストコロニアルニズムなどとも連動しているわけですが、知識や技能を動的なものとして捉え、その動的なプロセスに着目するという問い直しの姿勢が必要になるでしょう。この動的なプロセスに着目するという問い直しの姿勢そのものが、言語教育の専門性として考えられるのではないかと私は思うのです。

この動的なプロセスに着目するという問い直しの姿勢というのは、「なぜ私はこの学習・実践・研究をするのか」という意識ととても関係が深いものではないでしょうか。

例えば、日本という社会を対象にしたときは、その日本の社会を分析して解釈し、その位置づけを作って、その成果を学習や学生や学習者に与えるというようなケースが一般的です。学生のほうは、その解釈者の分析や、位置づけというのを、いわば、ひとつの実体として受け取るという状況が生まれてきたわけです。ところが、そうではなくて、言語活動を通して、学生や学習者と、あるいは教師一人ひとりがそれぞれの自分のテーマを発見し探求するような活動が必要なのではないかと私は考えるのです。そうすると、そこでは、教師が与える人、学生は与えられる人という関係はくずれ、教師も学生も学習者にとって、一人の言語活動主体としてのあり方とその可能性が問われてくるわけです。

自分のテーマを発見する—言語活動主体としてのあり方

では、その「一人の言語活動主体としてのあり方」というのは、どのようなことを言うのでしょうか。

ここで、自分のテーマの発見という課題が浮上してきます。

ある知識や情報を得て、それを集めて積み重ねれば、自分のテーマは出てくるかという決してそうではないんですね。テーマの発見のためには、もちろん知識も情報も必要で

す。知識や情報というものがインプットされると、それを認識・判断する自分がいて、その自分が認識、判断したものを他者に向けて表現化していく、アウトプットが行われます。そうすると、他者からはそれに対する反応が起こります。他者からの反応自体がひとつの情報・知識という形で、もう一度また自分に戻ってくる。それをまた、認識、判断するという、いわば螺旋を描くという活動になります。この活動をしながら、私たちは、一人ひとりにとってのテーマを発見していくというプロセスを見ることができます。

私の教育実践から

では、テーマの発見ということに関連して、授業実践ではどんなことをしているかというのをひとつだけ例を示したいと思います。

今回のワークショップと同じタイトルですが、「考えるための日本語」というもので、サブタイトルは「個人と社会を結ぶ」というものです。2010年度の春学期・全学オープン教育センター科目です。全学オープン教育センター科目というのは、所属の学部・研究科に関係なく、だれでも履修できる科目で、留学生とか日本人とかいうような区別もありません。選択制科目ですから、自分で希望してこの科目をとってくるということになりますね。このときは、学部生6名、別科生1名、それから実習生6名いて、TAとして博士課程の学生が1名、計15名でした。15名が5人ずつにわかれて三つのグループに分かれて活動しました。

この中で、中国からきた留学生Vさんの例をお見せしましょう。彼女は、早稲田のアジア太平洋研究科に籍を置く大学院生で専門は国際関係論です。当時博士課程に籍がありました。2012年の9月にめでたく博士学位を取得しました。この研究科はすべて英語で授業をしているので、本人も英語で学位は取得しました。このVさんという女性ですけれども、国際関係論を英語で勉強しに日本に来たというケースなので、日本語そのものはちゃんと勉強したことがないと、その当時も言っていました。ほとんど独学だそうです。普通の日本語コースに入ると、下のクラスに位置づけられてしまうので、このオープン教育センター科目をとれば、好きなところを取れる、ということで、たまたま私のクラスに入ってきた学生です。

このクラスでは、個人と社会を結ぶことを考えるためになにができるか検討する、という目的で活動しました。彼女は、「悶々新聞」という新聞を作るというグループに参加しました。「悶々新聞」という名称は、個人と社会を結ぶためを考えるために何ができるかがわからなくて悶々した、ということで「悶々新聞」というんです。

その時に彼女は、二つの大きな課題を持っていました。一つは、やはり自分は日本語ができないという不安です。常に「私の日本語を直してもらいたい」とずっと言い続けていました。もう一つは、非常に集団類型的な発想を持っていたということ。たとえば、自分

は中国から来ました。中国人です。日本人はどうでしょう。日本ではどうすればいいんですか、というような不安があったようです。国で自分のアイデンティティを計るというか、別の言葉でいえば、ステレオタイプですね、そこからなかなかぬけられなかった。

そのことと、国際関係で博士に入っているんだけど、その自分のテーマは何かという事について、かなり悩んでいたようです。自分のしたいこと、できることっていうのがわからない。自分のテーマが発見できないという状況ですね。

そのような課題を抱えながら、このクラスに参加し、グループやクラスの人たちと次第に打ち解けながら、自分のテーマを発見していく。次に引用するのは、そこで展開されたメールのやりとり中心にして、その中から、少し抜粋したものです。記述の順番はほぼ時間軸に沿ったもので、ゴチックの見出しは、編集の過程で私がつけたものです。

このクラスの一番の楽しみは、出すこと

私にとって、このクラスの一番の楽しみは、出すこと、そして、みんなの反応を待っていることだ。私は、普段、自分の考えを遠慮なく、どんどん出す人ではない。

もし、すべてを出せば、どうなるかな。このクラスで、実験すれば、多分大丈夫だ。…出すことによって、このクラスに来ることが楽しみになる。宿題が多いけど、楽しい。こういう出す、反応を見て、さらに出すというプロセスから、わかることは、実は、誰でも、出したいことだ。

冷やしラーメンを食べる感じ

みんな出すことによって、私も出す。私が出すことによって、みんなも出す。こういう経験がほんとに冷やしラーメンを食べる感じがする。

私たち、新聞で語っている、社会とのつながりの形と方法を、実は、グループ内で、すでに実行している。つまり、私たち語るものは、インタビュー(マ)からもらうものだしグループからもらうものでもある。こうやって、自ら経験して、社会について、ほかの人とのつながりに関する思いが深くなる。

このクラスの目的は日本語じゃない

日本語がこのクラスの目的じゃないけど、ひとつ気がついたことは、日本語に気にしなくなることだ。文法が正しいかどうか、そういうことを気にしなくなる。

向こうの話を半分しかわからないときに、ぜんぜんあせていない。めちゃくちゃな日本語を出しても、ぜんぜん恥ずかしくない。もう、どうでもいい、とにかく相手をわかせる(マ)ような感じで、やっている。これは、言葉の勉強にいいかもしれない。

「自分は外国人である」と受け止めること

最初は自分の日本語を心配した。うまく交流ができないならどうしよう。クラスメートはどのように自分を評価するのか……色々な問題を悩んでいた。

授業を通して、もう成長したと思う。外国人として、一番大事なのは「自分は外国人である」と受け止めること。ネイティブ(マ)レベルまで外国語を使えるのはいいであるが、外国人として不自然的に言葉遣いになってしまっても恥ずかしいことにならない。

どうして、どうやって、個人と社会を結ぶか

－ 二人の在日中国人との対話から思うこと

中国にいたとき、もし、この社会とつながっているかと聞かれたら、笑う彼(マ)知れない。なぜならば、生まれるときから、ずっとこの社会に住んでいて、つながっていないなんて、ありえないわ。どうして、どうやって、この社会と結ぶかと聞かれたら、ほんとに答えられない。わからないから、しかも、思ったこともない。…このきじは、ざいにち二人の中国人のインタビューをめぐて(マ)書いたもの。目的は、異国にいる経験から、社会と結ぶ重要さと方法を見ることである。

人は、どうやって所属感が生み出せるか？

人は、社会との結びから、所属感を求めるのだとしたら、どうやって、所属感が生み出せるか？Aさんは、自分の息子がもう日本化になるといったとき、さびしい顔をした。息子は、日本で育てたから、日本人と同じ認識を持って、自然的に日本社会に所属感が持つようになる。AさんとBさんは日本語が上手だけど、育て中国で、長年日本にいても、完全に日本人と同じなになしきを持つのが難しい。自分は中国人としてのエゴがあって、その部分をわかってくれなくて、自ら押さえて、なかなか所属感を生まれないじゃないかな。

同じ認識を持たない場合は、どうすればいいか。

同じな認識が所属感を生まれるために、とても必要だとしたら、同じ認識を持たない場合は、どうすればいいか。努力して、ほかの人と同じ認識をもつようにする？それとも、ほかの人の認識を無視して、自分の世界に閉じ込む？

わたしは、大学三年のとき、Intership(マ)で、半年ぐらい、シンガポールに住んでいた。とても、つらかった。…仕事は全部英語で、コンピュータを使うのは日常茶飯だし、会社に入ったとき、いろいろ間違いをやって、同じグループの人に迷惑をかけた。

ほんとは、つながっていない感じ・・・。

文化や知識や(マ)ちがうから、よく、同僚たちの会話に乗れなくて、仕事以外の交流もうまくいかなかった。時々、自分が無視される、ばがだと思われる感じがした。ほかのひとにみとめられるために、いろいろ勉強して、みんなの興味の持つことについて調べて、だんだんグループに入れるようになった。きもちも、まえより楽しかったけど、さびしさがなくなることがない。表面的に、つながっているみだいだけど、ほんとは、つながっていない感じがした。

出すのは、問題を解決の第一歩

今で、なぜそう感じたかと考えると、みんなの付き合った私は、同じ知識を持つ私、違う知識を持つ私を、どこかで隠さなければならなかったからだ。隠すのはやっぱり圧力をかけて、気持ちがよくなれないね。じゃ、すべて出せば、どうかな。かならず、結べる？

卒業してから、ずっと外国人と一緒に働いて、ひとつ学んだことは、みんな大体同じだから、遠慮なく、全部出したほうが、自分も楽、向こうも安心だということである。黙ったりとか、裏につぶやいたりとか、何も解決できない。出すのは、問題を解決の第一歩である。

意見を出して、だんだん元気になる

悶悶グループメンバーたちは、社会と個人の結びについて、自分なりの考えがある。最初に、みんな自分の意見を出さないとき、ほんとに悶悶した。意見を出すことによって、だんだん、元気になって、仲間意識を持つようになる。けど、違いがなくなるというわけではない。ちょっと変わるかもしれないけど、まだそこにいる。みんな、違いをよそにして、一致することを見つける。

自分の居場所をわかって、生活ができる

この作業で、一番重要なのも、出すことだと感じる。したがって、同じな認識を持つかどうかより、出すほうが社会とつなぐためにもっと肝心だといえるかも。簡単に言えば、個人は出すことによって、ほかの人と理解しあって、つながって、自分の居場所をわかって、感心して、生活ができる。

自分のテーマへー中国の大学の国際化と私

私の研究テーマは中国の大学の国際化に関する。世界の大学の全体を社会だとすれ

ば、中国の大学は、この社会の個人である。国際化のプロセスは、ほかの大学につながるプロセスだと考えられる。国際化の手段として、自分の学生と教師を外に送ったりとか、外国の学生と教師を受けたりとか、外で学校を立てたりとか、外の教科書を輸入したりとか、こういうようなすべてを個人としての中国大学の出すことだと考えられる。

私の居場所はどこか

その結果として、中国の大学は世界の大学のことをもっとわかるようになって、お互いの違いと差がよく理解する上に、行動して、自分の居場所を磨いて、ほかの大学と共生する。ほかの大学も、中国大学の出すことによって、自分も出すようになって、同じな結果を得る。実際には、国際の目的がとても複雑で、こう簡単に語られないが、形は大体同じで、出すことも同じ重要だと思う。これから、どうやって出すか、私の居場所はどこかにについて考えたいと思う。

対談：細川英雄（H）×マルチェッラ・マリオッティ（M）

今回のワークショップを引き受けてくださったマリオッティさんが、このような活動の意味についてお話してくださっていますので、そのビデオを見たいと思います。

H：ヴェネツィアのカ・フオスカリ大学で、「考えるための日本語」のワークショップをしているんですけど、共同研究という形で、いっしょにこの実践研究を始めたんですけども、もともとマルチェッラさんが、この活動に興味をもったきっかけというのはどんなところにあるんでしょうか。

M：それは 2008 年に、学術振興会のおかげで、日本で 2 年間、ポスドクの援助金をもらって、そのとき、早稲田大学の細川先生のやってたゼミに参加し始めて、で、参加しながら感じていたのは、昔、社会学で修士していたときの、グラムシの概念である理論と実践の合体化とかをすごく実感で、肌で感じていましたので、通い続けたいと思いました。自分の育ってきた日本語教育と全然違う日本語教育でしたから、最終的にどういうふうになるんだろうという好奇心が強かった。

H：うん、2008 年に早稲田に、私のところに来てくださったんですけども、でもそれ、突然来てくれたわけではないですね。

M：あ、そうそう

H：早稲田に来るきっかけというのは・・・

M：博士論文を執筆中に、指導してくださった小川貴史先生がいまして、小川先生が当時は、ICU でゼミをしていたので、学生で ICU に行っていましたが、小川先生に紹介された細川さんが執筆の『日本語教育は何をめざすか』という本を、一応、博士論

文の一部分で細川理論を扱っていましたが、ぜひ細川先生にもお会いしたいなと思って、紹介していただきました。というようなきっかけです。

H：あ、そうですか。それで今回一応、共同研究という形で、このワークショップができたんですけれども、具体的に今回のこのワークショップの活動をやってみて、感じたこととか、お考えになったこととかありますか。

M：プログラムは素晴らしいなと思ってはいましたが、何が素晴らしいのかというと、まず、学生たちが、最初に登録してたのが 36 人でしたが、どのくらい大変なのかは感じてから、6、10 名くらいかな、リタイヤしました。残った人は、一生懸命参加してくれて、最初に書いたものと、メンターからもらった質問のおかげで、だんだん考えを反省したり、書いたりしたので、非常に効果がある教授法だと思いました。その効果は、どのくらいあるかということ、特にイタリアでは、オリエンタリズムが非常に強くて、みんなは日本あこがれ、なのに日本はこう、日本文化はこう、と書いているが、メンターの質問のおかげで、実際に自分が、その学生が考えていることが、日本だからこうと考えているのではなくて、別の動機で、別の理由でその発想があるとだんだんわかるようになってきました。えーっと、例えば、

H：ステレオタイプですね

M：そうですね。はい、はい。だから、(学生が)持ってたステレオタイプは、ステレオタイプだと認識できるようになってきて、最後までまだなっていないので、わからないけれども、24 人のなかで、その半分以上が、自分が考えたことはステレオタイプだったと、わかってきたかなと思います。

H：まだ、活動が最後まで終わっていないので、どうなるかわからないんですけど、その結果が楽しみなんですけど、そういう 2008 年からの出会いで、今からもう 5、6 年経つんですけど、今、あらためて、そして、マルチェッラさんの場合は、ヴェネツィアの大学で、実際に「考えるための日本語」を、モデルという言い方はおかしいかな、考え方を使った実践をしてらして、それで、今回、共同研究という形でワークショップができたんで、それはとっても、僕にとってもうれしいことなんですけど。実際にこの活動は、日本語教育としては、ちょっと、私は、マイナーな活動だと、私自身思っているんですけども、この活動の意義っていうか、この活動は何のためにするのかっていうことについては、どんなふうにお考えですか。

M：うーん、とても難しい質問ですけど、日本語教育というより人間教育かなと思います。将来のこと、今、現在 21 世紀のことを考えたら、国というか国籍という考え方では、どこにも自分の将来が見えなくなってしまうんで、この活動だと、どんな言語を使ってもいい活動だと思いますし、結局、何のための活動かと思うと、人間関係をもっと広い視野でみる。相互理解じゃないですけども、自己表現、自分が、なんていうんでしょうね……。この活動の重要性は、考える時間を与えてくれる。

一人で考えるのではなくて、別の人間がいて考えてるから、考えていることをその人間にどのように伝えたらいいのか。まず、何を考えているのかを考えて、でも一人で何を考えているのかははっきりわかるわけではないですね、インターアクションが少ないと、人間はそんなもんですからね。こちらがいいと思うことは、教科書がない。

H：あ、そうですか。

M：素材が人間です。教師も、教師というかメンターも、前もって準備するというよりも、ある状況、その学生、参加している人が提供してくれている素材を使って反応するんですね。だから、本当に、準備のためじゃなくて、その場で本当に行っている、インターアクション。つまり、これほど（＝このプログラムほど）リアリティのある「授業」は存在しないと思います。

H：ありがとうございました。

M：ありがとうございます。

メディエーションによってつくられる言語活動主体

特別出演でマツチェラ・マリオッティさんをお願いしました。時間も押してきていますので、最後に簡単にまとめたいと思います。

言語活動主体ということは、ことばを使って活動する一人の主人公になるということです。つまり、その言葉の活動の主人公として、充実した主人公になるにはどういうことか、と考えると、これが「テーマを発見する私」というものの存在を考えることになります。ここでは、次のようなことが言えるのではないかと思います。

つまり、言語活動によって様々な思考と表現のあり方を学びつつあるということ、それから、他者の存在を受け止めて、多様な価値観の錯綜するコミュニティの複雑性を理解するという、それから、複数のコミュニティの有り様のなかで、つまり人が属しているのは、単純にただ、ある社会、ひとつの社会、固定的な社会に属しているわけではなくて、複数のコミュニティに同時的に属しているので、そのそれぞれのコミュニティの中での自分のアイデンティティを確認していく、という作業になるわけです。それが、言語活動主体の充実につながっていく、そのためには、メディエーションという行為がすべての人にとって不可欠なものであると考えている次第です。

テーマのある議論から市民性形成へ

このことがいちばん初めにお話しした市民性教育というところとつながっていくんです。

各分野・領域の前提として、私の問題意識を問う活動から始める。これは決して準備主義ではなく、お手伝いでもなく、まさに、ここから始まっていく、つまり研究者として、

あるいは実践者としての私の問題意識を問う活動、というのが重要だということです。そうすると、日本語教育と一口で言っても、その目的あつての日本語習得だとすれば、その目的へ向けての言語活動を活性化させていくこと、それが重要なのではないか。それがすなわち、テーマのある議論、つまり中身のある議論だということなんです。

テーマのある議論というのは、自分の問題関心から問題意識へ、としだいにフォーカスしていく、自分の中のテーマを見つけていくという活動です。さらに、こういう活動をしていくと、母語話者であるとか非母語話者であるとかということはあまり重要な問題ではなくなります。むしろ、そういう区別を超える活動が必要になってくる。つまり、統合的な学習・教育を目指すことになるということなんです。行為者が、一個の言語活動主体として、それぞれの社会をどのように構成できるのかということを考えるための場を作っていく。それが私の言う「ことばの市民」という概念につながっていくと考えるからです。

残された課題—対象言語・自己開示・評価のあり方

最後に少し先回りして、私のほうから課題を出しておきたいと思います。

こういう話をすると、なぜこれ日本語か、別に日本語でやらなくてもいいんじゃないかという質問が必ず出ます。それは当然のことで、はっきり言ってしまえば、たまたま日本語であるだけなんです。いわゆる第3の社会化という、これはマイケル・バイラムが使っている用語ですけども、問題を批判的に見る活動がどうしても重要になります。それを目指しているわけで、必ずしも日本語でなければならないということではありません。そういう意味で日本語を教えることではないんです。母語で行ってもいいし、第2、第3言語で行ってもいいし、ある特定の言語、いわゆる言語学で定められた言語の枠で考える必要はないと考えています。

それからもう一つは、テーマ発見と自己開示の違いです。で、こういう活動をしていると、学習者の側からは自己開示をしたくない、先生のほう側からいうと、自己開示をさせた、させる必要があるのか、というような質問がでますけれども、このテーマの発見と自己開示というのは、全然質の違う問題だ、レベルの違う問題だと私は考えています。というのはテーマと自分との関係を提示するというのは、その提示する人の見る側の責任において提示するのであって、決して、無理強いはしていないんですよ。ですから、その自己開示、自己を開くということとは、根本的に異なる行為だというふうに考えています。

それから最後に、評価の問題。評価と言っても多くの場合は成績のことなんですけれども、評価をどうするかという課題です。ところが、この活動はまさに評価活動そのものなんです。常に評価し続ける活動なんです。評価というのは、私はこう思う、相手はそれに対してそれは違うだろう、いやそうだろう、違うだろうというような活動をする。それはもう評価活動それ自体なんです。それは成績をつけるかどうかということとは別の問題だ

と私は考えています。では、なぜ成績なのか、というと、言語教師たちはほとんどその問いには答えられないですね。山があるから山に登るというのと同じです。制度の中でそうになっているから自分も従うしかない。だから、成績をつけるんだ、それが制度というものだ、という、そういう弁法しか持っていません。そうではなくて、この活動自体は、大きな意味でいうと、制度への挑戦なんです。つまり、社会、私たちの社会はどうあるべきかということを問う活動なんです。ですから、どのような社会を作るかという意識を形成する活動ですから、人間を単純に数字で序列化することに対する、強い批判的な考え方のもとに作られています。ですから、どう評価すればいいか（成績をつければいいのか）という単純な問いには決して答えられないし、私は答える必要もないと考えています。最後に少し過激になってきましたが、メディエーションについて考えるということは、そういう課題もすべて含んでいるということを改めて申し上げたいと思います。

いろいろご意見をいただければ幸いです。どうもありがとうございました。

（拍手）

司会：何か質問がありましたら、せっかくの機会ですので、お受けしたいと思います。

発言者：先生、どうもありがとうございました。ひとつかふたつぐらいの質問をさせていただきますと思います。きょうの話は、私なりに賛成していると思いますし、特に、その最後のところで革命的な話でもあったので、非常に刺激をいただきました。ありがとうございます。今はどうなっているかわかりませんが、確かドイツでは 20 年前までは、大学はすべてではないけれども、あるコースでは、学生が参加して活動するさえすれば、成績、つまり試験を受けなくても、一応その単位もとれたという制度が存在してましたので、今、先生のお話を聞きましたら、やはり評価の問題は、その活動のなかで、もうすでにその評価っていうものが成り立っているわけですから、実際には、その制度上は試験があるので、試験を学生に受けさせなければならないということもあるという話だったんですけれどもね。先生のお話を聞きましたら、日本語教育の制度を完全にもう、根本からもう一回考え直さなければならないという結論が、私の頭の中にあつたんです。ひとつ素朴な話ですけども、先生のお話しなされた状況では、もうすでに外国人の学習者はある程度、言語的なつまり日本語の手段を、ある程度持っているという話ですね。ですから、文法的には確かに間違いがあつたり、あの言葉遣いとしてちょっとおかしいところもありましたけれど、結構いい、つまり自分が伝えたいことは、必ず、よく出てくるわけですね。しかし、例えば、この大学の 1 年生の場合は、マルチェッラさんも先生の方法、先生のモデルにしたがっていろいろやっているとありますが、ただ、マルチェッラさんが扱っている学生は、もうすでに 1 年、2 年のときに、たぶん先生の好ましくない日本語教育で一応日本語の文型とか、語彙を習ってきた学生なんです。私の素朴な質問は、初級レベルでは、抽象的なことを考えないで、実際には

教室でどのような教育を先生は考えていらっしゃいますか？

細川：はい、コメントとご質問ありがとうございます。その最後の1点だけお答えすればよろしいですか？ことばがつかえるということは、そのことばで表わしたい何かがあるということなんですね。けれども、その「表わしたい何か」にはまったくふれずに、ツールとしてのことばの構造や機能だけを学んでも、決して自分の言いたいことは言えるようにならない、ということです。たとえば、ヨーロッパで3年間も勉強してきた学生が、早稲田に来ると、ゼロのクラスに入れられてしまう。つまり、知識が十分にあるのに、それを活用することができない。もちろん、こうした現象は、滞在の初めだけで、日常生活である程度の量の言語シャワーを浴びることによってかなり改善されていきます。結果的に、飛び級する学生も少なくありません。ですから、私は、文法や語彙に特化したクラスを否定はしていません。そういうクラスも用意をしています。問題は、教師の側にある、はじめは文法の基礎をしっかりと勉強しなければだめだという思い込みでしょう。そういう思い込みを持っているところに、いきなり学習者が自ら表現する活動を見せられると、自分のやってきたことを全否定されているようで苦しくなる。だから、「初級からできるんですか」という質問が出るわけなんです。日本語教育の歴史からみると、すでに明治の終わりに、この対話によるやりとりの方法は開発されているのです。その源流は、フランスではじまっていますから、1800年代の半ばごろには、専門家の間ではこうした考え方が始まっていたということでしょうね。それが、1970年代後半のコミュニカティブ・アプローチを経て、一般的にはまだ定着していない。それはなぜかという課題ですね。これは近代の知識を一斉に与えるという方向の問題だとも言えますね。ということで、海外から日本に来る学生さんたちは、日本語を勉強するために日本に来るんですね。でも日本語を勉強するために日本に来てどうするの？（笑）と私は言いたいんですね。もっと大事なことがあるでしょと（笑）。だったら、その大事なことをちゃんと勉強しなさいと。日本語はそのツールなんだから、ツールとして磨くのに使ったらいい、そういうアドバイスをしています。大切なことは、「目的あつてのことば」ということだと思います。お答えになりましたでしょうか。ありがとうございました。

司会：それでは、時間のほうがだいぶ超過しておりますし、あとでまた話す機会もあるかと思しますので、細川先生の講演に関しては、これで終わりとしたいと思います。ちょうど今、3時24分なので、3時半まで休憩をして、そこから第2部に入ります。第2部は「日本語教育とアイデンティティ」ということに関係する様々な研究発表が行われます。それでは、一旦、休憩にします。

細川：はい、どうもありがとうございました。

（拍手）

「考えるための日本語ー日本と私ー」
ヴェネツィア・ワークショップ・プロジェクト報告

発行日 2016 年 9 月 30 日

発行 言語文化教育研究所

〒408-0311

山梨県北杜市白州町花水 278-43 ハヶ岳アカデメイア

info@gbki.org

発行責任者 細川英雄